

静岡埋蔵文化財調査研究所調査報告 第5集

大 谷 川 I

昭和58年度巴川(大谷川)総合治水対策特定河川事業
埋蔵文化財発掘調査報告書(神明原・元宮川遺跡)

1984

財団法人 駿府博物館付属
静岡埋蔵文化財調査研究所

静岡埋蔵文化財調査研究所調査報告 第5集

大 谷 川 I

昭和58年度巴川(大谷川)総合治水対策特定河川事業
埋蔵文化財発掘調査報告書(神明原・元宮川遺跡)

1984

財團法人 駿府博物館付属
静岡埋蔵文化財調査研究所

序

設立2年目を迎えた本研究所にとって、昭和58年度における大谷川埋蔵文化財発掘調査は、静岡平野における最初の事業となった。

調査対象となった神明原・元宮川遺跡は、弥生時代から奈良時代にかけての低湿地における集落遺跡として知られ、周囲には登呂遺跡、有東遺跡、汐入遺跡などの著名な集落遺跡のほか、宮川古墳群、伊庄谷横穴群、上ノ山遺跡などの古墳群もみられ、この地の中心的な遺跡の一つと考えられていた。ことに、昭和55・56年度には、静岡市教育委員会による大谷川河川改修事業関連の調査が実施されて遺跡の性格の一端が明らかにされたのであった。

今年度の調査は、この静岡市教育委員会の調査を継承するものであって、現地調査は4月から12月にわたり、整理作業は昭和59年度も引きつづき実施する予定である。その調査の成果はめざましく、古代の大谷川の流路から人形・馬形木製品・轟串・卜骨・夥しい数の土器などの祭祀遺物の出土をみ、神明原・元宮川遺跡を流れる大谷川が、古代の大規模な「水辺の祭り」の場であることが解明された。この事実は、今までの静岡平野における歴史認識に大きな変更を迫るほどのものであるとともに、今後、静岡平野の歴史を構成する上で貴重な手がかりとなるであろう。また、「カタシグサハシシラトボノマサニ」と書かれた木簡が出土し「倭名抄」記載の古代行政区画を証する貴重な資料を得たことも特筆すべき成果であった。

本報告書は、大谷川一神明原・元宮川遺跡の調査報告の「I」であり、今後引きつづき調査刊行される大谷川河川改修事業関連調査の「第一報」として重要な役割を果すであろうと確信したい。

なお、この調査に深い理解と協力をいただいた静岡県静岡土木事務所の方々に深い感謝の言葉をささげるものである。あわせて、静岡市教育委員会の配慮に対して心から謝意を表するとともに、静岡県教育委員会の指導助言に感謝するものである。また調査及び報告書の執筆に関係した当所員の辛労に対して謝意を表する。

昭和59年3月

財團法人 駿府博物館付属

静岡埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤 忠

例　　言

1. 本書は静岡市大谷・西大谷・水上・宮川・高松に所在する神明原・元宮川遺跡の調査報告書である。昭和58年度に発掘調査された遺構のすべてを報告するが、出土遺物は整理箱約600箱にも達する膨大な量であるため土器・木製品の一部を報告するにとどめる。残りについては次年度以降に改めて報告する予定である。
2. 調査は静岡県静岡土木事務所を委託者とし財団法人駿府博物館付属静岡埋蔵文化財調査研究所を受託者とし、静岡市教育委員会を調整者とする昭和58年度巴川（大谷川）総合治水対策特定河川事業埋蔵文化財発掘調査業務である。
3. 調査期間は昭和58年4月20日～昭和59年3月31である。現地調査は5月～12月実施、一部資料整理は併行して3月31日まで実施した。
4. 調査は静岡埋蔵文化財調査研究所、栗野克己（主任調査研究員）・小嶋日出一（調査研究員）が担当者としてあたった。
5. 本書の執筆分担は以下の通りである。

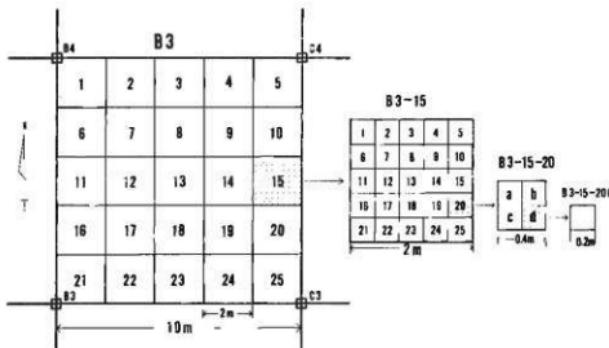
第Ⅰ章第1節・第4節、第Ⅱ章、第Ⅲ章第4節、第Ⅴ章………	栗野克己
第Ⅰ章第2節、第Ⅲ章第1節～第3節、第Ⅳ章……………	小嶋日出一
6. 発掘地点の土層の検討については静岡県教育研修所の高橋豊氏に、土層中の火山噴出物の同定は静岡大学農学部 加藤芳朗教授に依頼し、その結果は特論として掲載した。
7. 本書の編集は静岡埋蔵文化財調査研究所があたった。

凡 例

本書の記述については以下の基準に従がい、統一をはかった。

1. グリッド分割は次のとおりである。

グリッド分割



2. 文中にて発掘区の中の一部分を限定する場合、グリッド杭の並びにより、34列～37列あるいはF列～E列のように用いた。
3. 土器実測図には、報告書での見出番号、遺物番号、()内に出土グリッドの3つを併記した。宮川2区のものは範囲がせまいためグリッド名は除いた。木製品実測図には遺物番号とグリッド名のみ記した。
4. 観察表でグリッド欄に記されているN、MGはそれぞれN—西大谷、MG—宮川を示す。
5. 遺構・遺物の標記は次のとおりである。又、遺構番号は1地区での通し番号とした。

遺構遺物の標記

遺構(S)		遺物	
A 樹	G 小鍛冶遺構	W 木製品	
B 穴穴住居跡	H 掘立柱建物	P 土製品	
C 祭祀遺構	I 小穴・土坑	S 石製品	土器は番号のみで符号なし
D 溝	L 護岸遺構	M 金属器	
E 井戸	R 河川流路跡	B 玉類	
F 土壙	X その他	E その他	

6. 図版中等高線に付した数字の単位は〔cm〕である。

目 次

序		
第Ⅰ章 調査の経過	1	
第1節 調査前史	1	
第2節 調査に至る経過	2	
第3節 調査の方法	3	
第4節 調査の経過	4	
第5節 土 層	7	
第Ⅱ章 位置と環境	11	
第1節 地理的環境	11	
第2節 歴史的環境	14	
第Ⅲ章 遺跡の概要	15	
第1節 西大谷地区	15	
A 中世遺構	15	
34列～39列	15	
46列～50列	17	
B 古墳時代遺構	34	
第2節 宮川1区・2区	43	
第3節 旧大谷川	46	
第Ⅳ章 遺 物	62	
第1節 概 要	62	
第2節 土 器	63	
第3節 木 製 品	66	
第4節 木 筒	68	
土器観察表	91	
木製品観察表	102	
第Ⅴ章 【特論】 土層について	120	
第1節 神明原・元宮川遺跡宮川2区の火山灰層について	高橋 豊	120
第2節 静岡市神明原・元宮川遺跡の堆積層について	加藤芳朗	122
第VI章 ま と め	123	
参 考 文 献	126	

挿 図 目 次

第 1 図	軍需工場建設に伴う大谷川改修図	2
第 2 図	大谷川改修工事計画断面と埋蔵文化財発掘調査状況概念図	3
第 3 図	調査地点位置図	5
第 4 図	西大谷 2 区 I - J 土層断面図	9
第 5 図	大谷川周辺遺跡分布図	12
第 6 図	西大谷地区グリッド配図図	16
第 7 図	西大谷地区断面図	19
第 8 図	西大谷地区全体図	21
第 9 図	西大谷地区34列～39列中世遺構全体図	23
第 10 図	西大谷地区46列～50列中世遺構全体図	25
第 11 図	西大谷地区 S L21 漢岸状遺構図	26
第 12 図	西大谷地区46列～50列中世個別遺構図	27
第 13 図	西大谷地区 C 48・49 グリッド粘土採取跡	28
第 14 図	西大谷地区古墳時代遺構全体図	29
第 15 図	西大谷地区 I 34・J 35 グリッド古墳時代遺物分布図	31
第 16 図	西大谷地区 G 37・38 グリッド古墳時代個別遺構図	33
第 17 図	宮川地区グリッド配置図	36
第 18 図	宮川 1 区 2 区位置関係図	37
第 19 図	宮川 1 区全体図	39
第 20 図	宮川 1 区個別遺構図 1	41
第 21 図	宮川 1 区個別遺構図 2	42
第 22 図	西大谷地区旧大谷川内等高線図	47
第 23 図	西大谷地区旧大谷川内時代別遺物分布図	49
第 24 図	宮川 2 区断面図	53
第 25 図	宮川 2 区全体図 1	55
第 26 図	宮川 2 区全体図 2	57
第 27 図	宮川 2 区全体図 3	59
第 28 図	宮川 2 区杭立遺構図	61
第 29 図	土器実測図 1. S D15 埋土上層出土 土器	71
第 30 図	土器実測図 2. 西大谷地区旧大谷川内出土 須恵器	72
第 31 図	土器実測図 3. 西大谷地区旧大谷川内出土 土師器	73

第 32 図	土器実測図 4. 西大谷地区旧大谷川内出土 土師器 宮川 2 区出土 須恵器・土師器	74
第 33 図	人形実測図 1. 西大谷地区 F39、D43～D45グリッド出土	75
第 34 図	人形実測図 2. 西大谷地区 D46グリッド出土	76
第 35 図	人形実測図 3. 西大谷地区 D46グリッド出土	77
第 36 図	人形実測図 4. 宮川 2 区出土人形	78
第 37 図	西大谷地区出土大形人形・畜巾実測図	79
第 38 図	馬形木製品 1. 西大谷地区出土	81
第 39 図	馬形木製品 2. 西大谷地区出土、宮川地区出土	82
第 40 図	畜串実測図 1. 西大谷地区 F39～E43グリッド出土	83
第 41 図	畜串実測図 2. 西大谷地区 E43～D45グリッド出土	84
第 42 図	畜串実測図 3. 西大谷地区 D46グリッド出土	85
第 43 図	畜串実測図 4. 西大谷地区 D46グリッド出土	86
第 44 図	畜串実測図 5. 西大谷地区 D46～22グリッド出土	87
第 45 図	畜串実測図 6. 西大谷地区 D46～23グリッド出土	88
第 46 図	畜串実測図 7. 西大谷地区 E46グリッド出土	89
第 47 図	畜串実測図 8. 宮川 2 区出土	90
第 48 図	静岡市神明原・元宮川遺跡断面の地層性状図	121

図 版 目 次

- 図版 1 1. 神明原・元宮川遺跡航空写真——南より
2. 神明原・元宮川遺跡航空写真——南より
- 図版 2 1. 西大谷地区を上空より望む——北より
2. 西大谷地区を上空より望む——西より
- 図版 3 1. 西大谷地区発掘全風景——南より
2. 西大谷地区表土除去開始——南より
- 図版 4 1. 34列～39列中世遺構面精査開始——北より（西大谷地区）
2. 34列～39列中世遺構面——南より（西大谷地区）
- 図版 5 1. S D 5・S D 6・S D 12溝状遺構——南より（西大谷地区）
2. S D 5溝状遺構——南より（西大谷地区）
- 図版 6 1. S D 9溝状遺構——南より（西大谷地区）
2. S D 9溝状遺構とその断面——北より（西大谷地区）
- 図版 7 1. S D 6溝状遺構——南より（西大谷地区）
2. S D 2溝状遺構——北より（西大谷地区）
- 図版 8 1. 34列～38列古墳時代遺構面——南より（西大谷地区）
2. 34列～38列古墳時代遺構面——北より（西大谷地区）
- 図版 9 1. S D 24溝状遺構——西から（西大谷地区）
2. S D 24内木製遺物出土状態（西大谷地区）
- 図版 10 1. S X 60集石状遺構——東から I 35グリッド（西大谷地区）
2. 古墳時代初頭の土器分布状態 I 34グリッド（西大谷地区）
- 図版 11 1. 古墳時代初頭七器及び磯分布状態 I 35グリッド（西大谷地区）
2. 古墳時代初頭上器及び磯分布状態 J 35グリッド（西大谷地区）
- 図版 12 1. G 37・G 38グリッド付近古墳時代遺構面——北より（西大谷地区）
2. G 37グリッド付近古墳時代遺構面——東より（西大谷地区）
- 図版 13 1. G 36・G 37グリッド付近古墳時代遺構面——北より（西大谷地区）
2. 手前より S F 1・S F 4・S F 3土坑状遺構——北より（西大谷地区）
- 図版 14 1. S D 15溝状遺構——北より（西大谷地区）
2. S D 15溝状遺構——南より（西大谷地区）
- 図版 15 1. S D 15溝状遺構埋土上層土器出土状態（西大谷地区）
2. S D 15溝状遺構埋土上層土器出土状態（西大谷地区）
- 図版 16 1. 39列～44列旧大谷川河床面——北より（西大谷地区）
2. 39列～44列旧大谷川河床面——南より（西大谷地区）
- 図版 17 1. S L 21護岸状遺構——西より（西大谷地区）
2. S L 21護岸状遺構——南より（西大谷地区）
- 図版 18 1. 第4トレンチ断面——北より（西大谷地区）
2. 第4トレンチ断面——旧大谷川内堆積状態——北より（西大谷地区）
3. 発掘区西壁旧大谷川内堆積状態——東より（西大谷地区）
- 図版 19 1. F 40・41・42、G 40・41グリッド付近旧大谷川内河底疊堆積状態——南から（西大谷地区）

- 図版19 2. F 41グリッド付近日大谷川奈良時代以降流路——南より（西大谷地区）
- 図版20 1. F 42・43グリッド付近旧大谷川古墳時代後期流路——北より（西大谷地区）
2. F 42グリッド付近日大谷川古墳時代後期流路——南より（西大谷地区）
- 図版21 1. E 42、F 43グリッド付近断面に見られるII大谷川流路変遷状態——南より（西大谷地区）
2. F 43グリッド杭付近古墳時代流路堆積土（西大谷地区）
- 図版22 1. H 38・39グリッド遺物出土状態——東から（西大谷地区）
2. H 39グリッド遺物出土状態——東から（西大谷地区）
- 図版23 1. 第1トレンチ内牛形土製品出土状態G 41グリッド（西大谷地区）
2. 馬形土製品出土状態E 42-20グリッド（西大谷地区）
3. 人形土製品出土状態E 41-9グリッド（西大谷地区）
4. 木筒出土状態E 43-14グリッド（西大谷地区）
- 図版24 1. ト骨と伴出土器出土状態F 42グリッド（西大谷地区）
2. ト骨出土状態F 42グリッド（西大谷地区）
- 図版25 1. 獣骨出土状態E 41-9グリッド（西大谷地区）
2. 獣骨出土状態F 41-5グリッド（西大谷地区）
- 図版26 1. F 42グリッド付近遺物出土状態（西大谷地区）
2. 重なって出土した土師器壺と壺F 42グリッド（西大谷地区）
- 図版27 1. 鉢形木製品・木製模造刀出土状態F 42-2、F 43-22グリッド（西大谷地区）
2. 舟形木製品出土状態E 43グリッド（西大谷地区）
3. 銛の柄出土状態F 43-9グリッド（西大谷地区）
- 図版28 1. E 43～D 43土手付近遺物出土状態（西大谷地区）
2. E 43～D 43土手付近遺物出土状態（西大谷地区）
3. E 43～D 43上手付近遺物出土状態（西大谷地区）
- 図版29 1. 土器出土状態E 43グリッド（西大谷地区）
2. 須恵器高环出土状態E 43グリッド（西大谷地区）
- 図版30 1. 土器出土状態D 45グリッド（西大谷地区）
2. 須恵器大形壺出土状態D 45-2グリッド（西大谷地区）
- 図版31 1. D 46・E 46グリッド付近日大谷川右岸部——南東より（西大谷地区）
2. D 46グリッド付近日大谷川右岸部堆積土E 47杭～E 48杭断面（西大谷地区）
3. D 46・E 46グリッド付近日大谷川右岸部——西より（西大谷地区）
- 図版32 1. 旧大谷川右岸部遺物出土状態——北よりD 46グリッド（西大谷地区）
2. 旧大谷川右岸部土器出土状態——東よりD 46グリッド（西大谷地区）
- 図版33 1. 斎串出土状態D 46グリッド（西大谷地区）
2. 人形・斎串出土状態D 46グリッド（西大谷地区）
- 図版34 1. 斎串等木製品出土状態D 46グリッド（西大谷地区）
2. 横櫛出土状態D 46グリッド（西大谷地区）
- 図版35 1. 旧大谷川右岸部遺物出土状態——東よりD 46グリッド（西大谷地区）
2. 旧大谷川右岸部遺物出土状態——北西よりD 46グリッド（西大谷地区）
- 図版36 1. D 46グリッド籠出土状態（西大谷地区）
2. D 46グリッド籠出土状態（西大谷地区）
3. D 46グリッド瓶・削り掛け様木製品出土状態（西大谷地区）

- 図版37 1. D 46グリッド籠出土状態（西大谷地区）
2. D 46グリッド曲物容器出土状態（西大谷地区）
- 図版38 1. 46列～50列の中世遺構面——南より（西大谷地区）
2. 46列～50列の中世遺構面——北より（西大谷地区）
- 図版39 1. S D 28溝状遺構——北より（西大谷地区）
2. S D 29溝状遺構——南より（西大谷地区）
- 図版40 1. S H 39掘立柱建物柱穴——北より（西大谷地区）
2. S P 32上坑状遺構——南より（西大谷地区）
3. S P 38柱穴状遺構——北より（西大谷地区）
- 図版41 1. S X 25粘土採取跡（西大谷地区）
2. S X 25壁面状態（西大谷地区）
- 図版42 1. S X 34粘土採取跡（西大谷地区）
2. S X 36粘土採取跡（西大谷地区）
- 図版43 1. 宮川1区調査開始——東より
2. 宮川2区調査開始——南より
- 図版44 1. 宮川1区奈良・平安時代遺構面全景——南より
2. 宮川1区奈良・平安時代遺構面全景——北より
- 図版45 1. S E 1井戸状遺構——東より（宮川1区）
2. S E 2井戸状遺構——東より（宮川1区）
3. S E 3井戸状遺構——北より（宮川1区）
4. S P 11上坑状遺構——北より（宮川1区）
5. S P 13土坑状遺構——北より（宮川1区）
- 図版46 1. S D 4溝状遺構——西から（宮川1区）
2. S D 4溝状遺構断面——東から（宮川1区）
- 図版47 1. S D 5溝状遺構——南より（宮川1区）
2. S D 5溝状遺構断面——南より（宮川1区）
- 図版48 1. S E 6井戸^j——西より（宮川1区）
2. S E 6井戸^j——北より（宮川1区）
3. S E 6井戸^j——南より（宮川1区）
4. S E 6井戸——内部（宮川1区）
- 図版49 1. 宮川2区調査完了状態——南より
2. 宮川2区調査完了状態——北より
- 図版50 1. 中世杭列——南東より（宮川2区）
2. 旧大谷川内堆積粘土中遺物出土状態（宮川2区）
- 図版51 1. 遺物出土状態——南より（宮川2区）
2. 木製品出土状態（宮川2区）
- 図版52 1. S D 15溝状遺構埋土上層—括出土土器
- 図版53 1. 西大谷地区旧大谷川内出土須恵器・灰釉陶器・山茶壇
- 図版54 1. 西大谷地区旧大谷川内出土須恵器・灰釉陶器・上師器
- 図版55 1. 西大谷地区旧大谷川内出土七輪器
- 図版56 1. 西大谷地区旧大谷川内出土上師器・宮川2区旧大谷川内出土須恵器・土師器

図版57 1. 西大谷地区・宮川2区旧大谷川内出土人形木製品

図版58 1. 西大谷地区旧大谷川内出土人形木製品・齋串

西大谷地区・宮川2区旧大谷川内出土馬形木製品

図版59 1. 西大谷地区旧大谷川内出土齋串

図版60 1. 西大谷地区・宮川2区旧大谷川内出土齋串

図版61 1. 第1号木簡

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査前史

はじめに「神明原・元宮川遺跡」という複合名称について説明しておきたい。従前には「神明原遺跡」・「元宮川遺跡」という別々の名前で登録された遺跡であった。(文献1) しかも、地点は約600m程離れ、それぞれの範囲も狭かったのであるが、遺跡周辺で昭和40年代に実施された農地改良事業後の埋蔵文化財出土分布調査の結果、土器片の散布地域が広がりをみせ、両者の区分ができず合併してしまい静岡市内では最大面積の遺跡となつたのである。(文献40) そこで地名を検討しなおして新しい名称をつけるという方法もあるが、両遺跡名ともに学術的にも捨てがたく、複合名称を使うこととした。

元宮川遺跡は、静岡県史(昭和5年)と静岡市史(昭和6年)に記載のあるのが初見である。その一部を紹介すると次のようである。

- ① 繩文式文化時代の遺物出土地として、大谷区元宮川——石錘、敲石、打製石斧(縣史1卷264頁)
- ② 弥生式文化時代の遺物出土地として、大谷区元宮川——弥生式土器片、石錘六(縣史1卷365頁)

その後、大澤和夫氏が「有渡山塊の考古学的調査」(昭和10年)にとりまとめたなかに、上記①②に加えて次のことが記されている。

- ③ 古原時代の古墳として宮川、元宮川——圓墳?

宮川部落西方の田中にあり、石櫛を地下にもつものらしく草地に下に空洞ある音あり。

(静岡縣郷上研究第5号 139頁)

以上のように縄文・弥生・占墳時代の遺跡としてとりあげられている。

一方、神明原遺跡に関しては昭和29年に行なわれた農地改良工事によって、高松神社の南側付近で発見された土師器・須恵器・井戸枠・住居址の出土地として「静岡県遺跡地名表」(昭和36年)に登録されたのである。その時に発見された遺物は登呂考古館および明治大学所蔵品となっているが、そのうち土師器について望月董弘氏が「土師式土器集成」(昭和48年)に発表されている。(文献22)

次に、昭和17年に実施された大谷川改修工事について取り上げておきたい。

静岡市内に民間協力の軍需工場2ヶ所の建設が計画され、登呂の地に航空機のプロペラを製造する住友金属(扶桑金属)工場を、天白松付近に航空機用エンジンをつくる三菱金属工場を建てるうことになった。工場予定地周辺部は滯水する低地であり、工場用地造成に先立って排水路として大谷川の改修工事が実施されたのである。それまでは大きく蛇行していた大谷川を直線的になるとともに、海岸付近で東流する河口部の砂丘を切って直接海へ放流させている。当時は艱時中であり建設重機もなく、労働力として朝鮮半島から強制的に連行されてきた人々があつてられた。引き続き昭和18年には両工場の造成工事が行なわれたが、扶桑金属工場の建設にあたって南側の水出地帯および片山丘陵を採土地として造成工

事を開始したところ、水田地帯から多量の木片が発見された。木片の多くは工事現場の燃料として燃や



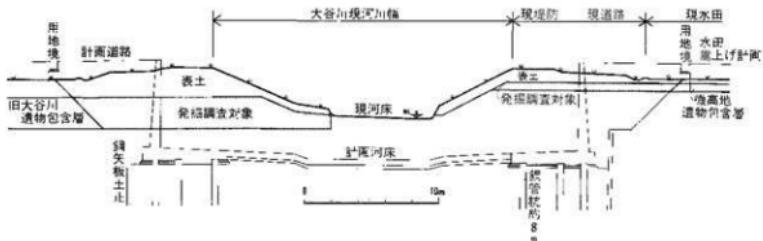
第1図 軍需工場建設に伴う大谷川改修図——文献42

されてしまったが、弥生時代後期の土器とともに杭列・水印跡・各種の建築材料・木製容器・火薬臼・弓・鉛・鋤などの農工具・機織具・ガラス・銅環などが発見され、戦後の発掘調査と合わせて我が国の代表的農耕集落遺跡『登呂遺跡』として脚光をあびたのである。

一方、大谷川の改修工事によって大規模に破壊されたとみられる神明原・元宮川遺跡は、特に注目されることはなかったようであるが、弥生土器・上帥器・須恵器・杭列・木製の櫛等が発見され、元宮川では川の中から完形の十器が出土するなど一部では話題にあがった遺跡であった。

第2節 調査に至る経過

静岡市の沖積平野の北東部低地の浅畑沼から、轟名を経由し清水市の中心部を通り、清水港へ流れる巴川の流域は水害が悪く、昔から浸水被害が幾度となく発生するうえ、流域の市街化が進むといった状況であり、静岡県（静岡土木事務所）では「巴川総合治水対策特定河川事業」として河道の改修・放水路の建設・遊水地の整備をはじめとする事業をすすめている。その一つとして静岡市の南東部を流れる大谷川を改修し、巴川へのつなぎ、放水路としての機能をもたせる計画があり、下流部において、神明原・元宮川遺跡が工事にかかることになり大谷川放水路建設工事に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査が昭和55年度から実施されることとなった。



第2図 大谷川改修工事計画断面と埋蔵文化財発掘調査状況概念図

神明原・元宮川遺跡の範囲は、海岸より330mの地点から1500mの地点まで南北約1.2km・東西約0.5km・500,000m²を越える広範囲なものとなっている。現在の大谷川はちょうど遺跡の中央部を南北に縱貫する位置にある。(第3図)

昭和55年度は右岸330m—610mの1,800m²と、昭和56年度は右岸610m—710mの1,300m²とをあわせて、右岸側で延長380m区間を静岡市教育委員会が発掘調査した。これを高松地区とする。(市教委は地区名をつけていないが遺跡全体を取り扱う上で現在の地名にもとづく地区割を実施した。)

この調査では弥生時代後期・古墳時代後期～奈良・平安時代の住居跡・高床倉庫・溝・土坑・井戸等の遺構と各時代の遺物が発見されている。特に注目されるのは土製の人形(ひとがた)・異形土製品・手握土器が平安時代の溝の中から発見され、祭祀を想定させる出土状況がみられることや、南側の旧大谷川流路から「古墳時代後期の須恵器・上師器が多量にしかも大半が完成品に近い形でまとまって出土している」という点である。集落とそれに伴う祭祀という性格を持つ遺跡として確認されたのであった。昭和57年度は調査は行われなかった。

昭和58年度は静岡埋蔵文化財調査研究所があたることとなり、左岸660m—830m(西大谷地区1区・2区)と1,400m地点の橋脚部分(宮川地区1区・2区)の2カ所3,905m²を発掘することとなった。調査期間は昭和58年4月～昭和59年3月までとし、現地調査は5月から12月まで延8カ月間行われた。

第3節 調査の方法(第6図・17図、凡例)

発掘調査に当たっては、大谷川河川改修用の座標系に合せ10m×10mのグリッドを発掘区全体に設定した。各グリッド杭の名称は、南から1・2・3………の数字、西からA・B・C………のアルファベットを付し、この組み合せでA1・B2のように表記した。グリッドの名称は各グリッドの西南に位置する杭の名称を用いた(西南優位とした)。なお、南北列の数字は遺跡全体を通し一貫して付けられているが、東西列のアルファベットは発掘地区ごとに与えられている。

58年度の調査は西大谷地区で大谷川河口基準点より665m～830mの左岸部、宮川地区で1,377m～1,407mの両岸において実施した。そして調査工程上、西大谷地区で665m～760mを西大谷1区、760m～830mを西大谷2区とした。これはグリッドの上では、34列～43列が1区、43列～50列が2区

ということになる。宮川地区では右岸部を1区、左岸部を2区とした。

当初、西大谷1区で表土除去を行った時点で大谷川の古い流路(旧大谷川と呼称)が確認されたが、この流路内に堆積した粘土・砂礫は古墳時代～中・近世に至る多量の遺物を包含していた。従って調査は從来予想されていた弥生時代～中・近世の集落ではなく、旧大谷川・平安～中世遺構面・弥生後期～古墳時代初頭の遺構面となった。このような状況は宮川地区でも見られ、宮川1区では奈良・平安時代の遺構面の調査となり、対岸の宮川2区では旧大谷川の調査となった。

資料の取り扱い等については、本調査研究「発掘調査資料の取り扱いについて」によっており、遺構・遺物の標記は凡例に示した通りである。

実測図の縮尺は平面図・断面図とも $1/20$ とし、詳細図が必要な場合には、 $1/10$ で作製した。

写真撮影は、 6×7 判中型カメラを主に用い、メモ用に35mmカメラを使用した。

第4節 調査の経過

58年度大谷川の発掘調査は西大谷地区・宮川地区と呼称した2地点で実施された。

西大谷地区では発掘区中央部分より旧大谷川が検出された。その南側から中世と古墳時代初頭の2面の遺構面が検出され、北側からは中世の遺構面が検出された。又、旧大谷川内堆積砂礫・粘土中より古墳時代後期～奈良・平安時代に至る時期の多量の祭祀遺物を検出した。

宮川地区では大谷川右岸側を宮川1区と呼び左岸側を宮川2区と呼んだ。宮川1区では奈良・平安時代の遺構面を検出した。宮川2区では西大谷地区同様旧大谷川の右岸部を確認し、古墳時代後期の祭祀遺物を検出した。以下に発掘作業の経過を記す。なお、一部の整理作業に関しては発掘開始より現在まで継続して行っている。

調査経過

4月

器材運搬等発掘調査準備を行う。

5月9日～5月13日

西大谷地区にて表土除去を行い、プレハブ・トイレ等の施設を設置する。宮川地区にて試掘を行い、遺跡の範囲内であることを確認する。

5月16日～5月20日

西大谷地区にて中世遺構面の精査を開始するとともに、層序を観察するために第1・第2トレントを人れる。又、発掘区で旧大谷川の流路跡を確認する。宮川地区では試掘調査を継続する。

5月23日～5月27日

第1トレントにて標高4m(地表下1.5m)程度で砂礫層を検出する。この砂礫層中より7世紀代の須恵器・土師器・牛形土製品が出土した。砂礫層は古墳時代の大谷川河底堆積物と考えられた。新たに第3・第4・第5トレントを入れ上層を観察するとともに、古墳時代の大谷川流路の岸の検出作業を行う。前週に引き続き中世遺構面の精査を行う。宮川地区では試掘調査を継続する。



第3図 調査地点位置図

5月30日～6月3日

中世遺構面の精査を継続するとともに、旧大谷川の左岸を確認するために試掘坑をあける。その後、旧大谷川河底堆積砂礫層（遺物包含層）まで重機による掘り下げを開始する。

6月6日～6月10日

前週に続き旧大谷川河底堆積砂礫層上面までの掘り下げを行う。40列杭以南の中世遺構の精査を終り実測を開始する。

6月13日～6月17日

前週に続き旧大谷川河底堆積砂礫層上面までの掘り下げを行うとともにF39・40グリッドにて砂礫層の精査を行う。これにより砂礫中より古墳時代～奈良・平安時代の遺物を多量に検出する。

6月20日～6月25日

F40・41グリッドの砂礫層の精査を行う。G38グリッドの古墳時代初頭の遺構の精査を開始する。

6月27日～7月8日

E41・42、F41・42・43、G39・40グリッドで砂礫層の精査を行う。G37・38グリッドで古墳時代初頭の土器集中部分の精査を行う。

7月11日～7月22日

D42・43、E41・42・43、F41・42・43グリッドで砂礫層の精査を行う。G37・38グリッドの古墳時代初頭の土器集中部分の実測を行う。

7月25日～7月29日

39列杭から43列杭までの旧大谷川内砂礫層の精査を終了する。I34・35・36、J34・35・36グリッドで古墳時代初頭の遺構面への掘り下げを開始し併行して精査を行う。

8月1日～8月12日

I34・35・36、J34・35グリッドで古墳時代遺構面の精査を行い溝状遺構・土坑・焼上等を検出する。旧大谷川内砂礫層精査終了部分で基盤層であるシルト層上面を1m方眼で標高測定する。又、グリッドの境に残しておいた土層帯を写真撮影・実測後除去する。

8月16日～8月26日

H37、I34・35・36・37、J34・35グリッドで古墳時代遺構面の精査を行う。D44・E44・F44グリッドで砂礫層の掘り下げを行う。

G38・39、H37・38グリッドの旧大谷川部分で砂礫層上面まで重機により掘り下げを行う。同時に大谷川堤防斜面部分でも旧大谷川内堆積砂礫層まで掘り下げる。

8月29日～9月2日

H37、I34・35・36・37、J34・35グリッドにて古墳時代遺構面の精査を行う。G38・39、H37・38グリッドで旧大谷川河底堆積砂礫層の精査を行う。

9月5日～9月17日

宮川1区で安全対策を行った後、表土除去を行い奈良・平安時代遺構面精査に入る。溝・土坑・井戸等の遺構を検出する。

西大谷地区では古墳時代遺構面の精査を継続するとともに、G 38・39、H 37・38グリッドで砂礫層の精査を行い、その後、写真撮影を行う。

9月19日～9月29日

宮川1区で遺構面の精査を継続する。

西大谷地区ではD45グリッドで砂礫層の精査を行い、併行して古墳時代遺構の写真撮影・実測を行う。

10月3日～10月14日

西大谷2区ではD45・E45グリッドで旧大谷川内砂礫層の精査を行う。E列の土層帯断面を写真撮影・実測する。

宮川2区では全景写真の撮影と実測を行い発掘調査を終了する。

10月17日～10月28日

西大谷地区ではE44～E46グリッドにかけての土層帯をはずし全景撮影を行う。その後、標高計画を行いう。

宮川2区で表土除去・安全対策を行い発掘を開始する。

10月31日～11月12日

西大谷地区でC・D・E46グリッドからC・D・E49グリッドにかけ重機による表土除去を行った後、遺構検出及び旧大谷川右岸検出作業を行う。

宮川2区では旧大谷川右岸部を検出し、中世杭列と古墳時代の遺物の検出作業を行い、併行して実測を行う。

11月14日～11月30日

西大谷地区では、C・D・E46～49グリッドの遺構検出作業と、D46・E46付近の旧大谷川右岸部の古墳時代遺物検出作業を行う。

宮川2区では実測と併行して遺物の取り上げを行い、全景撮影後発掘を完了する。

12月1日～12月10日

西大谷地区ではC・D・E46～47グリッドで遺構精査と実測を併行して行う。D46・E46・47グリッドでは旧大谷川右岸の調査を行う。又、発掘区を北方へ10m拡大する。

59年度以降の調査予定地の試掘調査に入る。

12月12日～12月24日

西大谷地区でC・D・E46～49列の遺構の実測・写真撮影を行う。旧大谷川部分にかかる大谷川堤防斜面を除去し、砂礫層の精査を行う。

試掘調査を継続して行い、24日現地調査を終了する。

第5節 土層

(1) 西大谷地区的土層は西側より張り出す微高地部分、微高地から旧大谷川への傾斜面の部分、旧大谷川流路内でそれぞれ異なる。(第4図一土層断面概念図)

この地域の基本層序がみられるのは微高地部分である。第4-1・2図の土層でG・H・Iの層序が

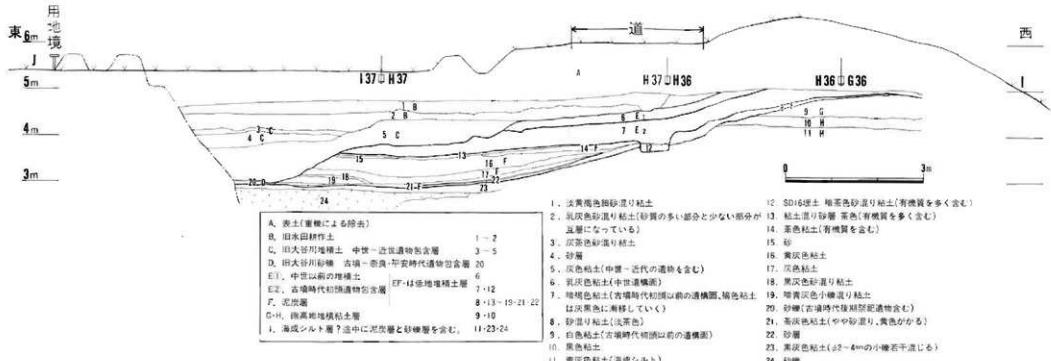
これである。G層が古墳時代～中世の遺構面となっており、この上にC層の中世の遺物包含層と一部に古墳時代の遺物包含層E2層が検出された。C層の上には水田耕作土や表土・盛土がのっている。

この微高地の末端からII大谷川流路への斜面に堆積しているのがE1・E2層である。E1層は中世の遺構面でありG層に似るが若干砂質が強い。この下のE2層は古墳時代の遺構面となっている。

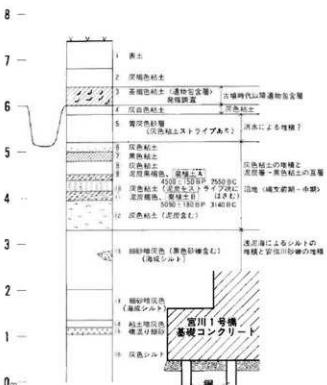
III大谷川は、基本的には第4-2図に示すとおり、微高地部分の基本層序を切って流れているが、第4-1図に見られるように中世の流路CがE層を切っている部分もある。流路内の堆積は河床に0.2m～2.5m（平均1m程度）の砂礫が堆積し、この中に古墳時代～奈良・平安時代の遺物を多量に包含（D層）している。この砂礫層を細分することはできないが、一部で古墳時代の堆積と奈良時代以降の堆積を分離することができる。この砂礫層の上には中世の堆積の灰色粘土（C2層）が1m以上堆積し、さらにその上に、近世以降の堆積の赤褐色砂礫C1層がある。これらの状況から、中世には河口部の閉塞、あるいは、海水平面上昇等により流れが悪くなり急速に堆積したものと推定される。又、近世以降の堆積の赤褐色砂礫は有度山の礫層を形成する礫に類似しており、近世以降、有度山の伐採が進み土砂の流失は激しくなり、これが旧大谷川に堆積した可能性がある。日本平の開析谷から流れる川は流出する砂礫により天井川となっている。

(2) 宮川1区での層序は西大谷地区の微高地のそれとは若干異なり、第4-3図のように①表土の下に③茶灰色砂混り粘土の遺物包含層があり、その下が、④の黄灰色又は灰白色の砂質土からなる地山遺構面となる。この③層の下には西大谷地区で観察されたような黒色粘土の上に灰色粘土があり、さらに下層には腐植土A・Bとした泥炭層がみられ、その下層の海成シルトに移行する。このように、宮川1区は西大谷地区より層序が多い傾向がみられる。

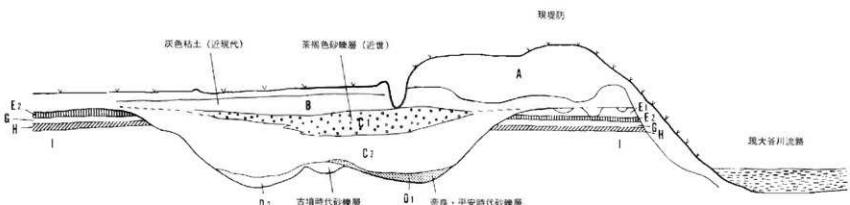
(3) 宮川2区ではII大谷川流路が黒褐色の粘土を切っている状態が観察されたが、この黒褐色の粘土と宮川1区の土層との関連は明確ではない。



第4-1図 西大谷2区I-J土層断面図



第4-3図 宮川1区標準土層柱状図(微高地)



第4-2図 西大谷地区日大谷川土層断面概念図

第 II 章 位置と環境

第 1 節 地理的環境

静岡平野は北を竜爪山、南を駿河湾、東を有度山、西を花沢山・高草山の山塊により囲まれた範囲に、主として安倍川・葵科川の堆積作用により形成されたものである。この平野の地形的要素は①安倍川扇状地②有度山麓に形成された扇状地③巴川低地④登呂低地が上げられ、その中に谷津山、八幡山の孤立丘がある。以下にこれらの諸地域の形成過程—静岡平野の形成過程—を概観してみたい。

(1) 古静岡湾の時期（縄文時代早期）

縄文時代早期（B.C. 約 6000 年）、海水面上昇による相対的地盤沈下により海水が巴川北側の山麓まで浸水し「古静岡湾」とも言うべき湾が形成された。有度山・谷津山・八幡山は湾内の島であった。

(2) 古静岡湾の潟湖化（縄文時代後期）

縄文時代後期（B.C. 3000 年頃）、安倍川の堆積作用により古静岡湾は潟湖化する。

安倍川は静岡・山梨県境を水源地として南アルプス前衛の山間部を南流する。その流域は第三紀層の瀬戸川層群で構成されているが、これは砂岩・頁岩を主としており、岩石の破碎作用が著しい。そのため山地で破壊現象が諸々に発生し多量の土砂礫が下流に運ばれてきた。又、有度山の存在が、海流によりこの砂礫が運び去られることを防ぎ、安倍川河口右岸から有度山南山西麓にかけて浜堤と砂丘が発達した。この浜堤と砂丘が古静岡湾の南側を封鎖し潟湖化させた。

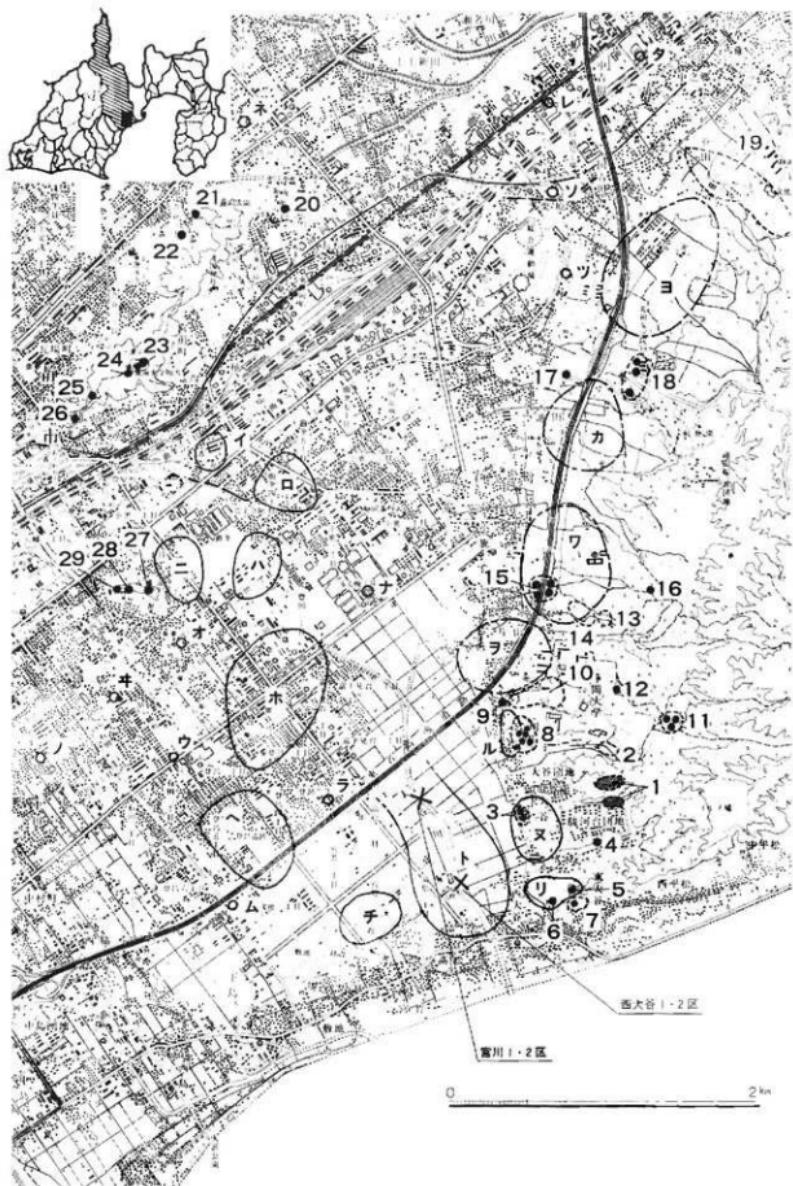
(3) 安倍川扇状地の形成と、巴川低地と登呂低地の分離

(2)で形成された潟湖の中に安倍川の扇状地が発達していく。一般に扇状地は山麓より扇状に形成されるが、ここでは賤機山山塊が南方へ突出していること、海岸に砂州が発達すること、東側に低地が広がること、葵科川が西方より流れ込むこと等から下流方向（南方）へは形成されず、東方へと発達した。更に、この扇状地末端からヒトデ形状に自然堤防が延びている。この堆積作用により潟湖は縮小し、東西方向に発達した安倍川扇状地・自然堤防により、北方に麻機沼、南方に富士見沼を残し巴川低地と登呂低地に分離された。

およそ、以上のような過程を経て静岡平野は形成されたと考えられる。それでは次に今回発掘調査された神明原・元宮川遺跡が位置する大谷川流域についてさらに詳しくみてみることにする。

大谷川流域は静岡市街地の東南にあり、先述した登呂低地に含まれ、南は駿河湾、東に有度山の斜面を望む位置にある。大谷川はこの有度山麓及び周辺市街地を集水系とする極く短かい河川である。又、河口に至るまでの標高差が極く小さく、以前はもっとも低い部分を縫うように大きく蛇行して流れていったが、現在は 1943 年の改修により直線的に流れている。この大谷川流域は地形的要素により①大谷川沖積低地②有度山西南麓地域③海浜部地域の 3 つに分けることができる。

①の大谷川沖積低地は標高 6 m 程度の低灘な冲積地が広がり、局所的に、かつての沼沢地跡と考えら



第5図 大谷川周辺遺跡分布図(伊庄より)

第2表 周辺遺跡地名表

番号	古墳群(群)名	形	埴	丘	内	部	主体
1	伊庄谷	横穴	内 墓	后	横穴	横穴	
2	卢山	横穴	后	后	横穴	横穴	
3	井生段	古坟	后	后	横穴式石室	横穴式石室	
4	古向	横穴	后	后	横穴式石室	横穴式石室	
5	不勤	横穴	后	后	横穴式石室	横穴式石室	
6	不勤谷	古坟	后	后	横穴式石室	横穴式石室	
7	東冥	古坟	后	后	横穴式石室、組合式箱形石棺	横穴式石室	
8	大川	古坟	后	后	横穴式石室、組合式箱形石棺	横穴式石室	
9	山	古坟	后	后	横穴式石室、組合式箱形石棺	横穴式石室	
10	静	古坟	后	后	横穴式石室、組合式箱形石棺	横穴式石室	
11	奥	古坟	后	后	横穴式石室	横穴式石室	
12	大谷	古坟	后	后	横穴式石室	横穴式石室	
13	さそく	古坟	后	后	横穴式石室	横穴式石室	
14	深ノ内	古坟	后	后	横穴式石室	横穴式石室	
15	小野	古坟	后	后	横穴式石室	横穴式石室	
16	掘ノ内	古坟	后	后	横穴式石室	横穴式石室	
17	池田	古坟	后	后	横穴式石室	横穴式石室	
18	谷	古坟	后	后	横穴式石室	横穴式石室	
19	茶臼	古坟	后	后	横穴式石室	横穴式石室	
20	苔谷	古坟	后	后	横穴式石室	横穴式石室	
21	上山	古坟	后	后	横穴式石室	横穴式石室	
22	井上	古坟	后	前	前方後圓墳	前方後圓墳	
23	袖木	古坟	后	前	前方後圓墳	前方後圓墳	
24	八津	古坟	后	前	前方後圓墳	前方後圓墳	
25	蒲水	古坟	后	前	前方後圓墳	前方後圓墳	
26	水公	古坟	后	前	前方後圓墳	前方後圓墳	
27	蘭山	古坟	后	前	前方後圓墳	前方後圓墳	
28	山鼻	古坟	后	前	前方後圓墳	前方後圓墳	
29	神社	古坟	后	前	前方後圓墳	前方後圓墳	

従現在のところ遺跡としての範囲、またその実体を把握できかねるが、広くまた数ヶ所にわたる散布地が一つ一つの丘陵を単位として遺跡を形成していると考えられる。仮称である。(文部省37より)

られる標高5m程度の地点が分布している。この地域は以前は水田地帯であったが、最近は盛土等により畠地化し、ハウス栽培がさかんに行われ、又、宅地造成が進み、急速に市街地化している。

②の有度山西南麓地域は丘陵性の地形を呈す有度山塊の西南側に標高90m程の台地状緩傾斜面と、そこから大谷川に流れこむ伊庄沢川・人正寺沢川など短小な河川水系によりつくり出された小規模な押出状扇状地が展開している。このうち台地状緩傾斜面は茶畠、みかん畠として利用されている。又、標高20m程の山麓沿いにむかしから人口が集中していた。この地域もやはり、最近になり宅地造成が急速に進み、山麓から中腹にかけての景観は大きく変わりつつある。

③の海浜部地域は、波浪や、季節風の営力により形成された砂堤・砂丘の広がる地域にあたる。畠地として利用されているが、古くからの久能街道が通りそれに沿って村落が営まれている。

以上が大谷川流域の自然的環境のおおよそである。次に歴史的環境について記述する。

第2節 歴史的環境

有度山麓の台地性丘陵上には、縄文時代の遺跡や数多くの古墳が分布しており、その前方に発展している扇状地では弥生時代以降の遺跡が多くみられる。

縄文時代の遺跡は小鹿丘陵・片山丘陵・池田丘陵等、広い範囲に分布しており、現在までに、神明原・元宮川遺跡のすぐ東側に位置する宮川遺跡と上ノ山遺跡が発掘調査されている。

弥生時代にはいると、国鉄東海道線の南方に広がる低湿地や、台地性丘陵上に、多数の水田・集落遺跡がみられるようになる。低湿地では、国鉄静岡駅より南方約2kmの地点の弥生時代後期を主とする登呂遺跡をはじめとして、その北方には弥生中期を中心とする有東遺跡や弥生後期の豊田遺跡・小黒遺跡が、南方には弥生後期～古墳時代後期の集落跡である汐入遺跡がみられる。台地性丘陵では前述した宮川遺跡・上ノ山遺跡において弥生後期の住居跡等が検出されている。

古墳時代には、平地上に集落跡がみられる一方、丘陵上に古墳が群在している。先ず古墳時代初頭に宮川遺跡・上ノ山遺跡においては円形周溝墓・方形周溝墓がみられる。前期の古墳としては、静岡駅より北側にある全長110mの袖木山神古墳が、この地域における最古かつ最大の前方後円墳としてあげられる。有度山麓では北側に、瓢箪塚古墳がみられる。後期になると、有度山麓西側の台地性丘陵上には、多数の古墳が作られている。古墳は南北向、もしくは東西向き斜面に、多くは群をなして存在している。北からみていくと、谷田古墳群・池田山古墳群・石棺が5個安置されていた小鹿山ノ神古墳・静大橋内古墳群・諏訪神社古墳や大規模な横穴式石室を持つアサオサン古墳や家形石棺と組合式箱形石棺の出土した丸山古墳を含む宮川古墳群・30基以上の横穴のまとまりが南北に2支群みられる伊庄谷横穴群・井庄段古墳群等があげられる。これらの古墳の立地する幾つかの台地性丘陵西側のゆるやかなスロープ上には、比較的規模・内容共に有力な古墳がみられる一方、小河川に面した南側急斜面や各地塊基部には、小規模の古墳が分布している。

歴史時代の遺跡として、駿河国分寺の候補としてあがっている「片山廃寺跡」が、有度山麓の東名高速道路がかかる地点にあり、墨書き土器「客人」を出土した中田ケイセイ遺跡が、登呂遺跡の西方の沖積平野に存在する。また曲金付近の条理地割についてもその広がりが、南西に及んでいるらしい。

第 III 章 遺 跡 の 概 要

58年度の調査は西大谷1・2区、宮川1・2区で実施された。

西大谷1・2区では南端の34列より39列にかけ古墳時代初頭の遺構面と中世の遺構面の2面が確認された。38列～47列までは旧大谷川の流路が検出され、護岸状遺構の他、古墳時代後期～中世に至る多量の祭祀関係遺物が堆積砂礫中より出土した。46列～50列にかけては平安末～中世の遺構面1面が確認された。(第8図)

宮川1・2区では現大谷川右岸に当る1区で奈良・平安～中世にかけての遺構を確認し、左岸側の宮川2区は旧大谷川右岸傾斜面が検出され、ここに堆積した粘土・砂礫中より古墳時代後期の祭祀遺物が多量に出土した。(第18図)

第1節 西 大 谷 地 区

A. 中世遺構 (第9・10図)

中世の遺構は旧大谷川流路部分を挟んで34列～39列と46列～50列で確認された。いずれも旧大谷川に対して右岸側となる。

34列～39列で検出された遺構は溝状遺構8・土坑状遺構2・護岸状遺構1である。これらの遺構は西方より張り出してくる微高地と、そこから旧大谷川へと漸移する緩斜面部分に営まれている。

46列～50列で検出された遺構は溝状遺構9・小穴15・掘立柱建物遺構1・槽状遺構1・粘土探掘跡3であった。これらの遺構のうちSD29・SD44・SD37は遺構と言うよりも自然流路的な様相が強く見られた。

34列～39列 (西大谷1区)

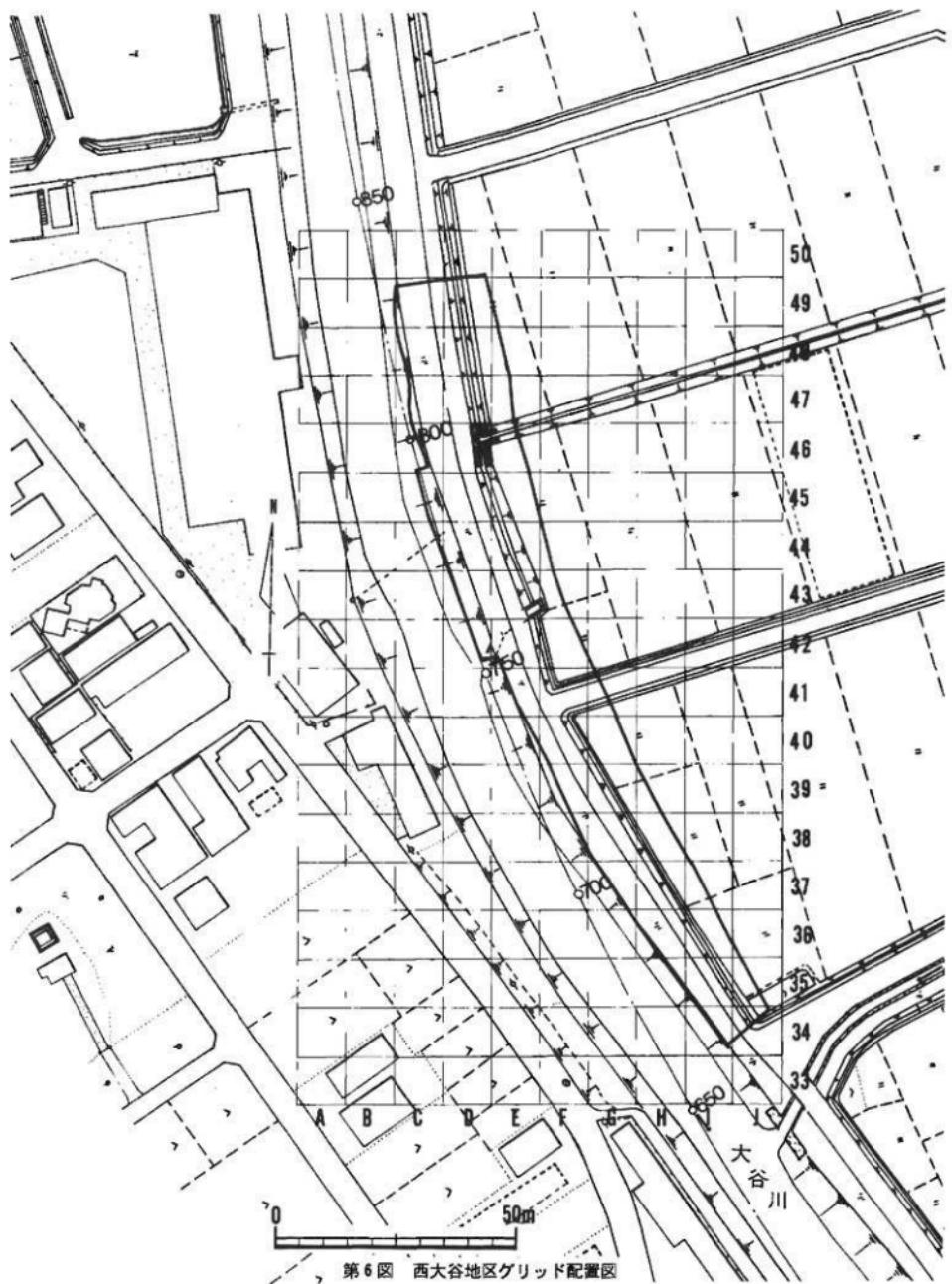
溝状遺構 (第9図)

SD2 長さ15m程、確認面で幅1.22～0.42m、底面で幅0.8～0.26m、深さ0.04～0.29mである。西側より張り出してくる微高地より旧大谷川へと流れ込んで行く。末端部では二又に分かれれる。

SD5 長さ23.3m、確認面で幅2.28～1.04m、底面で幅1.04～0.39m、深さ0.39～0.1mである。やや西に偏るが南北方向に延び、南端部は発掘区外へと続く。流れの方向は南から北であり旧大谷川へと流れ込む。覆土上面には若干の礫が混入しており、この溝が機能を失ってから一定期間経過後、礫が投入されたかと考えられる。

SD6 長さ20.8m、確認面の幅0.8～0.36m、底面で幅0.68～0.21m、深さ0.04～0.29mである。SD5とはほぼ平行して南北方向へ延び、流れの方向は南から北である。南端部はSD13により切られており北端部は旧大谷川へと流れ込む。

SD9 長さ8.6m、確認面での幅1.3～0.8m、底面の幅0.88～0.49m、深さ0.3～0.1である。SD5とはほぼ平行に南北方向に延び流れの方向は南から北である。南端部は発掘区外へと続き、北端部は深さを



減じて S D12へと流れ込む。

S D11 長さ 4.2 m、確認面での幅 0.38～0.24 m、底面で幅 0.3 m 程度、深さ 0.04～0.29 m である。くの字形に屈曲しており両端はどこにもつながらずに途絶えてしまう。

S D12 長さ 9.3 m、確認面での幅 3.35～2.6 m、底面で幅 2.4～1.91 m、深さ 0.28～0.15 m であり、幅に比較して深さが著しく浅い。やや北に偏り東西方向へ延び、西端は発掘区内で完結しているが、東側は発掘区外へと続いている。

S D13 確認面で幅 2.3～2.1 m、底面で幅 1.8 m、深さ 0.33～0.15 m である。発掘区の南西端で検出されたため、確認された部分はごく一部にすぎないが、確認部分が屈曲地点となり、これより北東方向及び南東方向へと続いていくものと考えられる。

S D22 確認面で幅 1.0～0.6 m、底面は幅 0.7～0.3 m、深さ 0.2～0.07 m、また確認できた長さは 10 m となっている。南東から北西方向に旧大谷川に沿って伸び、北西部で旧大谷川に開口している。流れの方向は不明である。

土坑状遺構（第9図）

土坑状遺構は S P8、S P10 の 2 基が確認された。

S P8 確認面で長径 2.3 m、短径 1.38 m、底面で長径 1.4 m、短径 0.92 m、深さ 0.36～0.11 m の梢円形の掘り方を持つ七坑である。

S P10 確認面で長径 1.04 m、短径 0.86 m、底面の径 0.75 m、深さ 0.34～0.38 m である。

46列～50列（西大谷 2 図）

溝状遺構（第10図）

S D26 長さ 12.3 m、確認面で幅 1.0～0.3 m、底面で幅 0.82～0.15 m、深さ 0.6～0.17 m である。やや北に偏るが東西方向へと延び、西端は発掘区外へと続く。東端は現代の水路により破壊されているが S D28へと流れ込むと考えられる。

S D28 西側の岸を現代の水路により完全に破壊されているが、確認した長さは 29.0 m、上端の幅は推定 3.5 m 程であり底面で幅 2.7～2.3 m、深さは 0.55～0.18 m である。やや西に偏るがほぼ南北方向へのび、流れの方向は北から南である。北端部は発掘区外へと続き、南端部は旧大谷川へと注ぐ。掘り方はしっかりしており、断面は逆台形を呈し、壁面は底面に対して 110° 程の角度で立ち上る。底面の比高差は大きく、49列と交わるあたりで段差が付く。

なお、この溝の覆土中より、ほぼ底面に接した状態で12世紀頃の山茶碗が出土していることから、溝が機能したのは12世紀頃と考えられる。（第12図中）

S D29 長さ 20 m、確認面で幅 4～3.5 m、底面で幅 3 m 程度、深さ 0.35～0.1 m 程である。北より 30° 程西に振れた方向にのびるが、北端部の一部は S D45により切られ、一部は現在の大谷川により破壊されている。流れの方向は北から南であり、旧大谷川に注ぐ。この溝を観察すると、①底面の凹凸が著しい、②岸の屈曲が著しい、③旧大谷川へ流れ込む部分で著しく扇形に広がる、④人為により掘り込まれたと考えられる部分は③の西側の部分にのみ残存している、ということが確認できる。上記の観察からもこの溝は自然流路である可能性が強い。（第12図左）

S D30 長さ 8.9 m、確認面で幅 0.86～0.3 m、底面で幅 0.57～0.1 m、深さ 0.34～0.16 m であり、断面形は逆台形となる。この溝は S D28 の底に 0.15 m 程、土が堆積した時点で掘り込まれている。従って時期は S D28 と併行すると考えられるが、掘り込んだ目的等は不明である。（第12図中）

S D33 発掘区北端部にごく一部を検出したにすぎないが、確認した長さ 4.0 m、確認面で幅 1.7～0.7 m、底面で幅 1.4～0.26 m、深さ 0.19～0.12 m である。

S D37 迷路のような溝であり 3ヶ所で S D29 に開口している。確認面で幅 0.5 m 程、底面で幅 0.3 m 程、深さは 0.3 m 程である。この溝の覆土はトンネルのような部分に上の上が陥没したような状態となっている。あるいは小形動物の巣穴かとも考えられる。（第12図左）

S D44 長さ 6.1 m、確認面で幅 0.88～0.3 m、底面で幅 0.65～0.1 m、深さ 0.11 m 程である。

S D45 発掘区の西側にごく一部を確認したにすぎなく、大部分は現大谷川により破壊されてしまっている。確認した長さ 4.6 m、上端幅 0.5 m、底面で幅 0.4～0.3 m である。

S D47 長さ 5.7 m、確認面で幅 0.9～0.2 m、底面で幅 0.74～0.1 m、深さ 0.17～0.04 m である。ごく短かく、浅い溝で S D29 へと流れ込む自然の流路と考えられる。

土坑状遺構（小穴・柱穴含む）（第10図）

S P27 確認面で長径 0.62 m、短径 0.54 m、底面で長径 0.39 m、短径 0.29 m、深さ 0.19 m の小穴である。

S P31 段状の掘り方を持つ土坑である。確認面で 1.3 m × 0.8 m の方形であり、0.5 m 程ドットした高さで段がつけられ、そこから上位で幅 0.6～0.5 m、底面で長径 0.4 m、短径 0.3 m、深さ 0.4 m 程度の掘り込みがなされている。

S P32 西側一部分を S D28 により破壊されている。確認面で 0.9 m × 0.8 m、底面で 0.8 m × 0.7 m 程度、深さ 0.27 m である。

S P38 段状の掘り方を持つ土坑である。確認面で 0.84 m × 0.68 m、底面 0.6 m × 0.58 m、深さ 0.26 m の上坑のはば中央に上面長径 0.63 m、短径 0.4 m、深さ 0.25 m の小穴が掘り込まれている。掘り方より見れば柱穴と考えられる。

S P40 確認面で長径 0.25 m、短径 0.2 m、底面で長径 1.8 m、短径 0.14 m、深さ 0.04 m の小穴である。

S P41 確認面で長径 0.4 m、短径 0.28 m、底面で長径 0.18 m、短径 0.14 m の梢円形をしたごく浅い小穴である。

S P42 確認面で径 0.2 m、深さ 0.14 m の放物線状の断面を持つ小穴である。

S P43 確認面で 1.16 m × 0.54 m、底面で 0.8 m × 0.44 m、深さ 0.04 m の浅い方形の窪みの中に上面で長径 0.52 m、短径 0.45 m、底面で径 0.2 m 程、深さ 0.16 m の小穴が掘られている。

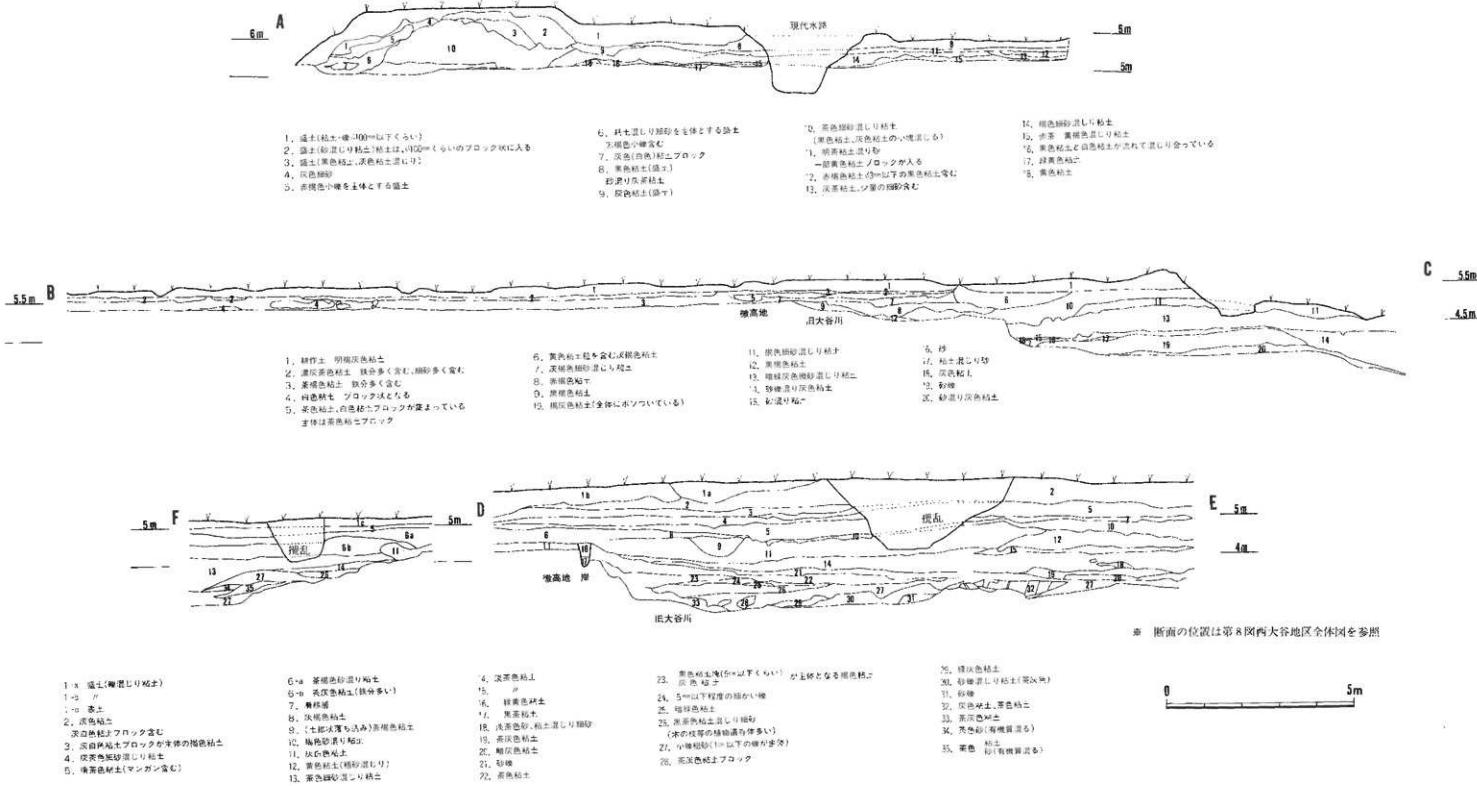
S P46 確認面で径 0.3 m 程、底面で長径 0.2 m、短径 0.13 m、深さ 0.08 m の上面円形、底面梢円形の小穴である。

S P48 確認面で長径 0.25 m、短径 0.2 m、底面で径 0.14 m、深さ 0.22 m の小穴である。

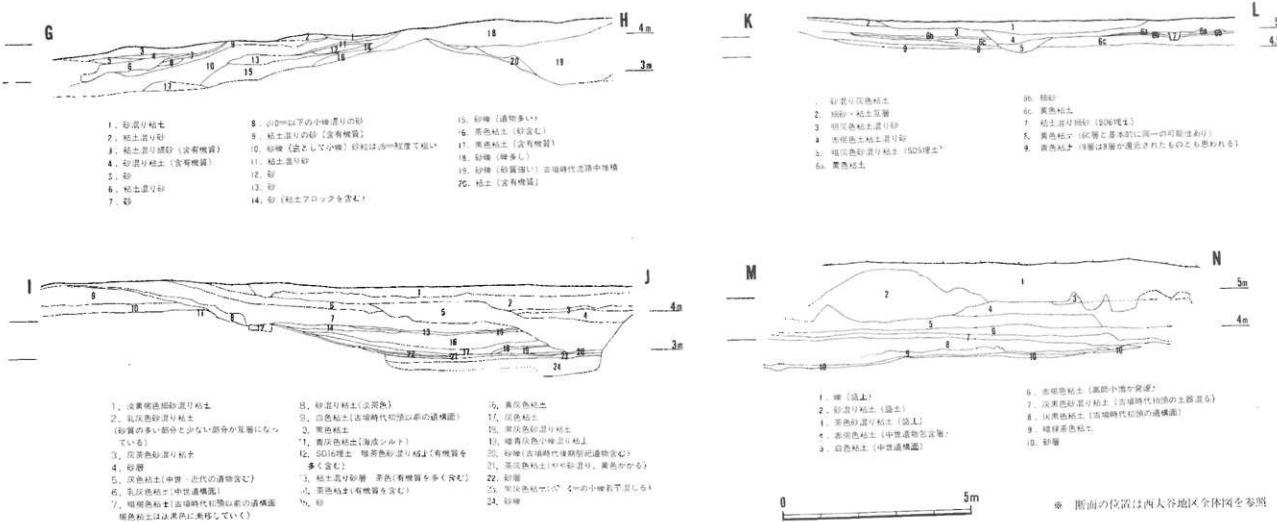
S P49 確認面で径 0.2 m、底面で径 0.14 m、深さ 0.12 m の小穴である。

S P50 確認面で長径 0.27 m、短径 0.22 m、底面で長径 0.17 m、短径 0.12 m、深さ 0.06 m の小穴である。

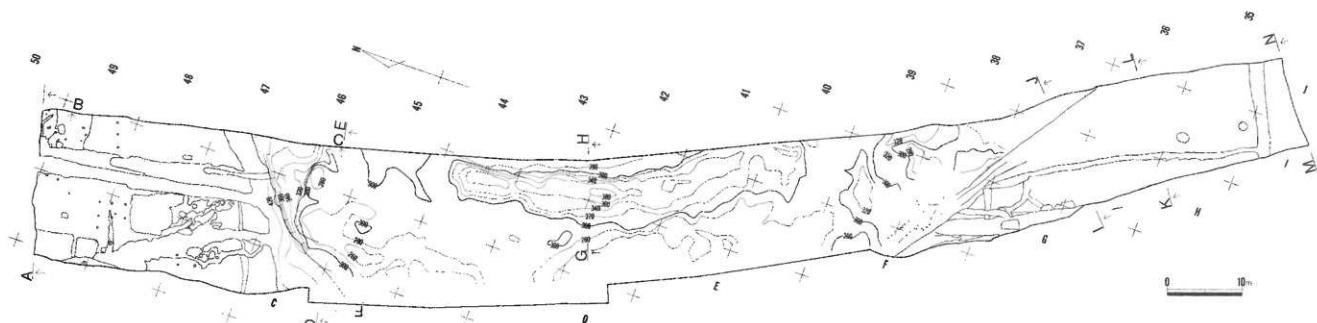
S P51 確認面で径 0.3 m、底面で径 0.25 m、深さ 0.2 m の小穴である。



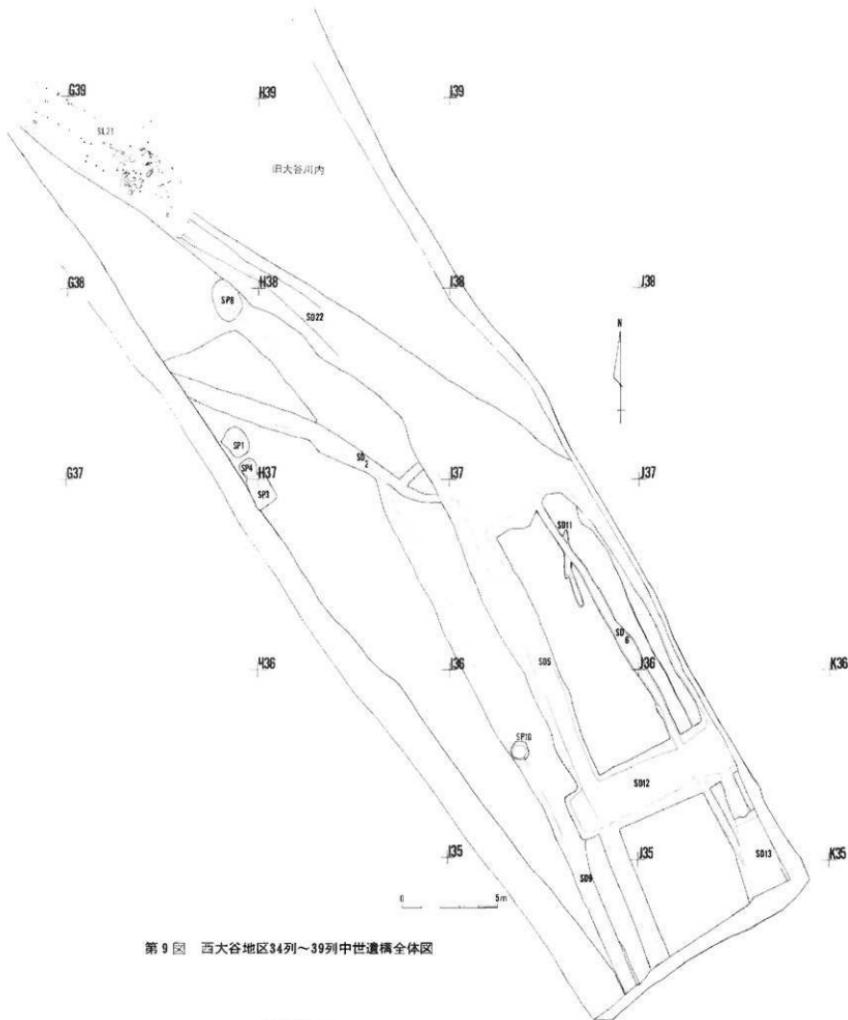
第7-1図 西大谷地区断面図



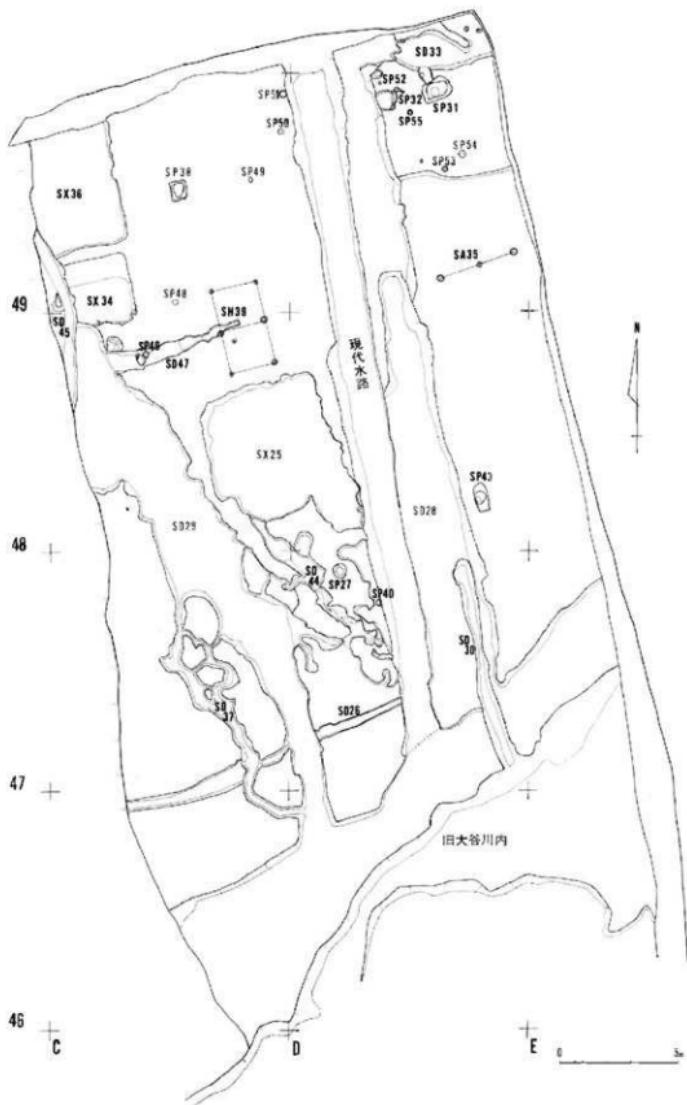
第7-2図 西大谷地区断面図



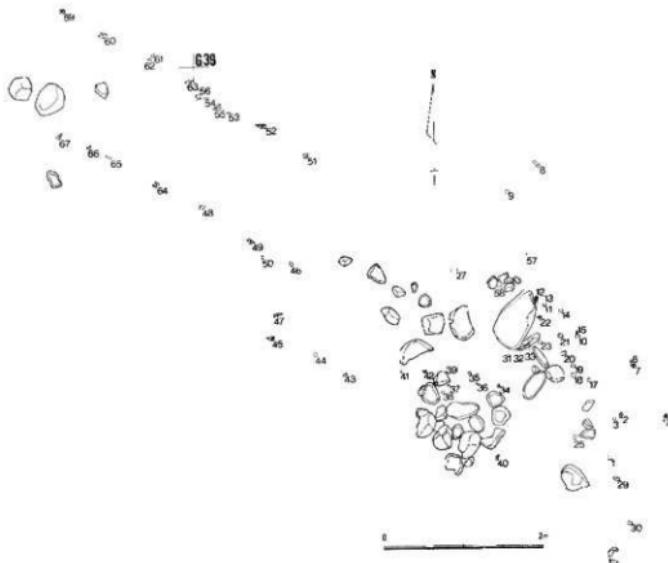
第8図 西大谷地区全体図



第9図 西大谷地区34列～39列中世遺構全体図



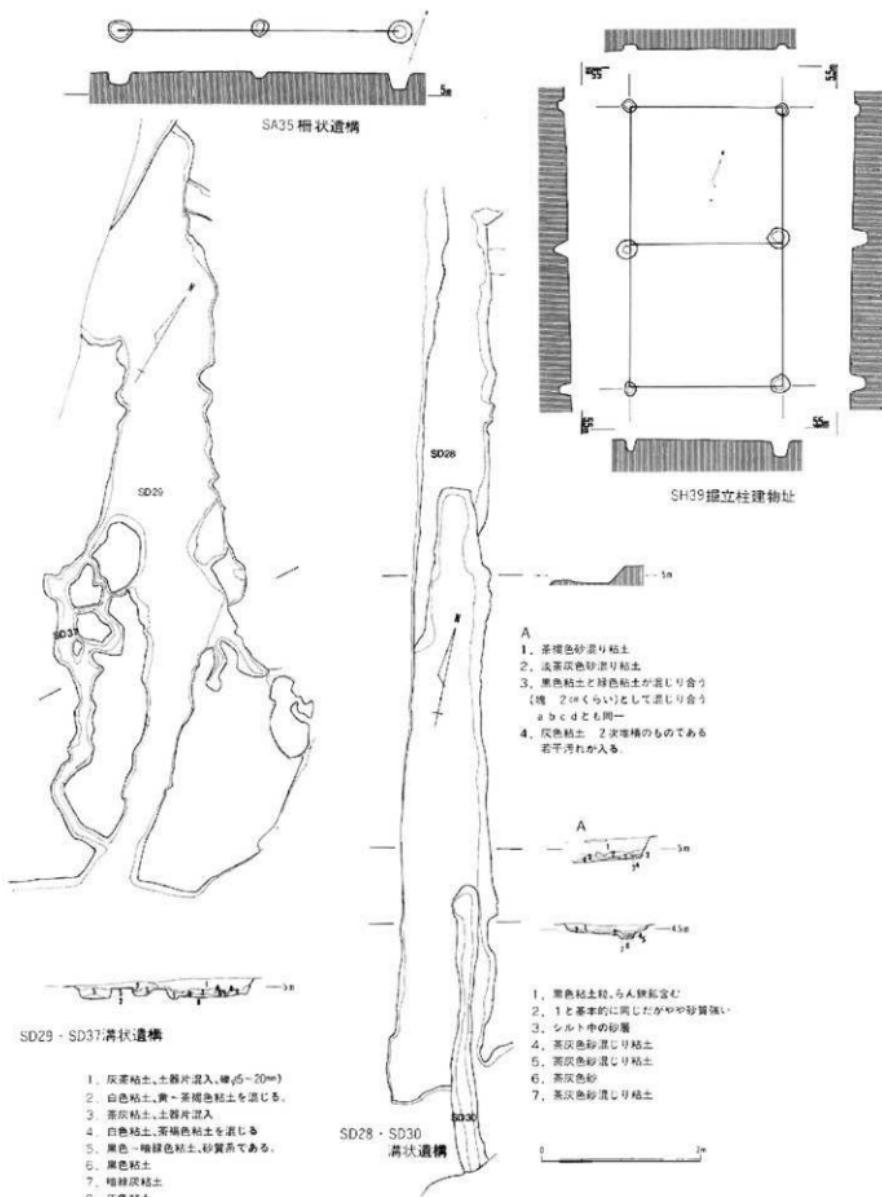
第10図 西大谷地区46列～50列中世遺構全体図



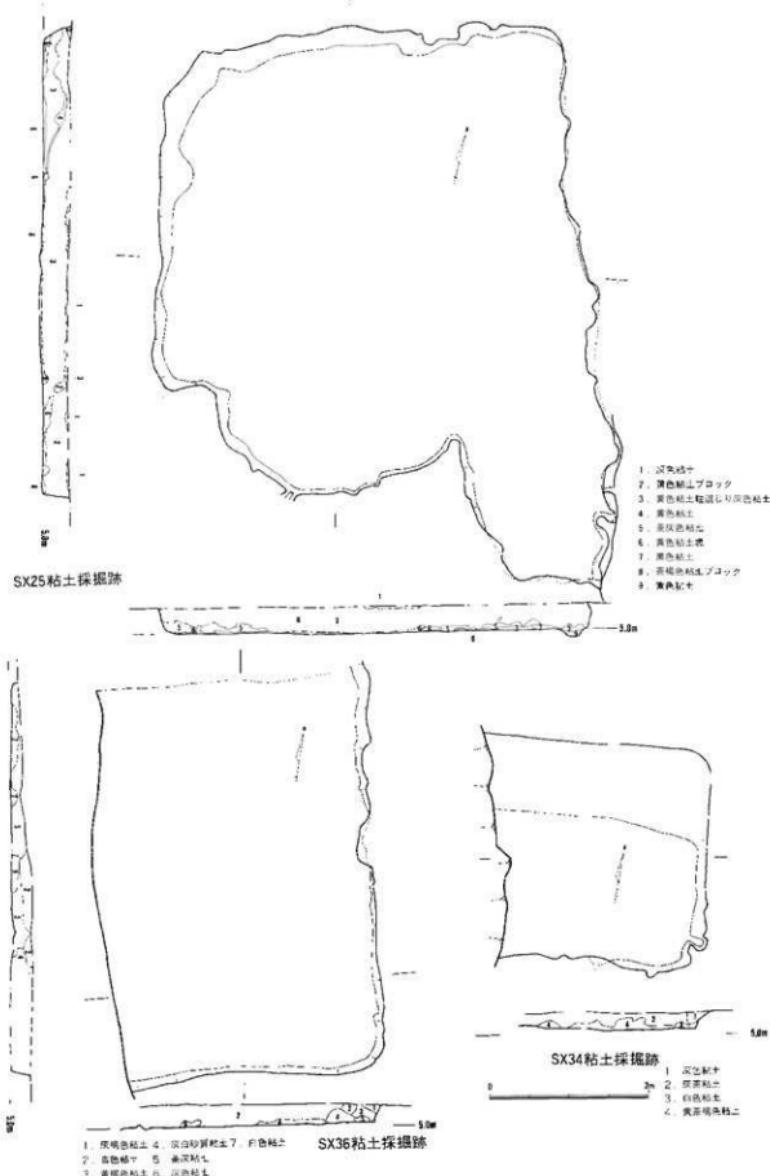
第11図 西大谷地区護岸状遺構図

S L21 護岸狀況列計圖 - 審表

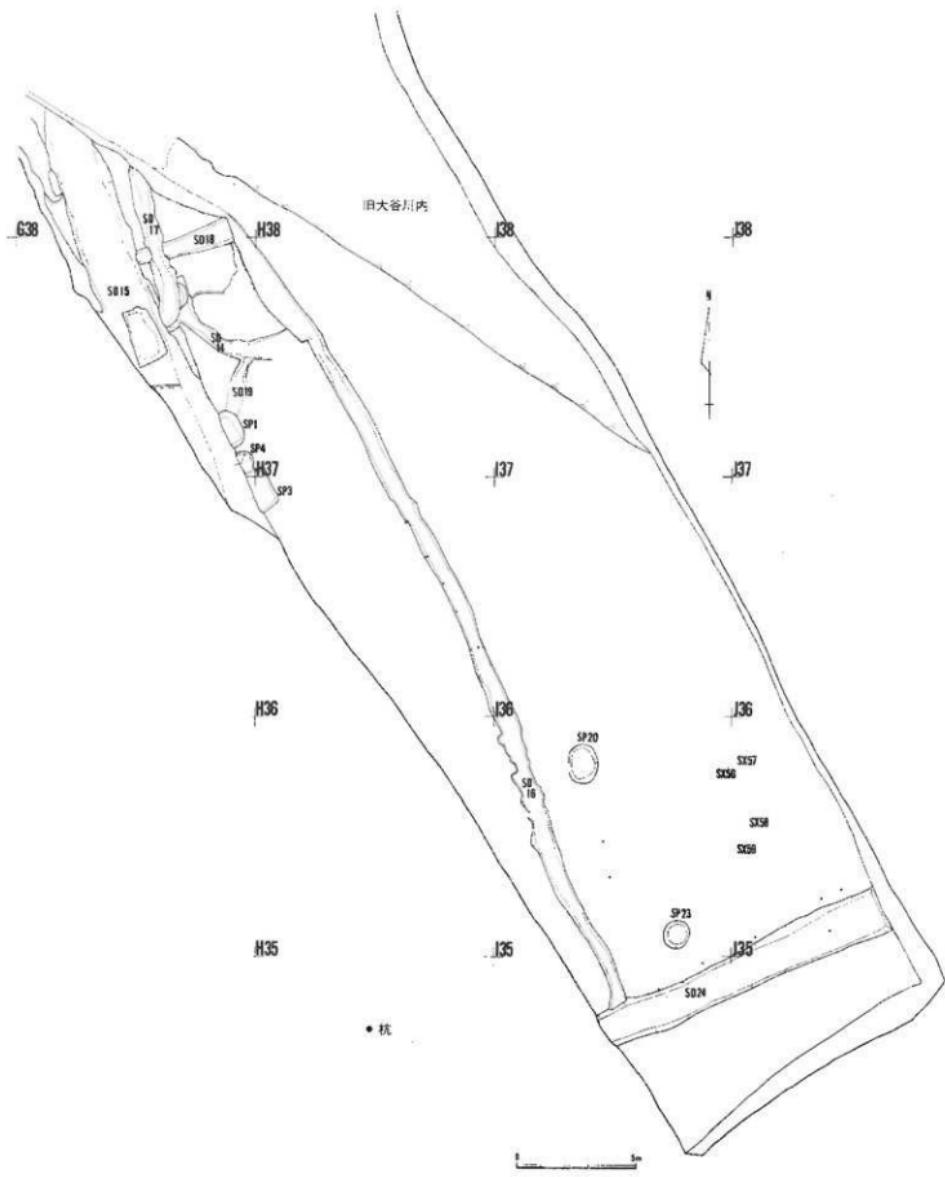
No	杭高(標高)	杭全长									
1	3.92	m 34 cm	18	3.860	m 40 cm	35	4.030	m 43 cm	52	3.888	m 64 cm
2	3.96	54	19	3.830	34	36	4.055	31	53	3.843	42
3	3.915	16	20	3.840	66	37	4.080	36	54	3.800	32
4	3.845	63	21	3.850	52.5	38	4.070	30	55	3.820	38
5	木材		22			39		44	56	3.85	58
6	3.725	15	23	3.876	45	40	4.042	42	57	3.75	30
7	3.775	29	24	3.850	28	41	4.120	49	58	3.810	35
8	3.670	40	25	4.000	65.5	42	4.160	69	59	3.490	45
9	3.670	33.5	26			43	4.170	46	60	3.50	65
10	3.75	30	27	3.880	38	44	4.137	29	61	3.468	49
11	3.79	35	28			45	4.115	37	62	3.486	23
12	3.855	46	29	4.015	64	46	4.038	44.5	63	3.508	34
13	3.800	16	30	3.835	35	47	3.858	48.5	64	3.698	80
14	3.795	42	31			45	4.027	45	65	3.660	82
15	3.830	20	32			47	4.027	45	66	3.678	58
16			33			44	4.011	84.5	67	3.667	96
17	3.900	20	34	4.040	36	51	3.885	37			



第12図 西大谷地区46列～50列中世個別遺構図



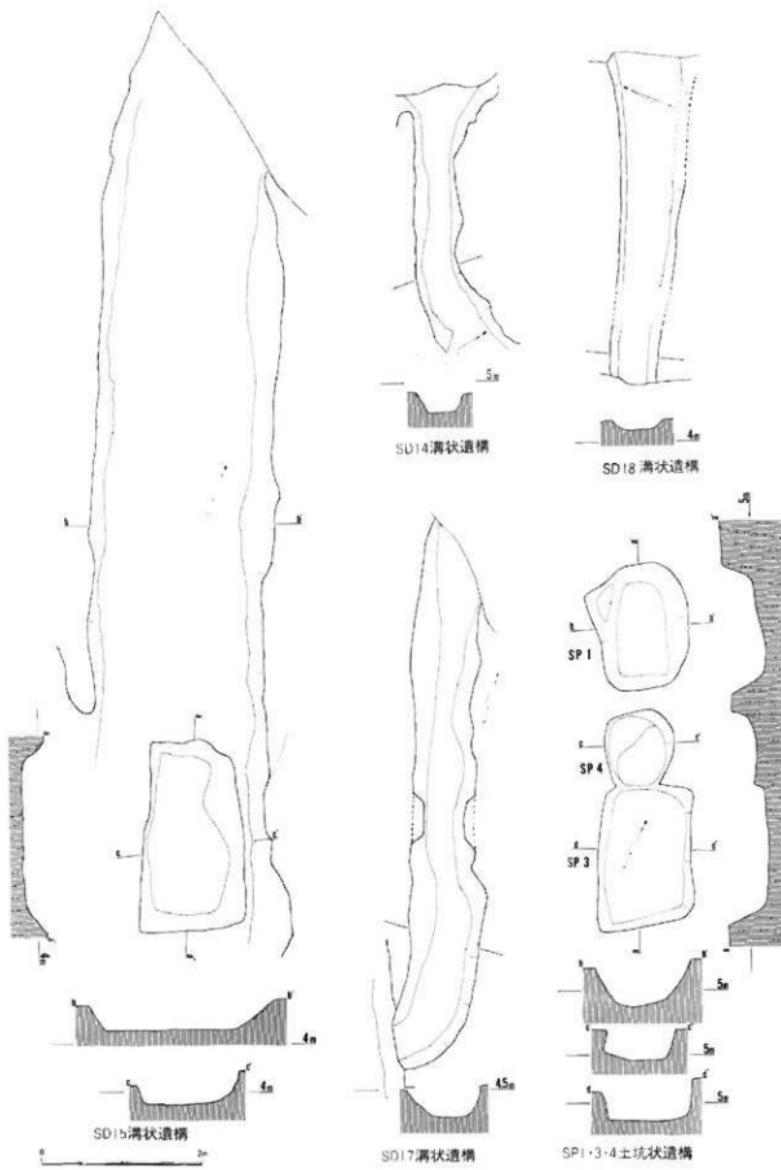
第13図 西大谷地区 C48・49グリッド粘土採取跡



第14図 西大谷地区古墳時代遺構全体図



第15図 西大谷地区 I 34・J 35グリッド古墳時代遺物分布図



第16図 西大谷地区 G37・38グリッド古墳時代個別遺構図

S P52 確認面で長径 0.5 m、短径 0.37 m、底面で長径 0.27 m、短径 0.23 m、深さ 0.365 m の小穴である。

S P53 確認面で径 0.24 m、底面で径 0.14～0.1 m、深さ 0.05 m の小穴である。

S P54 確認面で径 0.31 m、底面で径 0.12～0.06 m、深さ 0.19 m の小穴である。

S P55 確認面で径 0.2 m、底面で径 0.15 m、深さ 0.09 m の小穴である。

掘立柱建物遺構

西大谷地区で確認された掘立柱建物遺構は S H39 1 棟のみであった。

S H39 1 間 2 間の掘立柱建物遺構で、桁行 3.5 m、梁行 1.95 m であり、長軸方位は N-14°-W である。

柵状遺構（第12図）

柵と考えられるのは S A35 のみである。

S A35 確認された部分で長さ 3.5 m であり、その方位は N-70°-E である。

粘土探堀跡（第10・13図）

46列～50列までの遺構面は、白色の粒子の細かい、均質な粘土である。この粘土を採掘した跡と考えられる遺構が 3 ケ所出ている。粘土を採掘した跡とした理由には、①白色粘土層下の黒色粘土上面で掘り下げを停止している、②壁面が横からえぐられたような状態となっている、③覆土中にほとんど何も遺物を含まないので不明であるが少なくも中世以降のものと考えられる。

S X25 南北 5.2 m、東西 5.5 m のほぼ正方形をしているが、南東端から南へ幅 1.9 m、長さ 2.1 m 程の張り出しがある。深さは 0.3 m 程度である。

S X34 2.9 m × 2.5 m の方形をしており、深さ 0.25 m 程である。

S X36 一部は発掘区外へと続くが、確認した部分で 5.0 m × 3.0 m の方形となる。

護岸状遺構（第11図）

S L21 F 38・G 38 グリッドでは旧大谷川右岸部に護岸状遺構が検出された。この護岸は旧河岸に平行した 2 列の杭と不規則に打ち込まれた杭、それに礫により形成されている。

B. 古墳時代遺構（第14図）

古墳時代初頭の土器を伴う遺構が 34 列～39 列（西大谷 1 区）で確認されている。検出された遺構は溝状遺構 7、土坑状遺構 5、集石遺構 1、炉址 4 である。これらの遺構のなかで、S P 1・3・4 は掘削の状態等からほぼ同時につくられたと考えられる。又、S D15 は覆土の上層より非常に多量の土器を出土した。S X56・57・58・59 の焼土面は炉址と考えられ周囲に熱破碎した焼け磚の分布も見られた。おそらく住居跡内と考えられる。堅穴等の明確な住居跡は確認できなかった。

溝状遺構（第14・16図）

S D14 長さ 4.6 m、確認面で幅 0.97～0.48 m、底面で幅 0.87～0.25 m、深さ 0.22～0.13 m である。流れの方向は、S D17 と接している部分より南東方向へむかった後、中間点付近で東へ向きをかえる。東端部は次第に深さを減じて終る。

S D15 確認面で幅2.2m程度、底面で幅1.7m程度、深さ0.5~0.3mである。現在の大谷川に破壊されているためその全長は不明だが、確認された部分は17m程である。ほぼ南北に延び、流れは北から南へ流れたと考えられる。この溝の埋土上層中より弥生時代後期~古墳時代初頭にかけての土器が多量に検出されている。(第29図)従って、この溝は少なくも古墳時代初頭以前につくられたと考えられる。

S D16 長さ37.0m、確認面で幅1.2~0.52m(平均0.6m程度)、底面で幅1.1~0.3m(平均0.5m程度)、深さ0.4~0.06mである。この溝は西より張り出してくる微高地の末端部に沿ってのび、その方位は北から約20°西へ振れており、北端部は旧大谷川へ開口し、南端部はS D24へ合流する。流れの方向は底面の比高差が僅かであるため確実には分らないが、北から南であると考えられる。

S D17 長さ6.4m、確認面で幅0.95~0.68m、底面で幅0.58~0.22m、深さ0.34~0.24mである。ほぼ南北方向にのび南端部付近で西へ曲りS D15に切られる。流れの方向は北から南であると考えられる。

S D18 長さ4.14m、確認面で幅1.5~0.57m、底面で幅0.83~0.35mである。ほぼ東西方向にのび西端はS D15に切られ、東端は旧大谷川へ続く。流れの方向は西から東であると考えられる。

S D19 長さ2.44m、確認面で幅0.67~0.38m、底面で幅0.38~0.2m、深さ0.22~0.13mである。その延長の方位は北から約20°東へ振れる。北端部はS D14と合流し、南端部はS P 1により切られている。

S D24 長さ12.7m、確認面で幅2.0~1.54m、底面で幅1.56~1.08mであり、深さ0.39~0.19mである。西から約25°北へ振れて東西方向へ延びるが、西端は現在の大谷川により破壊され、東端は発掘区外へと続く。北側の側面には杭列が見られ、溝の中より岸の上止めに用いられたと考えられる板材と杭がくっついた状態で検出されている。このことから、この溝には上止めが杭列と板材により施されていたと考えられる。

土坑状造構 (第14・16図)

土坑状造構は5基検出された。このうちS P 1・3・4は南北方向に隣接して一列に並んで存在していた。時期的には大きく異なるとは考えられないが、切り合い関係より見ればS P 4とS P 3とではS P 4が先行する。

S P 1 確認面で楕円形、底面で長方形の平面形をもつ。上端長径1.55m、短径1.1m、下端長径1.1m、短径0.6mであり、深さは0.45~0.48mである。壁はややオーバーハングしている部分がある。

S P 3 長方形の平面形を持つ上坑である。確認面で長辺1.7m、短辺1.16m、底面で長辺1.64m、短辺0.98mであり深さ0.33~0.46mである。これもS P 1同様横面がオーバーハングしている部分がある。

S P 4 確認面で長径1.02m、短径0.84m、底面で長径0.9m、短径0.7m、深さ0.2~0.33mである。

S P 20 確認面で長径1.62m、短径1.22m、底面で長径1.28m、短径0.96mの楕円形の土坑である。深さは0.1m以下であり下端も明瞭でないごく浅い皿状をしている。

S P 23 確認面で径1.1m、底面で径0.8m、深さ0.39mのはば円形をした土坑である。

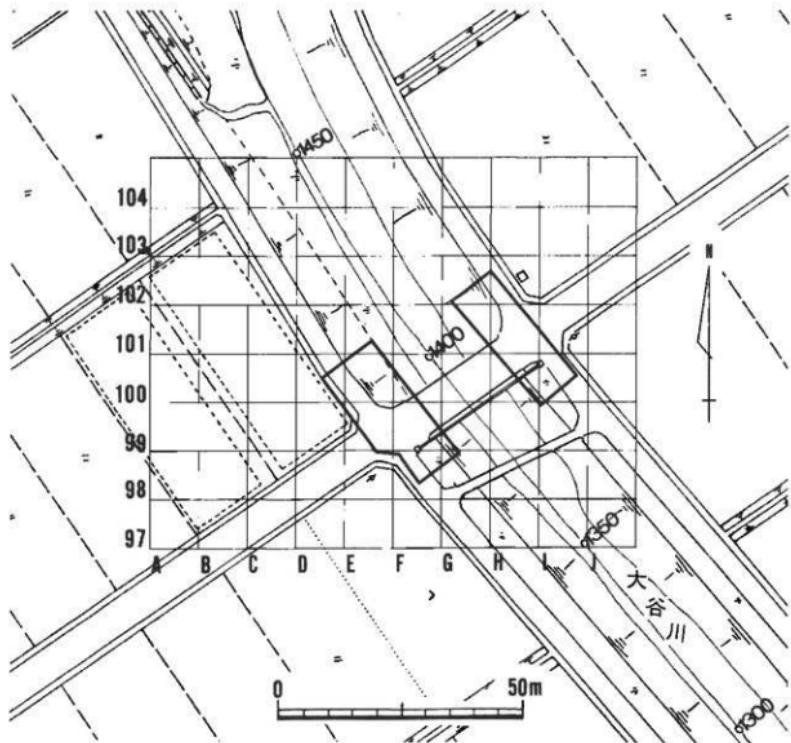
炉 踪 (第14・15図)

J 35、J 35グリッドで集中してS X 56・57・58・59の4ヶ所の焼土面が確認された。この焼土面の附近に分布していた礫の中には火熱を受け赤化しているものや、熱破碎しているものも見られたが、これ

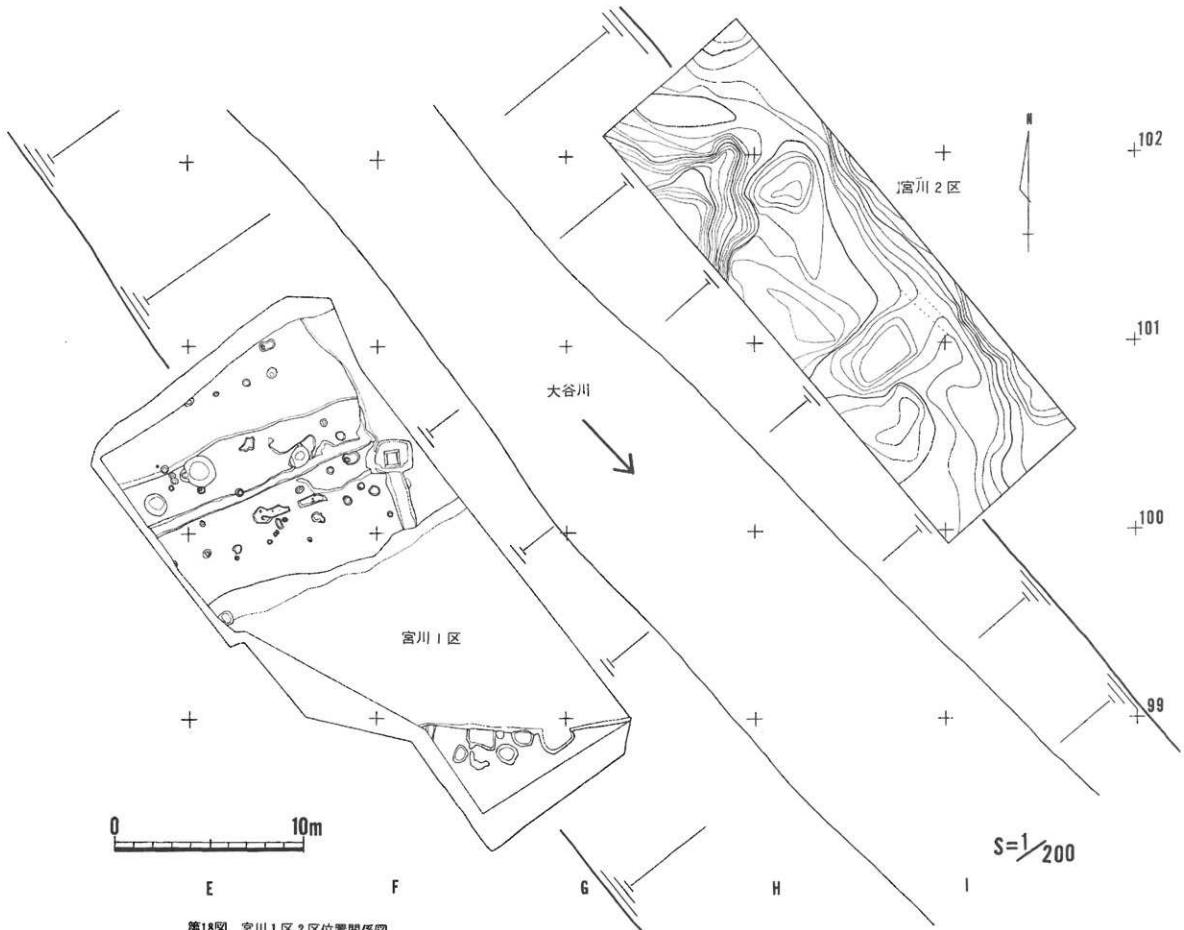
らの礫が刃を形成するような状態や、焼土面が盛り込みの中であるような状態は見られなかった。しかし、住居跡こそ確認できなかったが、この焼土面を中心とした部分が生活の中心であった可能性は強く、前述した礫も過去においては刃を形成していたと考えられる。ここでは、この4ヶ所の焼土を刃と理解しておくことにする。

集石遺構

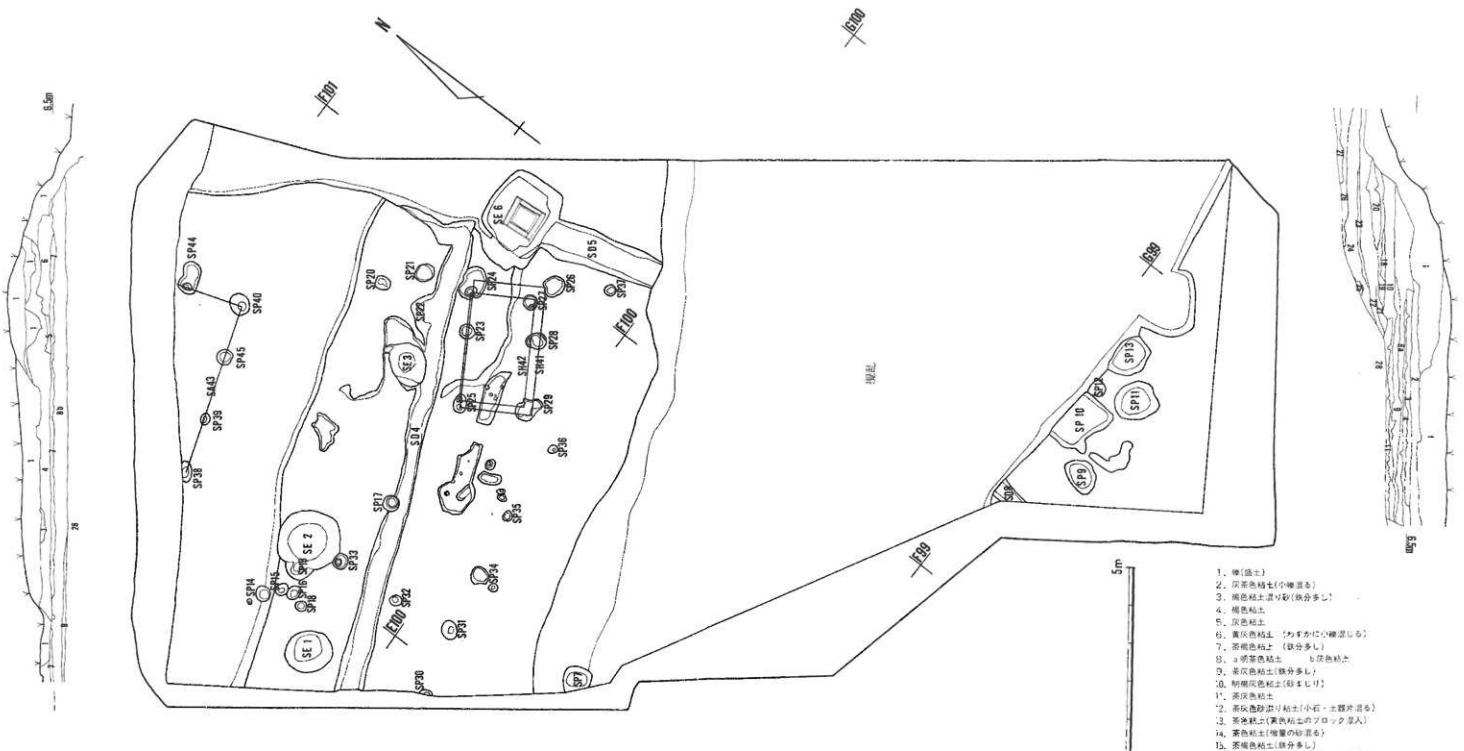
I 35グリッドでS X 60奥石遺構が検出された(第15図)。約0.5m×0.8mの範囲に10cm~20cm程度の礫が積み重って集中していた。これらの礫は特に熱を受けているわけでもなく、その性格は不明である。



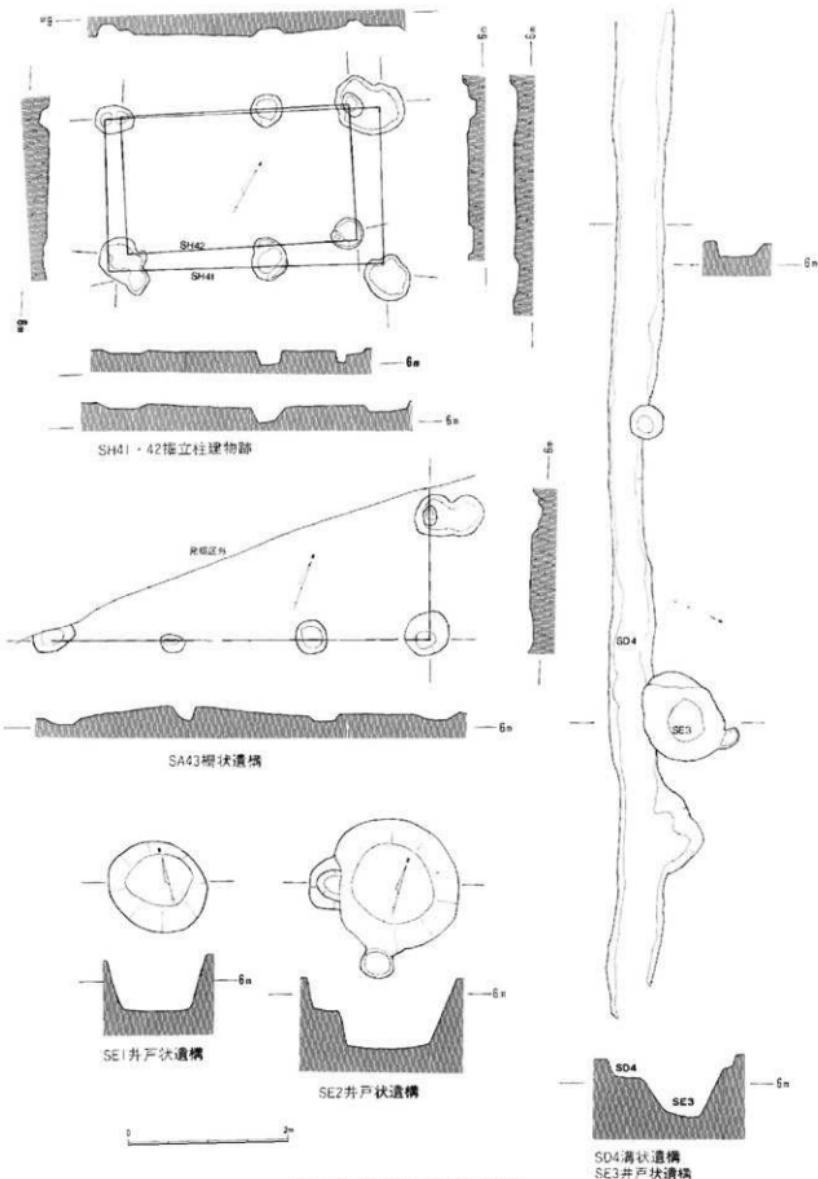
第17図 宮川地区グリッド配置図



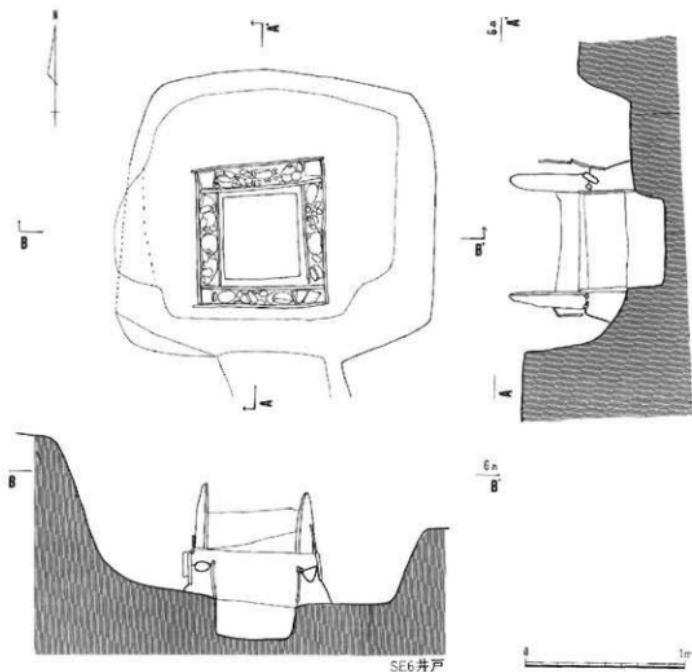
第18図 宮川1区・2区位置関係図



第19図 宮川1区全体図



第20図 宮川1区個別遺構図1



第21図 宮川I区個別遺構図 2

第2節 宮川1区・2区

宮川1区（第17～21図）

宮川1区での遺構面は奈良時代以降の遺構面1面のみであった。この遺構面は第19図宮川1区全体図の断面図で28層とした基盤層である。この基盤層は厚さ0.2m程の淡黄褐色粘土層であり、この下は青灰色の砂層となっている。遺物包含層は11・12・13層であり、うち11層と12層は、11層の方が粘土質であり12層が砂混り粘土であるという差があるが、基本的には同一の層と考えられる。遺物包含層は、E100グリッド付近の東西方向幅約5m程の所とF98グリッドで残存していただけであり、残存状態は良好とはいえないかった。F99グリッドでは擾乱によって遺構面が失われておらず、E100グリッドも北側で遺構面上面まで擾乱を受けている。これらの擾乱は耕作によるものと橋脚工事によるものである。E100グリッドで包含層が残存していたのは、この部分が耕作地でなく古くは道路であったためと考えられる。

検出された遺構は掘立柱建物遺構2・柵状遺構1・溝状遺構3・井戸状遺構4・小穴23である。これらは全てが同一時期の所産であるとはいわず、切り合っているものやSD41・42のように建てかえにより重複しているものもある。しかし、出土遺物が僅少であり、且つ、重複関係も多くないため個々の遺構の新旧関係・同時性を適確につかむことはできなかった。

溝状遺構（第19図）

溝状遺構はSD4・SD5・SD8の3本が検出された。このうちSD5、SD8はごく一部が調査できたにすぎない。

SD4 幅0.7m～0.4m、深さ0.2m、長さ12.75mである。断面形は逆台形となる。東端は現大谷川により失われ、西端は発掘範囲外へと続く。流れの方向はどんな理由から東から西と考えられる。遺物としては、土師器壺・甕・鍋、須恵器壺・蓋等の破片が出土している。（第20図）

SD5 幅1m～0.8m、深さ0.35m、長さ3.2mである。断面形は逆台形となる。北端はSE6により切られており、その続きは現大谷川により失われ南端は擾乱により破壊されている。流れの方向は底面の比高差から考えれば南より北になるがその延長が短く比高差も僅かなため確定し得ない。遺物としては、十輪器の壺・甕、須恵器の壺等の破片が検出されている。

SD8 北側は擾乱により失われ、南側は発掘範囲外に続くため調査により確認されたのはごく一部にすぎない。幅0.47m、深さ0.03m、検出された延長は0.8mである。流れの方向等は不明である。遺物は検出されなかった。

土坑状遺構（小穴・柱穴を含む）（第19図）

小穴は全部で35基確認された。うち掘立柱建物遺構、柵状遺構を構成するものを除くと23である。

SP7 確認面で直径0.7m、底面で0.55mである。遺物は検出されなかった。

SP9 確認面長径1m、短径0.7m、深さ0.02m程のごく浅い楕状の小穴である。遺物は検出されなかった。

SP10 北側は擾乱により失われているが確認面で一边1.5m、深さ0.05m程の方形の深い小穴であると考えられる。遺物は検出されなかった。

S P11 確認面で直径 1.1 m、底面で直径 0.7 m、深さ 0.25 m の小穴である。

S P12 確認面で直径 0.4 m、深さ 0.03 m 程の皿状小穴である。

S P13 北側は搅乱により失われている。確認面で直径 1.2 m、深さ 0.4 m である。下端は明確でなく放物線状の断面形となる。

S P14 確認面で直径 0.4 m、底面で直径 0.25 m、深さ 0.1 m 程の小穴である。

S P15 確認面で長径 0.4 m、短径 0.3 m、底面で長径 0.2 m、短径 0.15 m、深さ 0.15 m の楕円形の小穴である。

S P16 確認面で長径 0.4 m、短径 0.35 m、底面で長径 0.2 m、短径 0.15 m、深さ 0.35 m の楕円形の小穴である。遺物は土器の小破片のみで、いずれも器形を判明できる様なものではなかった。

S P17 段状の掘り方を持つ小穴である。確認面で直径 0.44 m、底部で直径 0.3 m、深さ 0.08 m の浅い掘り込みの中に南東側に偏って、上面で直径 0.27 m、底面で 0.22 m の小穴を掘り込んでいる。遺物としては、土師器の壺や甌の破片が検出されている。

S P18 確認面で長径 0.3 m、短径 0.25 m、底面で直径 0.2 m、深さ 0.35 m の楕円形の小穴である。

S P19 S E 2 により切られているが、確認面で推定直径 0.7 m であり底面直径 0.36 m、深さ 0.48 m の土坑である。

S P20 確認面で直径 0.4 m、底部長径 0.3 m、短径 0.16 m、深さ 0.15 m の小穴である。遺物は、土師器の壺・甌、須恵器の壺の破片等が検出されている。

S P21 確認面で長径 0.56 m、短径 0.46 m の楕円形、底面で径 0.42 m のやや三角形に歪んだ円形となる。深さは 0.06 m である。遺物は土器の小破片のみで、器形を判明できるようなものはない。

S P22 S D 4 により切られている。確認面での推定直徑は 0.9 m であり、深さ 0.18 m である。平面形は方形となると考えられる。遺物としては、土師器の壺や壠等の破片が出士している。

S P30 確認面で直径 0.35 m、底面で 0.12 m 程の小穴である。

S P31 確認面で長径 0.5 m、短径 0.4 m、底面で長径 0.2 m、短径 0.15 m、深さ 0.2 m の楕円形の小穴である。

S P32 確認面で長径 0.32 m、短径 0.27 m、底面で長径 0.17 m、短径 0.12 m、深さ 0.07 m の楕円形の小穴である。

S P33 段状の掘り方を持つ小穴である。確認面で直径 0.4 m、底面 0.33 m、深さ 0.06 m 浅い掘り込みの中に、西側に偏在して上面の直径 0.2 m、底面直径 0.12 m、深さ 0.06 m の小穴が掘り込まれている。

S P34 確認面で直径 0.5 m であり、底面は長径 0.4 m、短径 0.28 m の楕円形となる。深さは 0.11 m である。

S P35 確認面で長径 0.28 m、短径 0.23 m、底面で長径 0.2 m、短径 0.16 m、深さ 0.06 m の卵形の小穴である。遺物はみられなかった。

S P36 確認面で長径 0.28 m、短径 0.2 m の台形状の平面形を持ち、底面は長径 0.1 m、短径 0.06 m の楕円形となる。深さは 0.05 m である。

S P37 確認面で長径 0.33 m、短径 0.28 m、底面で長径 0.25 m、短径 0.18 m、深さ 0.08 m の楕円形をし

た小穴である。

掘立柱建物遺構 (第20図)

掘立柱建物遺構はSH41、SH42の2棟が重複した形で確認された。

S H 41 1間×2間の掘立柱建物遺構であり、桁行3.4m、梁行1.6mである。SP23・24・25・26・28・29がその柱穴となる。長軸方位はN-59°・Eである。遺物は検出されなかった。

S H 42 1間×2間の掘立柱建物遺構であり、桁行2.8m、梁行1.7mである。SP23・24・25・27・28・29が柱穴となる。長軸方位はN-59°・Eである。柱穴の間隔を見ると桁方向でSP27-SP28間とSP28-SP29間(SP24-SP23間とSP24-SP25間)とで大きく異なる。これには、①SP24・27は此のような施設の柱穴、②SP23・28は柱穴として使用されなかった、③SP24・27は柱穴として使用されなかった、という3つの考え方ができるが、どれかは確定できない。

井戸状遺構 (第19・20図)

井戸状遺構にはSE1・SE2・SE3・SE6の4つがある。

S E 1 平面形は楕円である。上面の長径1.3m、短径1.1m、底面の長径0.8m、短径0.6mで、深さ0.7mである。底面は砂層に達し、調査時点で常に滲水していたため井戸と考えた。埋土上面、及び底面より0.3m程上位に多量の炭化物と土器の細片を含んでいることから使用中止後一定期間を経た後、炉として用いられた時期が一度あったと考えられる。しかし、周辺の土が焼土化していない点から考えると、単にゴミ棄て穴として使われただけとも考えられる。遺物として、土師器の壺・甕・壚の破片が出土している。

S E 2 平面形はほぼ円形である。上面直径1.7m、底面直径0.9m、深さ0.85mである。SE1同様滲水していたため井戸と考えた。

遺物は、土師器の壺や須恵器の蓋が検出されている。

S E 3 平面形は楕円形である。上面で長径1.2m、短径0.95m、底面で長径0.5m、短径0.35mを計り、深さ0.67mである。

底部より0.3m程上位の埋土中に多少炭化物を含み、さらにその一層上には炭化物が集中して見られる。SE1同様に使用中止後に炉あるいはゴミ棄て穴として使用されたと考えられる。

遺物としては、土師器壺・甕、須恵器の壺・蓋等が検出されている。

S E 6 SE6は宮川地区で検出された井戸状遺構の中で、唯一内部に井戸枠を持ち確実に井戸と言えるものである。

以下に構造を説明する。掘り方は2段階になっており、初めに一辺が1.8m、深さ1m程のほぼ正方形の穴を掘り、その中央部に一辺0.55m、深さ0.25m程のはば正方形の穴を掘っている。この中央に掘られた穴の四隅に、現存で断面0.1m×0.1m長さ0.7m程の支柱を立てその内側に幅0.3m、厚さ0.03m、長さ0.75m程の板材をホゾ組みして作った枠をはめ込んでいる。

遺物としては、土師器の壺・甕、須恵器の壺・蓋・甕の破片が検出されている。

柵状遺構（第20図）

S A43 一部は発掘区外へと続くが確認された範囲はほぼ東西方向（N-71°-E）に4.7mであり東端で直角に曲り南北方向で1.7mである。

宮川2区（第24～28図）

宮川2区は旧大谷川流路部分にあたり検出された遺構はS L 46護岸状遺構のみであった。

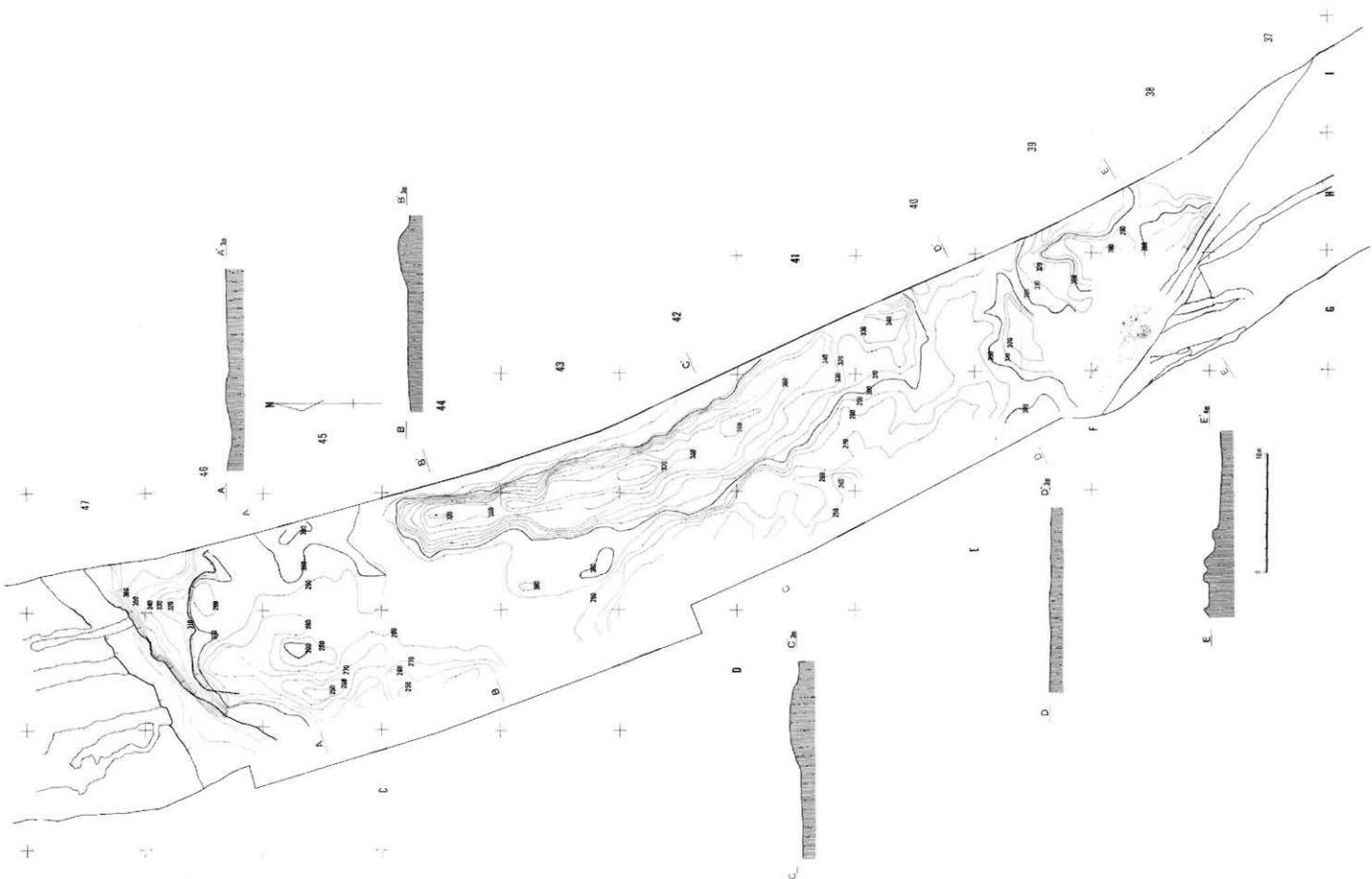
S L46 I 100グリッドの北西部に位置する。第28図に表されるように旧大谷川流路が屈曲する地点に沿った形で杭を打ち込み護岸としている。時期は中世と考えられる。

第3節 旧 大 谷 川

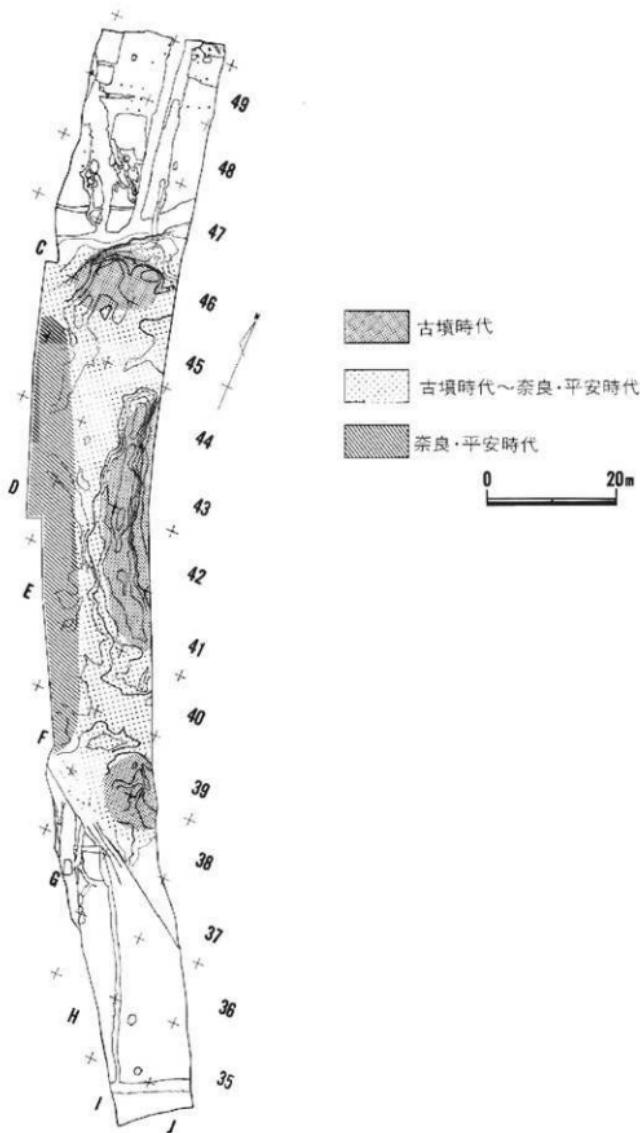
西大谷1区で表土除去を行ったところ、南半部では地表下1mで中世の遺物包含層を確認することができたが、北半部では赤褐色の砂礫の広がりが確認された。現在の大谷川は昭和17年に三菱の軍需工場建設の折に周辺の排水の為に直線的に改修されたものであるため、この砂礫の広がりは、それ以前の流路であると考えられた。そこで明治時代の地図と現地形を照合してみたところ、改修前の大谷川はかなり蛇行しており、この地点で流路が大きく東へ屈曲することがわかった。この昭和17年以前の大谷川流路に堆積したと考えられる赤褐色の砂礫には、近世・現代の陶磁器類が含まれていたが、若干の摩滅した古墳時代後期の土器や、奈良・平安時代や中世の土器類等も見られた。さらに赤褐色砂礫を掘り下げたところ、やはり摩滅した土器を若干含む灰色粘土層が出たため、トレンチにより部分的に掘り下げたところ、約2～3.5mの深さ（標高3～4m程）で灰色の砂礫層にあたり、この砂礫層より古墳時代後期の土師器・須恵器の完形品とともに、動物形（牛）の土製品が出土した。従って、この砂礫層は古墳時代の大谷川の流路中の堆積物であり、かつ、その中にはさらに多くの遺物が包含されていることが予想された。そこで、この砂礫層上面を出していったところ、最終的に西大谷1・2区では、37列～47列までは古い大谷川～旧大谷川の流路に当ることがわかった。又、上流の調査区である宮川2区でも旧大谷川流路（川岸）が検出された。

西大谷1・2区（第22・23・30図）

西大谷1・2区での旧大谷川の状態は第22図に示した。これを見ればわかるように、旧大谷川流路は南側ではJ37グリッド杭と、F39グリッド杭とG39グリッド杭の中央を結ぶ線付近に岸があり、北側ではE48グリッド杭とC47グリッド杭の中央を結んだ線付近に岸がくる。しかし、先述したように、この地点は旧大谷川流路の屈曲点にあたり、西流していたのが発掘区の西側で急激に流れの方向を変え折り返し東流するため、検出された2つの岸はどちらも右岸であり、川幅を知ることはできなかった。又、この2つの岸の状態を観察すると、北側の岸が2つの段差をもち、かなり急な傾斜を持つのに対して、南側の岸は比較的緩かな傾斜面を持つという違いがあるのがわかる。これは、北側の岸では流れが強かつたものが、屈曲する時点で勢いを失い、それより下流に当る南側の岸では水流がかなり弱まっていたためと考えられる。次に河床の状態は、E・Fの41列から44列にかけて、標高3.7m程度を頂点とする南



第22図 西大谷地区旧大谷川内等高線図



第23図 西大谷地区旧大谷川内時代別遺物分布図

北に細長い高まりがあり、東側へは急激に落ち込み、西側へは緩かに広がっている。その西側には2.8m程度の等高線でとじる窪地がある。又、H39グリッド杭を中心として3.1mの等高線で囲まれる窪地がある。その他の部分にも小さな高まりや窪地があり河床面はかなり起伏にとんでいる。このような河床の状態は図版16の旧大谷川河床面の写真によくあらわれている。

流路中の堆積状況は第7図－西大谷地区断面のB-C断面、F-D断面、D-E断面、G-H断面、I-J断面に示される。このうちB-C、F-D、D-E断面には北側の岸の傾斜が表わされている。G-H断面は先述した細長い高まりを横断した断面である(図版21)。この断面では高まりの頂点から1m程西で18層を切って10~16層が堆積し、さらに10層を切って1~9層が堆積しているのがわかる。つまり、旧大谷川の流れは東から西へと振れてきていることがこの堆積状態より理解される。それでは、この堆積の年代順はどうになるであろうか、次に旧大谷川内の遺物の時代別の分布状態についてふれる。

旧大谷川内に堆積した砂礫・粘土中からは古墳時代～平安時代にかけての祭祀関係遺物を主体とする遺物が大量に出土している。しかし、これらの遺物は、厚さ平均1m程度の砂礫・粘土層の中に均等に分布しているわけではなく、地点により分布密度の濃淡、時期差等が見られた。

西大谷地区での旧大谷川内の時代別遺物分布状況を見ると、第23図時代別遺物分布図に示されるように、ほぼ純粹に古墳時代後期の遺物のみ分布する地点が、①H39グリッド杭を中心とする範囲、②F41～E44にかけての範囲、③D46グリッドを中心とする範囲の3ヶ所見られる。このうち、①の地点はH39グリッド杭付近の3.1mの等高線で囲まれる範囲であり、②の地点は、細長い高まりの部分とその東側の落ち込んでいる部分に当り③は北側の岸の部分にあたる。以上が純粹に古墳時代後期の遺物のみ分布する地点である。一方、第23図の斜線部分では古墳時代の遺物も混じるもの、主体となるのは奈良・平安時代の遺物である。これは高まりの西側の2.8mの等高線で囲まれる範囲に相当する。

古墳時代の遺物の集中する範囲と奈良・平安時代の遺物の集中する範囲以外の部分では両時代の遺物が混じり合うが、古墳時代の遺物の方が多く、又、当然の事であるが地山に近い部分では古墳時代の遺物が圧倒的になる。特に、41列から44列の高まりの西側の緩い傾斜面では、上層でこそ奈良・平安時代の遺物があるが下層では純粹に古墳時代後期の遺物のみが出土した。

このような時代別の遺物分布状態と、河床の起伏、流路内の堆積状態を総合してみれば、古墳時代後期の旧大谷川流路は41列～44列にかけての高まりの東側にあり、そこにG-H断面の18・19層が堆積し、この堆積とその他の作用により、やはり、古墳時代後期に高まりの西側へと流路が変ったと考えられる。そして、10層～16層が堆積し、さらに時代が下りて奈良時代以後1～9層が堆積していったと考えられる。その過程で古い堆積物は流れていったが岸に近い部分や窪地になった部分では古い堆積物が流れされず、古墳時代後期の遺物包含層が残ったと考えられる。

以上が、河床の状態、堆積、時代別の遺物分布から旧大谷川の流路の変遷についての理解である。次に各地点での遺物の出土状態についてふれる。

先に純粹に古墳時代後期の遺物が出土した地点として①、②、③の地点を上げた。このうち①の地点では河床に堆積した砂礫層の上に粘土層が堆積していたがこの粘土層と砂礫層の境界より図版22に見ら

れるように、土師器の壺を主体として斎串等の木製品や柄のついた状態の刀子を含む多量の遺物が出土した。これらの遺物相互に有意の配置性等は看取できなかつたが、ほとんど全く摩滅もせず、遺存状態も極めて良いことから原位置を大きく移動していないか、廃棄されたそのままの状態を示している可能性もある。

②の地点では図版20・21、第7図-2、G-H断面に見られるように古墳時代の流路とその中に堆積した砂礫が完全に残っていた。この砂礫に包含されて、図版24・25・26に見られるような状態で土師器壺・須恵器壺を主体とし、図版23-1の牛形土製品、図版24-2のト骨、図版27-1の鉢形木製品、木製模造刀、第38図-5100の腹部に串状の棒を刺した状態で出土した馬形木製品や、人形上製品等の祭祀関係遺物が出土した。これらの遺物も図版26-2のような重なって出土した土器があることや、図版27-1の鉢形木製品と木製模造刀がセットで出土していることなどから大きく原位置を動いていない可能性があるが、やはり配置性は看取できなかつた。

③の地点は他と比較してもその遺物分布密度は高く、種類も多様であった。この地点では岸の部分にあたることもあり砂礫ではなく砂礫混じり粘土や粘土が堆積し、その中に多量の木製品・竹製品・動物遺存体が包含され、これに伴って多量の古墳時代後期の土器が出土した。遺物の出土状態は図版32~37に示されるとおりだが、図版32の土器群のように配置性をうかがわせ、ある程度、原位置を保っている可能性があるものもあった。人形・斎串等の木製品の出土状態は図版32・34に見られるが、同一地点からかさなりあって同一形態の人形が出土しており、流されたにしてもそれ程大きな動きではなかつたと考えられる。その他竹製品等として図版36・37に示される籠類が出土している。中でも、図版37-2の曲物容器としたものは長方形の缶物にゴザのような繊維の編んだものを張ってあり注目される。又、特筆されるべき遺物として図版34-2の底部に透し彫りが施されている横櫛が出土している。

これら、古墳時代の遺物の分布する地点に対して、斜線部分の奈良・平安時代の遺物が分布する地点は遺物の分布密度は希薄である。しかし、古墳時代と同様、供献土器類・形代類・獸骨類が出土し、さらに木筒や縁軸陶器の皿も出土している。

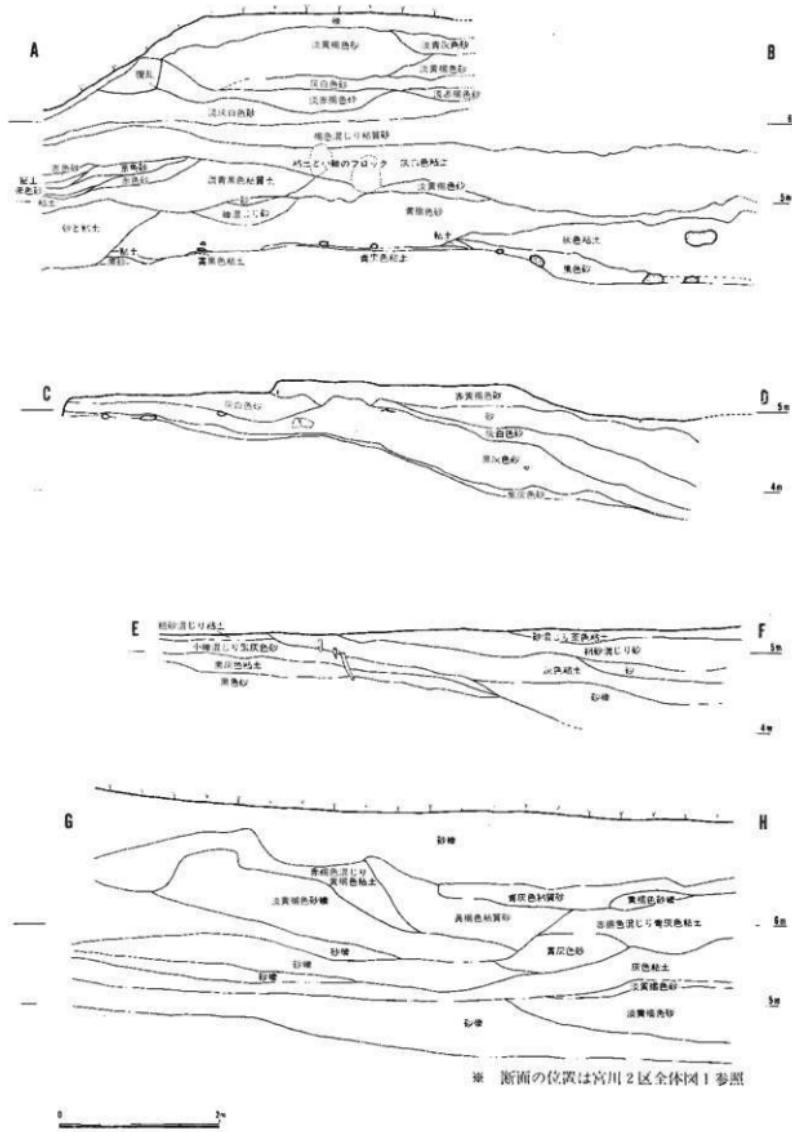
西大谷地区では以上の古墳時代~平安時代の遺物を含む砂礫・粘土層の上に中世の堆積粘土がのっているが、この層からも若干の土器類・木製品・漆器類の遺物が出土している。

宮川2区

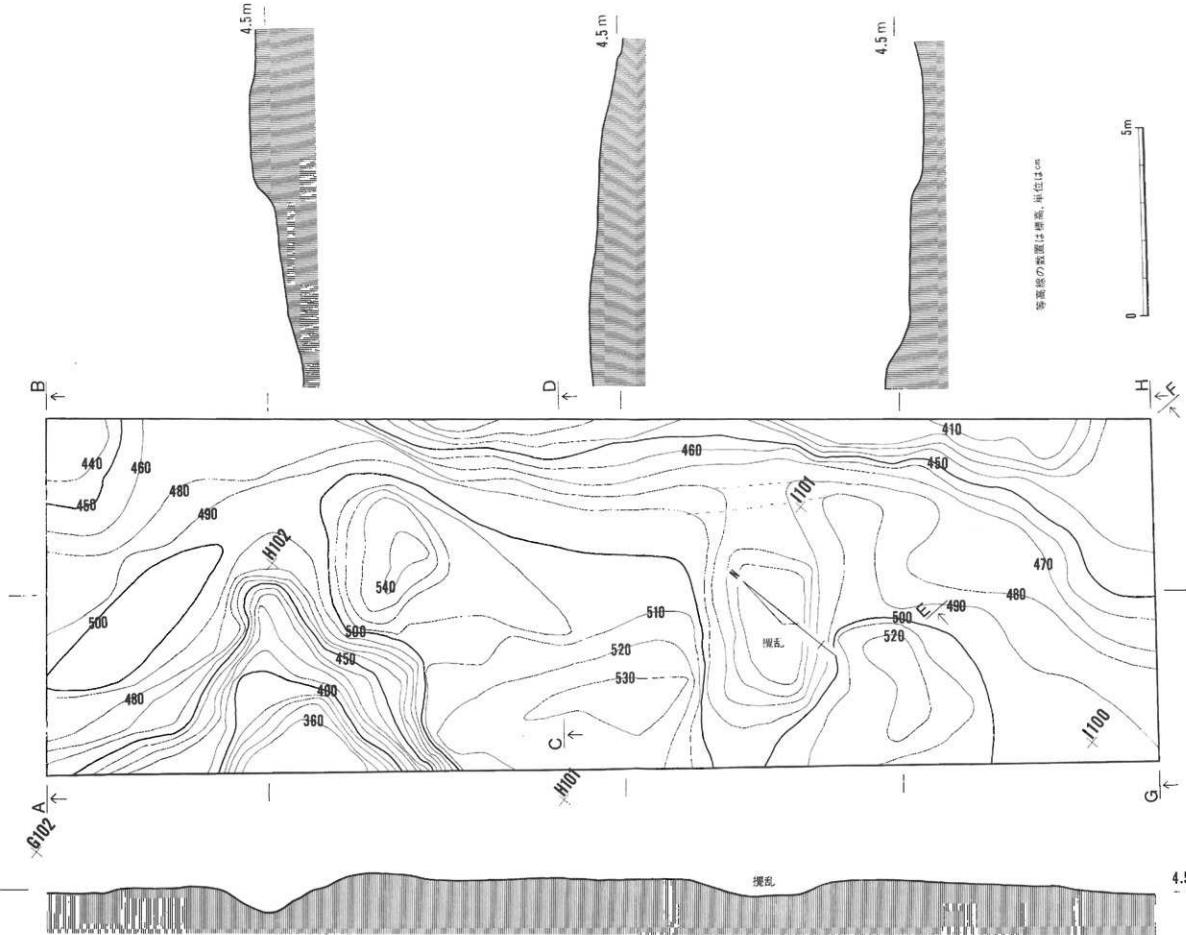
宮川2区では旧大谷川の右岸傾斜面を検出した。第25図-1宮川2区全体図1に示されるのがそれである。旧大谷川流路の部分は発掘区の東側 $\frac{1}{4}$ 程度であるが、北端部と南端部では流路は西へ廻り込んでいる。又、発掘区の西側、北端部に近い位置に1.5m程の深さの窪地（中世）が検出されたが性格不明であった。

この旧大谷川流路部分より西大谷地区同様古墳時代後期の祭祀関係遺物が大量に出土した。（第32図）遺物の出土した層は第24図のA-B断面の最下層の黒色砂とその上層の灰色粘土であり、G-H断面では下から4層目の灰色粘土層以下砂礫層までが包含層に相当する。分布状況は第26図、第27図に示すとおりであるが、第26図の全遺物分布図には木製品・土器類・礫のすべてを入れ、以下、土器・木製品・礫

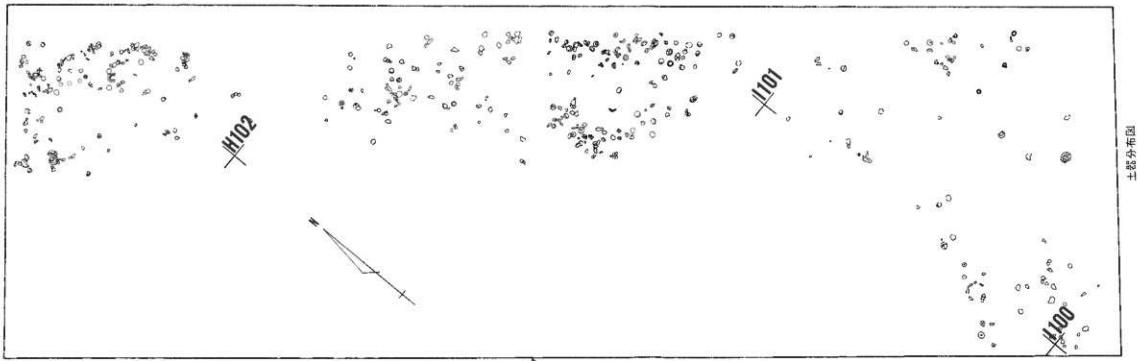
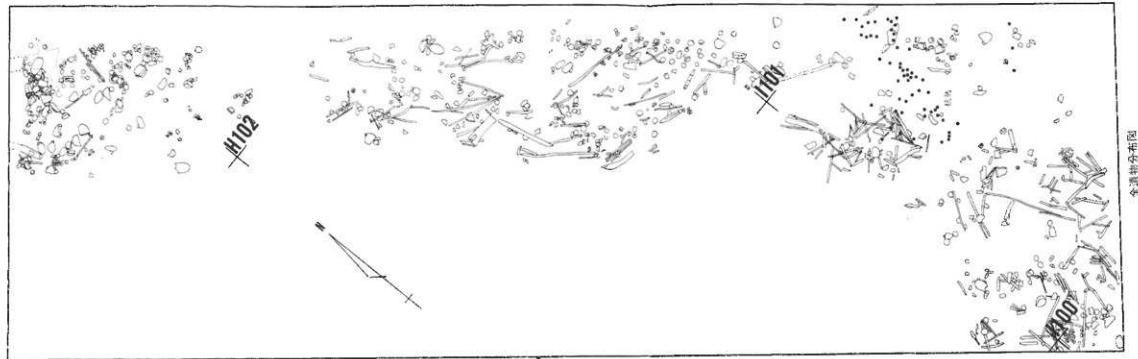
それぞれの分布状態を図化してある。これを見ると三者の分布状態に違いは見られず、川の流れによりこのような分布状態が生じたと考えられる。



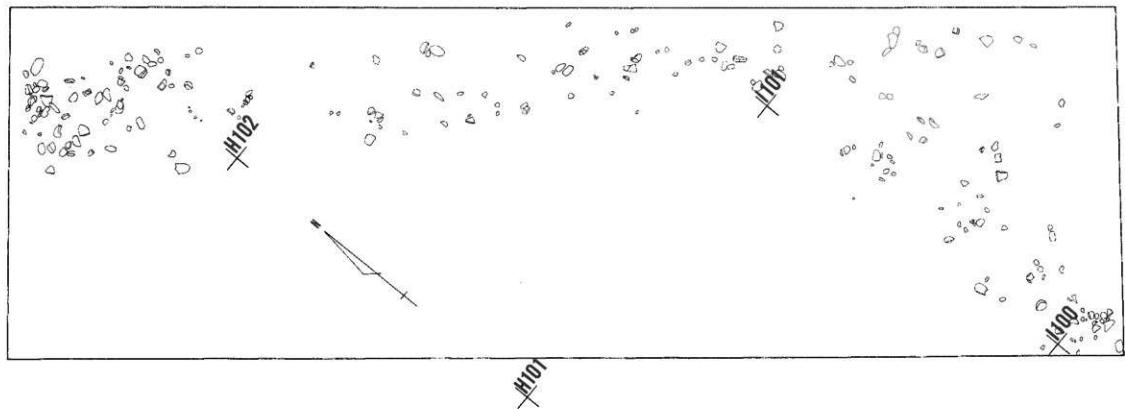
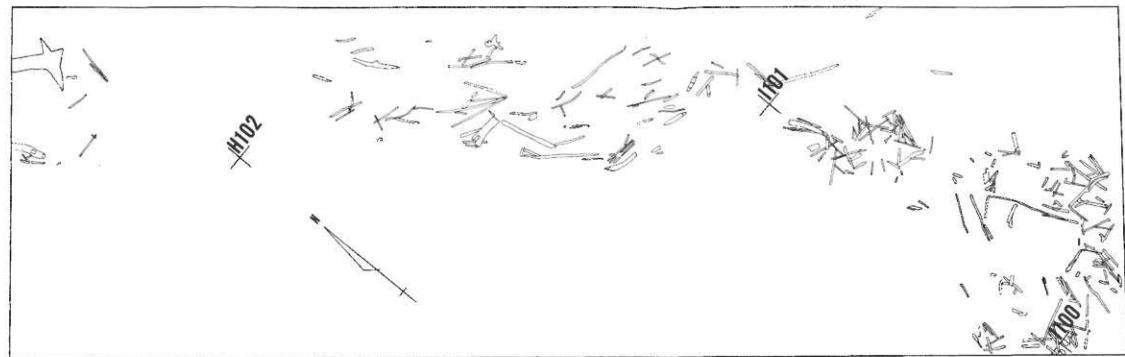
第24図 宮川2区断面図



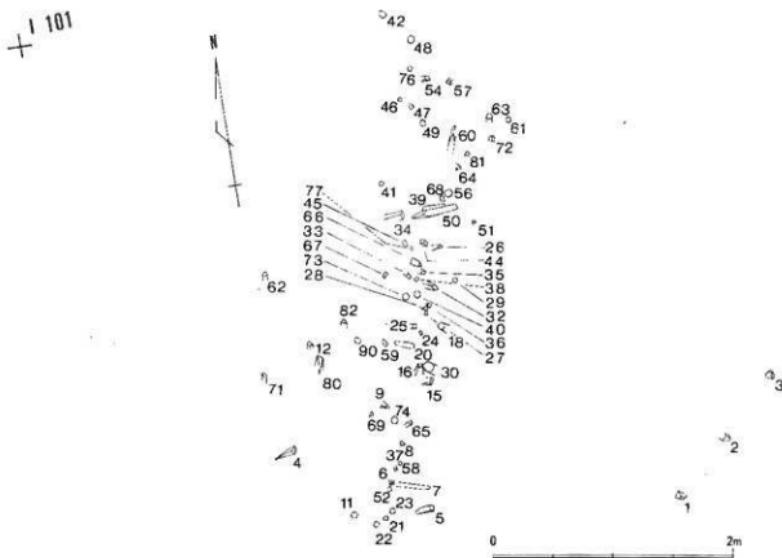
第25図 宮川2区全体図 1



第26図 宮川2区全体図 2



第27図 宮川2区全体図3



第28図 宮川2区杭列遺構図

宮川2区杭列計測表

No	杭高(標高)	杭全長	No	杭高(標高)	杭全長	No	杭高(標高)	杭全長	No	杭高(標高)	杭全長	
1	5.300	m	63	cm	24	5.250	m	52	cm	47	5.070	m
2	5.250		45		25	190		31		48	5.070	
3	5.270		46		26	170		35		49	5.050	
4	5.210		21		27	230		41		50	5.140	
5	5.210		27		28	140		16		51	5.070	
6	5.290		33		29	190		55		52	5.260	
7	4.980		53		30	220		66		53		L
8	5.200		42		31					54	5.230	
9	5.240		13		32	5.190		34		55		76
10					33	5.270				56	5.190	
11					17	34	5.160	26		57	5.110	
12	5.250		28		35	5.210		33		58	70	
13					36	5.240		42		59	5.130	
14					37	5.040		21		60	5.190	
15	5.140		25		38	5.160		59		61	5.100	
16	5.200		40		39	5.100		25		62	5.180	
17					40	5.190		48		63		60
18	5.18		46		41	5.12		29		64	5.140	
19					42	5.100		35.5		65	5.130	
20	5.150		20		43	5.31		65		66	5.230	
21	5.250		19		44			45		67	5.340	
22	5.280		30		45	5.240		50		68	5.210	
23	5.260		35		46	5.090		43		69	5.130	
										61		

第 IV 章 遺 物

本年度調査における出土遺物の総量は整理用コンテナで約 600 箱もの膨大な数にのぼり、現在もまだ整理中であるため、今回の報告ではその概要を記すにとどめ、土器類では代表的なもの、木製品では人形・馬形木製品・畜串および木簡を汎化して取り上げた。残りについては整理の進行を待って報告の予定である。

第 1 節 概 要

神明原・元宮川遺跡の出土遺物は、①旧大谷川内より出土した遺物 ②西大谷地区34列～38列間の中世後期～古墳時代初頭の造構に伴う遺物 ③西大谷地区34列～38列間の中世の造構に伴う遺物 ④西大谷地区46列～50列の平安～中世の造構に伴う遺物 ⑤宮川 1 区奈良～中世の造構に伴う遺物の 5 群に大別することができる。これらのうちでは、①が圧倒的多数を占め、②は面積当たりに考えれば比較的多く③・④・⑤はごく少ない。以下に①より記述する。

① 旧大谷川内出土遺物

旧大谷川内出土遺物を時期別に分類すると、a 繩文時代晚期、b 弥生時代、c 古墳時代後期、d 奈良・平安時代、e 中世、「近世」以降に分けることができる。

a、繩文時代晚期の遺物

この時期の遺物は天王山式と考えられる土器片 1 点と磨石・石皿・黒曜石片が數点出土している。付近には清泉寺遺跡・大正寺山遺跡・不動山下遺跡等の繩文時代の遺跡が分布していることから周辺遺跡より混入したものと考えられる。

b、弥生時代の遺物

弥生時代後期の壺の口縁部の破片 1 点と有孔石錘 1 点が出土している。他に石錘数点が出土しているが時期は不明である。繩文時代の遺物と同じく混入品であろう。

c、古墳時代後期

旧大谷川内出土の遺物の主体はこの時期の祭祀関係遺物である。その内容は畜串・人形・馬形・鉢形・大刀形等の木製品、人形土製品・馬形土製品・牛形土製品・手捏土器等の形代類、土師器の坏が主体となるおびただしい数の供獻土器類、馬・牛・犬などの獸骨類が上げられる。その他、若干の銅鏡・耳環・勾玉・横櫛・火鑬臼・四ツ手綱の雲手（十文字）・編錘・曲物・籠類・砥石・万子（柄付）等が出土している。

d、奈良・平安時代

古墳時代後期の遺物と同じように、畜串・人形・馬形・大刀・丸木弓等の木製品、人形土製品・馬形土製品・手捏土器等の形代類、土師器・須恵器・灰釉陶器・綠釉陶器等の供獻土器類の他、獸骨・鉢鏡（雁股式）などが祭祀遺物として出土している。その他、瓦・木簡・墨書き器・土器軸用脱・鍵・砥石・横櫛・曲物・大形土錘・錢貨も少數出土した。

e・f 中世～近代

山茶塗や青磁等の陶磁器類、漆器椀等や、寛永通宝などの古銭が出土している。

②西大谷1区微高地上～緩斜面の古墳時代遺構に伴う土器

西大谷1区の古墳時代遺構に伴っては比較的多くの土器と若干の木製品が出土した。

土器は古墳時代初頭～五頭期のものと考えられ（第29図）、I 35・36グリッド及びS D15溝状遺構中より多量に出土している。I 34・35グリッドでの出土状態は、いくつかのまとまりをもっている状態が観察されたが、集中部分の周間に上坑等の掘り込みは検出できなかった。又、S X56・57・58・59の焼土面や、S X60集石状遺構が確認されたが、これらの遺構の周間に特に集中して分布しているともなった。

木製の遺物としてはS D16溝状遺構中より細長い杓子状の木製品が出土し、S D24溝状遺構では駆面の土止に用いられたと考えられる板材が流された状態で出土した。（図版9）

③西大谷地区34列～38列間の中世遺構に伴う遺物

遺物はほとんど出土せず、出土したものも細かな土器片ばかりであった。

④西大谷地区46列～50列平安～中世遺構に伴う遺物

この地区的遺構に伴って出土した遺物は量も極く少なく、細かい破片ばかりであり、その多くも古墳時代の遺物が混入したものであった。このような中に若干の平安～中世にかけての山茶塗、陶磁器が見られたにすぎない。これは、この地区的遺構が粘土採掘跡といった生活にそれ程密着しないものであったためと考えられる。ただ、S D28からは底面に接した形で12世紀中葉～後半のものと考えられる山茶塗がほぼ完形で出土した。

⑤宮川1区の奈良～中世遺構に伴う遺物

宮川1区の遺構からは、若干の奈良・平安時代の須恵器・土師器の破片が出土している。須恵器には、壺・蓋・壺等の器種があり、土師器には、壺・甕・壠等の器種がみられる。これらの土器片はいずれも小破片のため、全体の器形をうかがうことができるようなものは無かった。

次に、実測図をのせた土器・木製品について記述する。個々の遺物に関しては観察表にゆずり、ここでは概要のみを記す。

第2節 土 器

縄文土器から近世、近代の陶磁器に至るまで出土しているが、その主体は古墳時代初頭、古墳時代後期、奈良・平安時代の土器・須恵器である。このうち古墳時代初頭のものは微高地上の遺構に伴うものであり、古墳時代後期～平安時代のものは西大谷川内の堆積土中より出土したものである。又、量的には前者に比して後者が圧倒的に多い。

古墳時代初頭の土器

第29図の土器がこれに当たる。これらの土器はS D15溝状遺構の覆土中から一括出土したものであり、壺・甕・高壺・罐・土鉢等の器種を持つ。このうち壺1～6は複合口縁のものと、折り返し口縁を持つものがあり、口縁部に2条あるいは4条の沈線文、凸縦文が施されているものや口縁部内面に斜行縄文、振縄文、竹管による刺突文が施されているものがある。又、4の壺は頸部で破損しているが、削れた部

位にそって2ヶ所焼成後穿孔されており、破損した後、修理したと考えられる。甕(7~10、14、15)はS字状の口縁を持つ台付甕が半体となっている。

高坏(12、13)は、眞部のみ残存しているものだが、小型で、脚部がなだらかに開いている。また透かしのみられるものもある。

小型壺(16)は頭部より上が欠損しているが、平底で、その胸部は丸くなっている。

埴物は、体部と口縁部の境がくの字状にくびれ、口縁部が外向しており、最大径が口縁部にあるものである。

土鉢(18)は、幅4cm、長さ4cmの太くて短いものである。

西大谷地区旧大谷川出土の須恵器・灰釉陶器・山茶碗

第30図の上器がこれに当たる。

須恵器は、その器種として壺・蓋・高坏・鉢・瓶があげられる。

19~22は須恵器の坏身であるが、蓋受けを持つものと持たないものがある。蓋受けを有するものの中にも、その立ち上りが高く、更に口縁端部が段を有し内傾するものから、蓋受けの立ち上りが低くさらに内向しているものもみられる。24の坏蓋は休部に稜を有し口縁端部は丸くなる。25は壺の蓋である。

高坏は、長脚二段透かしのもの(26~30)と無蓋のもの(第27図)である。26は上段に切り込み状の透かしを二方向に、下段に長方形の透かしを三方向に持つ。30は坏部と脚部の極く一部が残存するのみである。坏部は蓋受けの立ち上がりが内傾し口縁端部が丸く仕上げられている。また、脚部は上段に長方形の透かしを二方向に持ち、長脚二段透かとなる。27は休部に明確な棱を持ち、口縁部は極くゆるく内湾する。

瓶(28)は、胸部が球形を呈しており、やや肩上部に穿孔がみられる。口頭部には櫛描波状文が施されている。

壺には、小型短頸壺、台付壺、長頸壺、光瓶がみられる。小型短頸壺(29)は平底で、体部は直線的に立ちあがるものである。台付壺(35)は、壺の部分が丸味をおび口縁部が直立気味になり、台部が直線的に開く器形のものである。長頸壺(36)は高台を有し肩部が張るもの、また花瓶(37)は低い高台を持ち肩部が張るもので口頭部はラッパ状に開いている。大型壺(38)は、その胸部に丸味を持ち、最大径が肩上部にあるもので、その口頭部は外反し、断面三角形のふくらみを有する口縁部に至る。自然軸がかかる。

灰釉陶器はその器種として、壺・皿・手付小瓶があげられる。壺(32)は、角高台を有し、体部にやや丸味を持っており、皿(31)は、角高台であり、わずかに屈曲する体部を持つ。両者とも、内面に釉がみられる。手付小瓶(33)は、底部に糸切り痕がみられる。

山茶碗(23)は、高台が比較的高くその断面は三角形を呈しており、体部には若干丸味を持っている。西大谷地区旧大谷川出土の古墳時代後期・奈良・平安時代の土師器

第31図・第32図39~61がこれにあたる。器種としては、壺・鉢・高坏・壺・器台・甕・瓶があげられる。

壺は、その内容として、器高が低く口縁部は内湾し、外外面にヘラみがきを施してあるものや(39)深めで口縁部が内湾もしくは直立するもの(42~44)、また、口縁部と体部の境に稜をもつもの(40~

41) 体部が外向してそのまま口縁部に至るもの(46)等があげられる。底部に木葉痕を残すものが多い。

45・60は小形壺であるが、体部は丸味をおび、そして、口縁部と体部の境に稜をなしている。

鉢(47・48)は、双方とも平底で、口縁部は内湾する。

器台(52)は、坏部、脚部とも直線的に開く器形であり、坏部内面および坏部下部から脚部上部にかけてヘラみがきがみられる。

49～51、53～58が壺であるが、その形態は多様である。49は丸底で胴部が球形をなし頭部がくびれ、口頭部が直線的に開く器形のものである。50、51は平底で、胴部はやや丸味をおび、頭部がゆるくくびれている。50の胴部外面にはハケ目が残り、作りは粗雑である。51の胴下部にはヘラけずりがみられる。53～57は小型の壺である。53～56は、胴部が丸味をおび、頭部がゆるやかにくびれる器形である。器壁は厚く、胴部外面にヘラ削りが施されている。53・54・55には頭部に2ヶ所の穿孔がある。57は平底で、体部がほぼ直立して口縁部に至る器形である。58は大型壺で、平底であり、胴部は球形を呈している。

甌(59)は、頭部がくの字状にくびれ、胴部が丸味をおびている。甌は把手を有するもので、その体部は直線的に開き、口縁部に至る。

ここにあげた土師器は、ほとんどが古墳時代の鬼高式土器の系統のもので、須恵器の年代観に対応する。

宮川2区出土の土器

第32図62～71がこれにあたる。62～66が土師器で、67～71が須恵器である。

土師器の坏(62～66)は、口縁部が内湾しているものと、口縁部と体部の境にゆるやかな稜を持つものがある。前者は内面にヘラみがきが施してある。また、両者とも器高の低いものから高いものまでみられる。

須恵器には、坏・蓋・短頸壺、半瓶がみられる。

蓋(67)は、体部に稜を有する深いもので、口唇部内面をヘラ切りしている。

坏(68・69)には蓋受けが付いているが、その立ち上りは低く、内向している。

短頸壺(70)は丸味のある胴部に、直立する口頭部が付くものである。

平版(71)は、胴部がやや丸くて肩部が張り、口頭部は直線的に立ちあがるものである。

宮川2区からはこのように、6世紀前半から7世紀前半に限定される土器が出土している。

実測土器年代観一覧表

		須 惠 器 • 灰 軸 陶 器	土 師 器
	4世紀		1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・13・14・15・16・17・18
古墳時代	5世紀末	19	
	6世紀前半	28	39・40・41・42・43・44・45・46・47・48・49・50・51・52・53・54・55・56・57・58・59・60・61・62
	6世紀後半	67・69	63・64・65・66
	7世紀前半	20・24・26・30・35	68・70・71
奈良時代	7世紀後半	27・36	
		21・22	
平安時代	9世紀	37	
	10世紀	31・32・33	2・9
鎌倉時代		23	

第3節 木 製 品

本製品に残しては西大谷地区・宮川2区の旧大谷川内より出土した遺物の中から典型的な祭祀遺物である人形・馬形・畜串のみを取り上げた。又、これも現在整理中であるので58年度の調査で出土したものすべてではない。

人形 薄板を切り欠いて人間の形を表現したものが人形である。神明原・元宮川遺跡ではこの人形が6世紀～平安時代の遺物に伴って23個体以上出土している。これらの人形はいくつ間に類型化できる。

① 薄板の一端を切り欠いて圭頭状の頭頂部を作り、両側辺を上ドよりほぼ同角度で切り欠いて頭部・頸部・肩部を作り出す。足は下端部より三角形に切り欠いて作り出す。（第33図-5001）

② ①とはほぼ同様の作りだが、肩部が水平な切り込みにより作り出されており怒り肩となることと、腕が深い切り込みにより表現されている。（第36図-602）

③ ②とはほぼ同様であるが腕が浅い切り欠きにより表現されている点が異なる。足は破損しており不明（第34図-5011）

④ 頭部以下は②とはほぼ同様であるが頭部は丸みをおびている。（第33図-5005）

⑤ 頭部～頸部にかけては①と同様の作りであるが腰部が両側辺上下よりほぼ同角度で切り欠いて表現されている。（第33図-5003）

- ⑥ ⑤に類似するが頭部、腰部の切り欠きが上からはほぼ水平、下からは鋭角に切り欠かれている。
(第34図- 5008)
- ⑦ 极く小型(10cm以下)の人形である。頭頂部はほぼ平坦となり頸部は両側より上からは鋭角・下からはほぼ水平に切り欠き、腰部は上からはほぼ水平に下からは鋭角に切り欠いている。この腰部の切り欠きは下端からの切り欠きとともに足の形成も兼ねていると考えられる。
- ⑧ 全体の作りは①にはば類似するが頭頂部は平坦である点、顔の表現が浅い彫り込みによりなされている。(第33図- 5006)
- ⑨ やや幅広の薄板を加工し、①と同様の頭部を作り出すが、腰部・脚部は表現されず、下端は串状となる。手は浅い切り込みにより表現される。(第35図- 5013・5014)
- ⑩ ⑨と類似するが幅が⑨ほど広くなく、又肩が怒り肩となる。(第36図- 603)

馬形

西大谷1・2区、宮川2区双方から馬形が出土している。

馬形木製品は人形同様、薄板を切り欠いて馬の形を作り出したものであり、裸馬と、鞍を作り出した飾り馬があるといふ。又、墨書きにより口などが描かれているものもある。今年度調査で出土したものには明確に鞍を作り出したものや、墨書きのあるものは無かったが、多様な形態のものが含まれていた。出土した馬形の形態を分類すると以下のようなになる。

- ①細長い板の両端を上辺より切り落し台形状にし、上辺に浅い台形状の切り欠きを行い背部を作り、下辺より2ヶ所切り欠いて頭部、腹部、尾部を作り出したもの(第38図- 5100)
- ②細長い板の一端を上へ広がるように切り落し、他端を端部が一部残るように下へ広がるように切り落す。そして、後者の端部に近い下辺に近接して2ヶ所の切り欠きを行い、もう一端に近い下辺にさらに一ヶ所、計3ヶ所の切り欠きを行っている。他遺跡での出土例では、近接した2ヶ所の切り欠きのうち端部に近い方の上へ目を镂きしているものがあるので、この切り欠きは口を表現していると考えて良いであろう。(第38図- 5102)
- ③半月形の板の弧の中央部に切り欠きを入れたもの(第39図- 5107)
- ④半月形の板の弧と弦の両方に浅く切り欠きを行ったもの(第39図- 5109)
- ⑤平行四辺形の板の上辺に浅い切り欠きをしたもの。
- ⑥⑤の加工に加え、下辺に2ヶ所切り欠きを入れたもの。

これら、馬形木製品の多くには下辺の腹部に当る部分に切り込みがあり、この部分に棒を刺してこれを地面に突き立てたと考えられていたが、第38図の5100の馬形木製品は串状の棒が刺った状態のまま出土し、從米の説をうらづけた。又、5106の馬形木製品に密着して5106の串が出土しており、セット関係を形成する可能性がある。

斎 串

祭祀に用いられたと考えられる『細長い薄板の両端を削って尖らした串状の木製品』が斎串と呼ばれるものである。その初現は現在のところ6世紀中頃と考えられているが、用途などはまだ十分解明されていない。今回の調査では6世紀後半～7世紀にかけての土器を伴って90個体以上が出土している。

一般的な斎串は上端を圭頭状に作り、下端を刃側から鋭く尖らせ、上部両側邊に切り掛けを施している。大谷川ではこの形の斎串も多数出土しているが、その他多くの形態のものが出土している。これらはいくつかの類型に分類できる。

- ①刃端が圭頭状となるもの
- ②両端が一側邊から切り落され平行四辺形を呈するもの
- ③両端が一側邊から切り落され合形状を呈するもの
- ④はし状の形態を持つもの
- ⑤一端が一側邊から切り落され、他端は刃側邊から切り落されたもの
- ⑥小形の斎串で舟形を呈するもの

これらの形態の類型の中でさらに切り掛けの有無・数・部位等により細分が可能である。

第4節 木簡

木簡は一点だけ出土している。他に文字資料としては、墨書き器が五点出土しているので、今後の調査による資料の増加が期待される。〔於〕墨書き器には「+」「丂」という数字を表わしたもの他、「有之」「田人」という文字が書かれたものがある。詳しいことは機会をあらためて紹介したい。

第1号木簡（図版61）

〔部〕

「他田里ノ主字刀マ真酒」 830719、N1240 長11.05×巾1.7×厚0.45cm

西大谷2区E43-14グリットの、旧大谷川流路内砂礫層から出土した。この地点での、土層と遺物の堆積状態は、古墳時代後期～奈良・平安時代のものが混在する場所であり、伴出遺物から木簡の年代を特定できる状態ではなかった。

木簡の形態は、長さ11.05cm、巾1.7cm、厚さ0.45cmと長方形の薄板である。上端は角形、下端を圭状にしているが、尖端を切り落している。側面から裏面にかけて、長軸と直角方向の刀痕による線が三本みられる。側面にはさらに、上から2本目と3本目の間にもう一本線があり、合計4本となっている。裏面におけるそれぞれの間隔は、上から④22.1mmで1本目の線に、そこから2本目の線までは⑧25.6mm、3本目の線までは⑩31.3mm、下端までは⑪31mmとなっている。下半部の⑪⑫は、唐尺(2957~31.5cm)の $\frac{1}{10}$ つまり一小に近い値となっている。一方、上の④⑧は直接あてはまる例がないが、考えているなら⑪⑫は律尺(23.00~25.40cm)に近いのだろうか。

側縁では、裏面と対応する3本の線以外に⑩の中間にもう一本線があり、上から15.8mm下から15.5mmと、ほぼ均等に割りつけてある。

以上のようにこの線は、物指の目盛のようにもみえるが間隔が不定であるため速断できない。いずれにしても、この木簡の材料は、他の用途に使用したものを、木簡として再利用したものとみられる。材質はおそらく檜で板目板の木表に墨書きされている。表面は丁寧に削り面調整している。

兎形品であるが、上端から五文字目まで割れ目が走り、下端部で文字に影響の無い部分の一部が剥離している。墨痕は一部不鮮明なところもあるが、比較的はっきり残っており判読に不安はない。

文字については、「他」の字の人偏の部分が割れ目段差の高い方にあたりやや不明瞭である。しかし

人偏を省略し縦1本にして次の旁へ連続させた書き方をしていると解釈することもできる。これは酒の字の「酉」でも同様であろう。さらに印や里・主の字の上の部分のくずし方などいずれにしても草書風といえるだろう。また出・字・刀・マ・酒の文字のように「肩の丸い柔軟な筆使いがみられ、特に印は撫肩の[]構えに近い書き方であり、六朝風の影響そのものとはいえないまでも流れをうけているといえる。藤原宮木簡の書風（文献41）との関連が考えられる。

文字は全部で10文字あるが、字間=配字に次のような特徴がみられる。

① 「他印里」の3文字は、センターや右寄りに縱につながるように描っており、字間は少し離れ、独立した文字として書かれている。しかし一文字ずつの書き方は丁寧ではなく小さく塊塊となっている。

② 「戸主」は戸の構えの中に主が入ってしまい、あたかも一文字のように書かれている。

③ 「宇刀マ」の文字は、全部接しており、連続した文字で読みづらい文字である。

④ 「真酒」の文字は、この中で一番大きくしかもはっきりと読みとれる文字である。

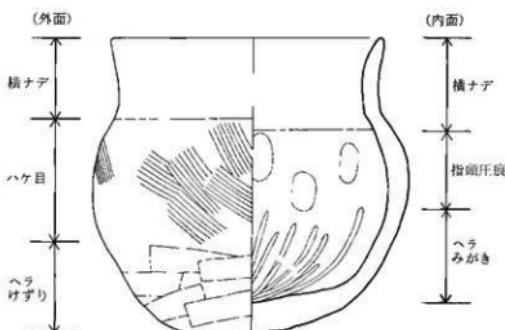
以上4つのグループに分類されるが、さらにグループ毎の字間は離れており、書き方の特徴などから、この4つずつのグループが『単位』として意識されて書かれていることがうかがえる。また他出、戸主、宇刀マの文字は字体もげ塊状となりくずした字で小さく書かれているのに対し、「真酒」の文字だけが大きく鮮明に書かれている。のことから、前者はおたがいに判っていることであるという感覚で手帳に書かれた文字といえる。そこでこの本簡は真酒という名前の項目をはっきりと識別する必要のある段階で書かれたのではないかと推定される。

次にこの本簡の用途・性格について考えてみる。下端部が尖り、空白部分があることから何かに差し込んで使ったものともみられる。用例としては品名が書かれていれば貢進物付札となるのだが行政末端では品名のない付札をつけることが一般的であるかどうか例を知らないので何とも言えない。今後の検討に待つ。

本簡の年代については、前記のように伴出遺物からは確定できないが、書かれた内容から検討すると「他庄郷」ではなく「他印里」とあることから715年の御川制施行以前とされる。「戸主」という書き方がでてくるのは701年の大宝律令施行以後とされるので701年から714年の間に限定されるだろう。10世紀前半に成立した「倭名類聚抄」によれば、当時の駿河国有度部に内屋（ウツノヤ）、間壁（マカベ）、他出（ヲサダ）、新居（ニヒイ）、託美（タクミ）、菅見（ナメミ）、會屋（アホシ）、七郷がありその一つの他出に該当する。「戸主」である「宇刀マ真酒」という人名が書かれているが、「宇刀マ」は「宇刀部」であり、「日本書記」大化二年三月辛巳条（646年）には「菟磯人」とみえ、天平十年（738年）「駿河國正税帳」にみられる「有度部黒背」（駿河國安部軍団少殺）や、「万葉集」卷4337にみえる「有度部牛鷹呂」（駿河國上人・防人）、また平城宮出土の木簡には「駿河國有度郡嘗見」、「有印忍万呂有刀部占万呂調堅魚十・序ト兩」とあり（寧業道文下巻・「平城宮木簡」——解説昭和44年）、有度の用字の例がふえた。

銅器表凡例

土 器



木 製 品

樹種 S=針葉樹

K=広葉樹

木取



A=彎目板

B=板目板

C₁=丸材 C₂=角材 C₃=三角



備考 古—古墳時代

奈—奈良時代

平—平安時代 (混在するものは併せて記入)

斬 串

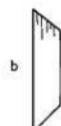
切り込み

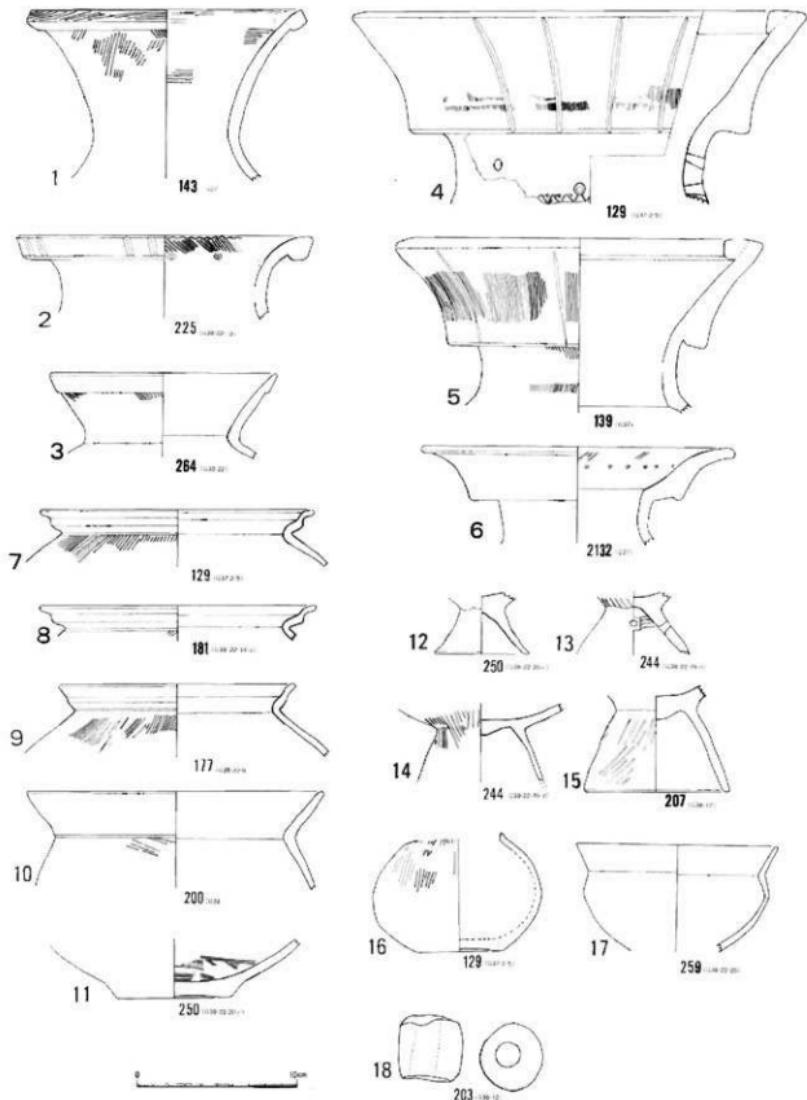
a=側辺に切り掛けをもつもの

切り欠き

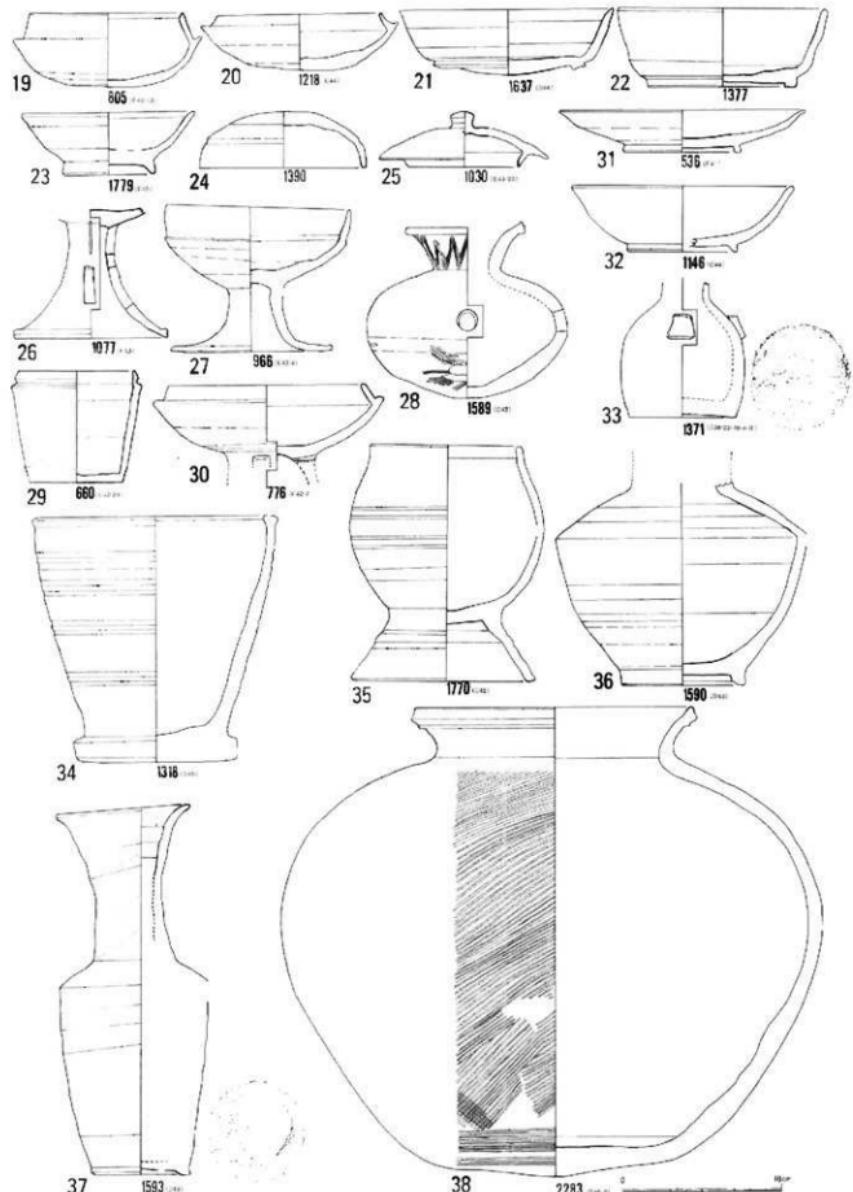
(今回の報告にはみられない)

b=上端に切り掛けをもつもの

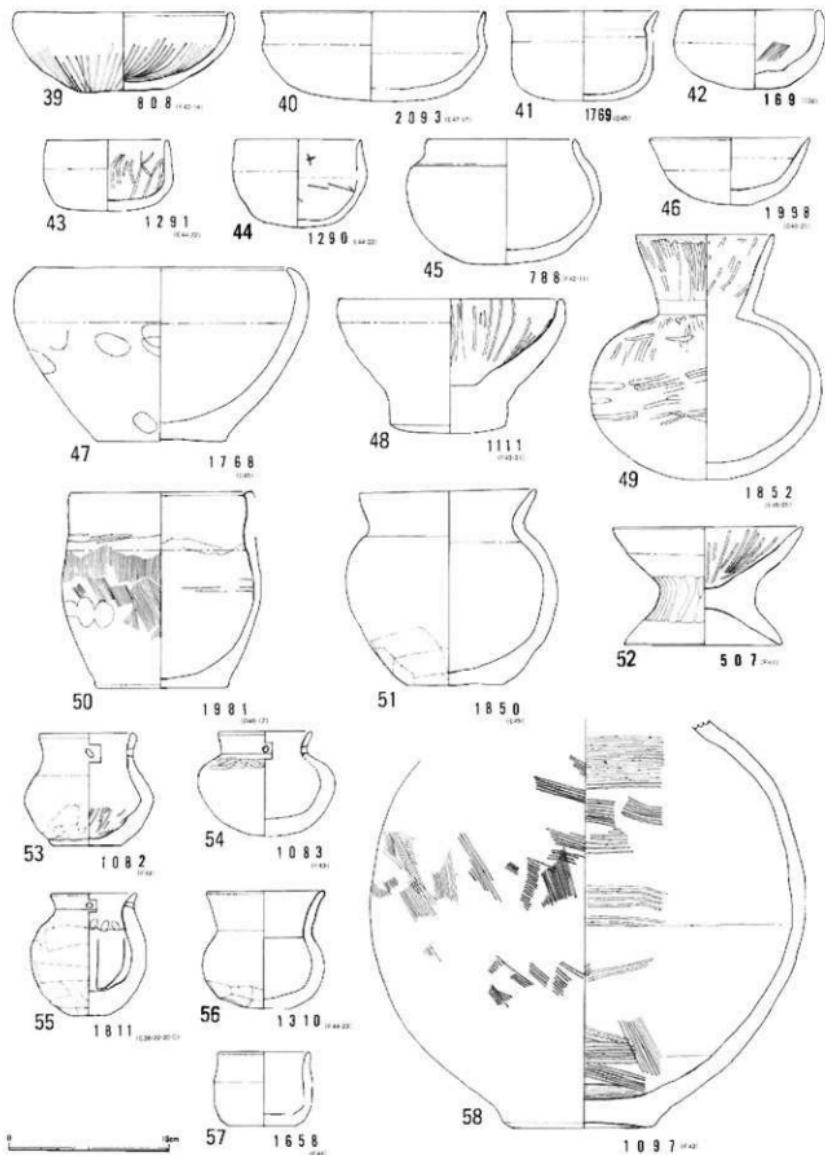




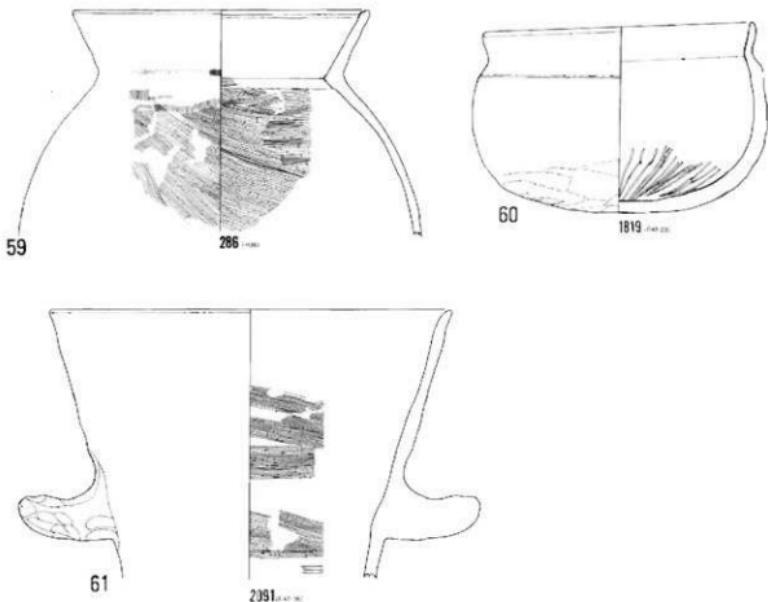
第29図 土器実測図 1 S D15埋土上層一括出土土器



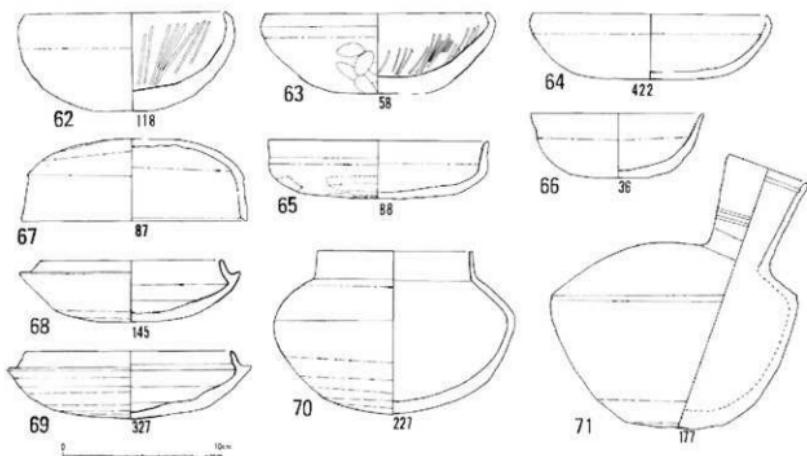
第30図 土器実測図2 西大谷地区旧大谷川内出土須恵器



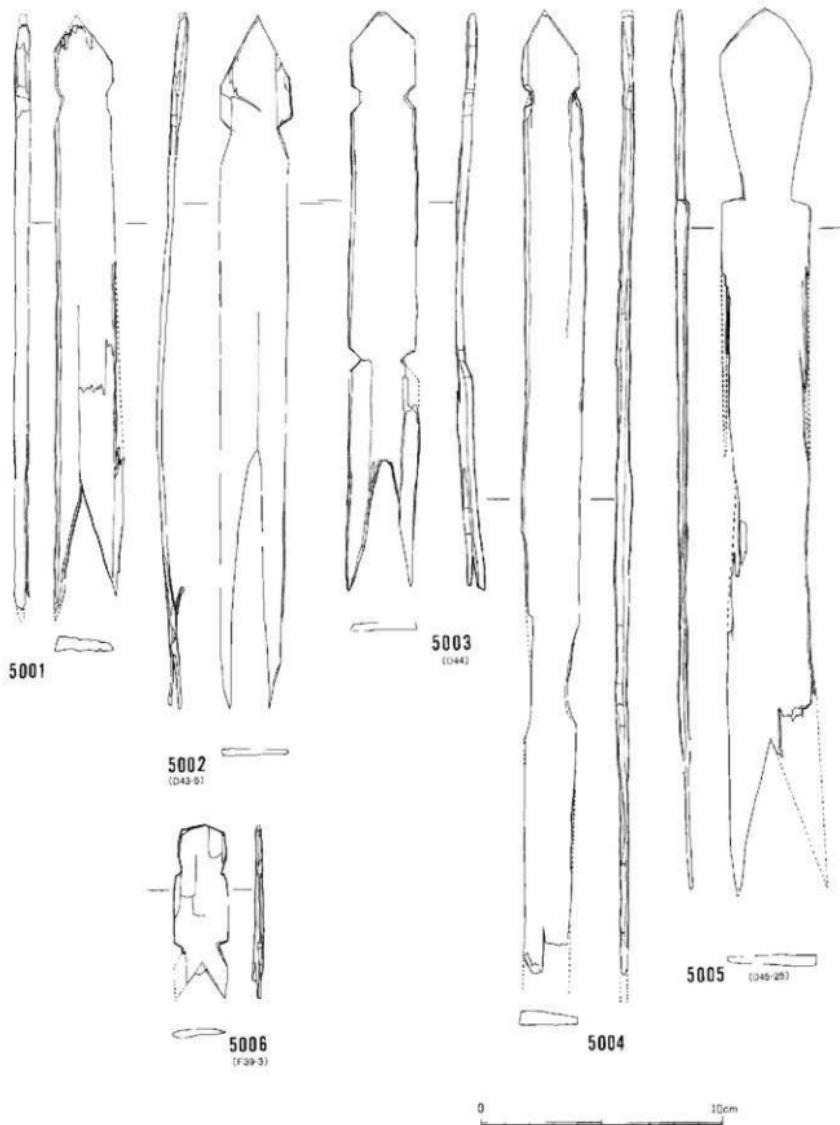
第31図 土器実測図3 西大谷地区旧大谷川内出土土師器



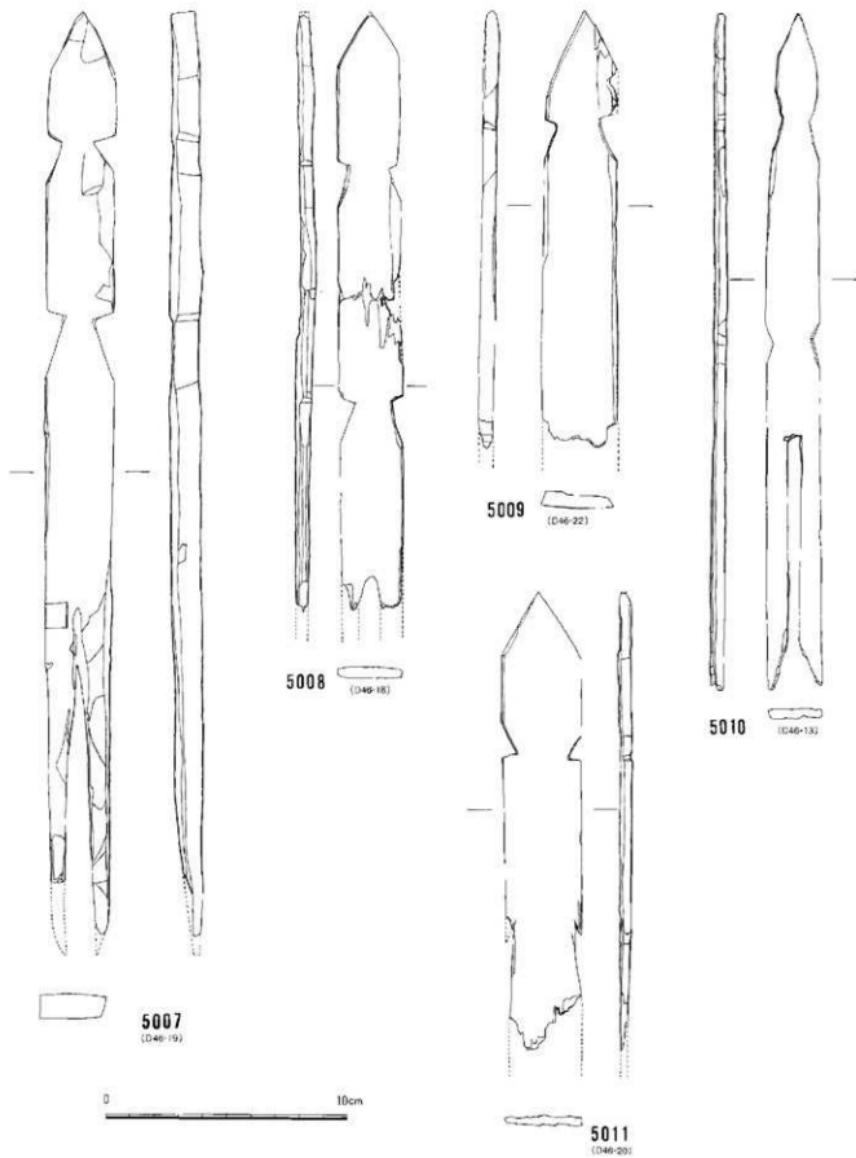
西大谷地区旧大谷川内出土土師器



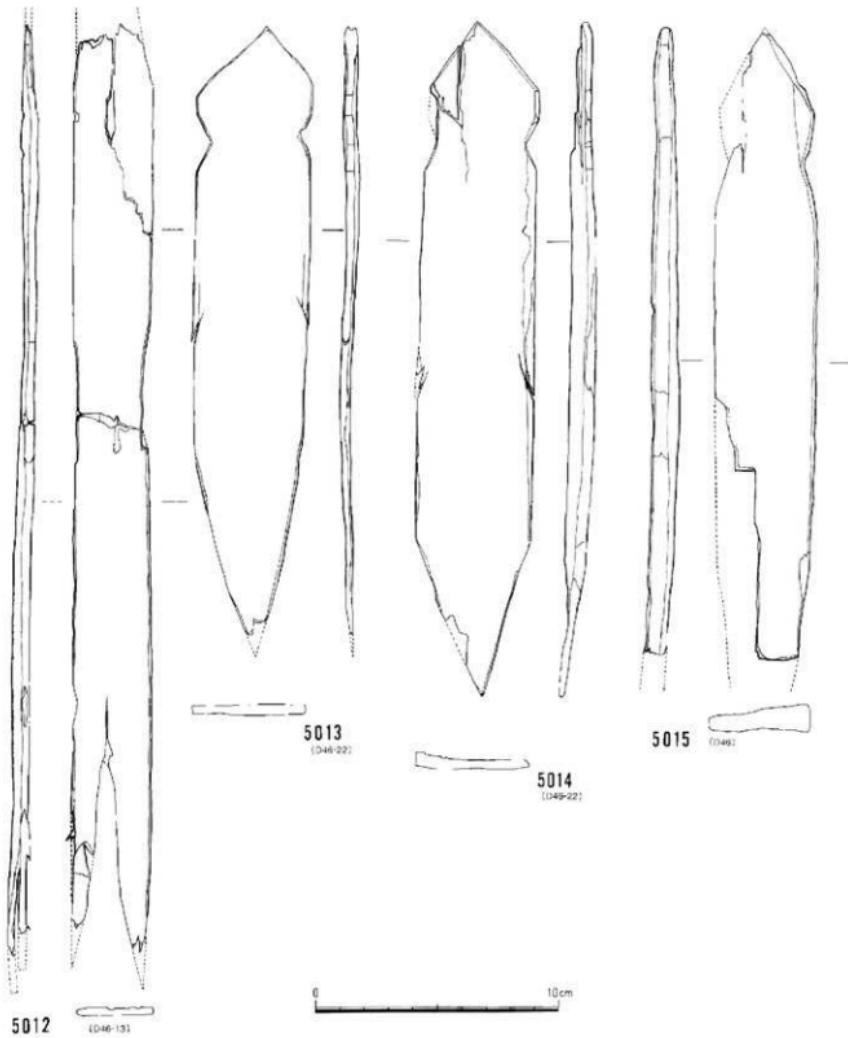
第32図 土器実測図4 宮川2区出土旧大谷川内出土須恵器・土師器



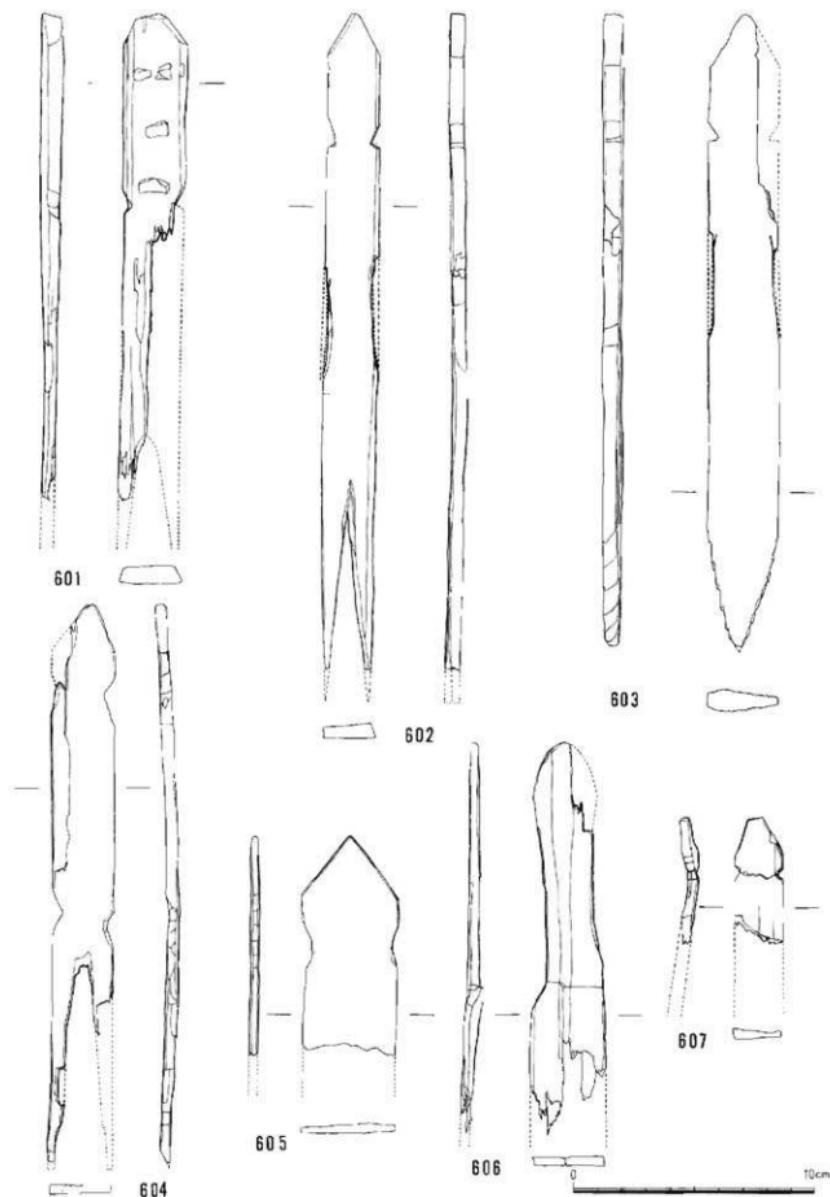
第33図 人形実測図1 西大谷地区F39・D43～D45グリッド出土



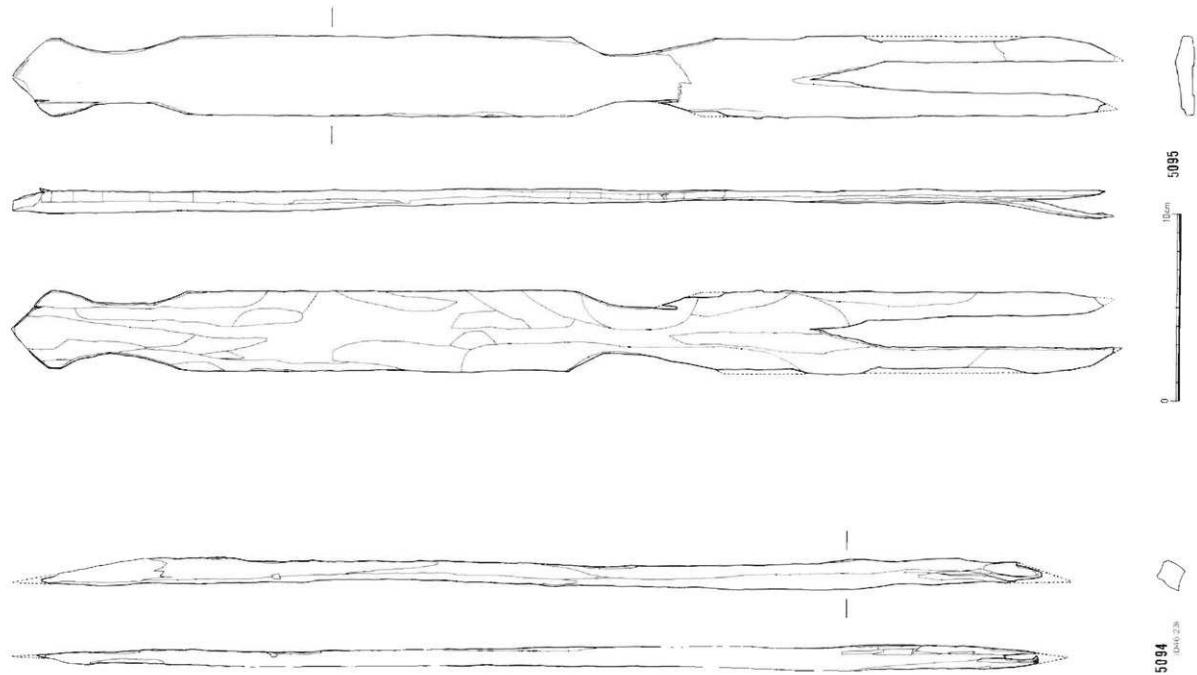
第34図 人形実測図2 西大谷地区D46グリッド出土



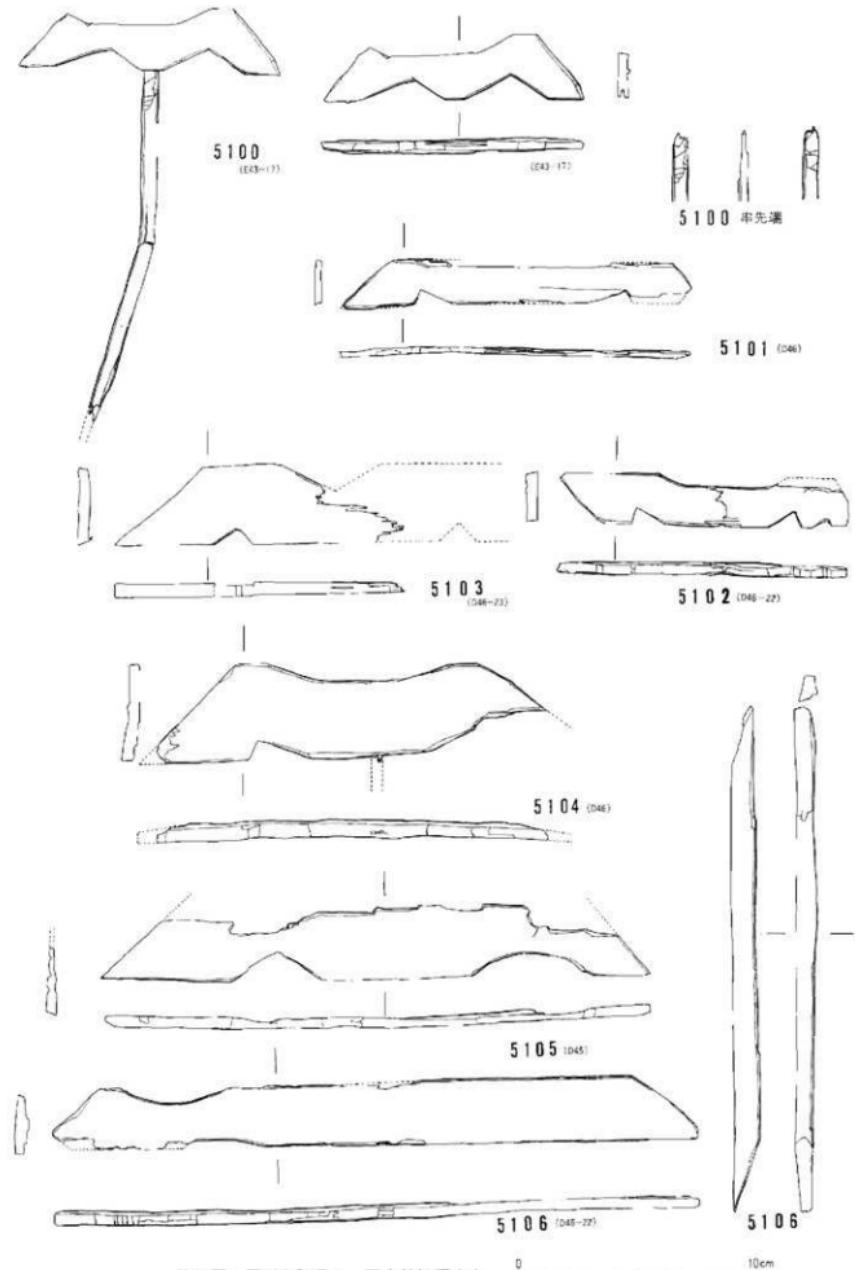
第35図 人形実測図3 西大谷地区D46グリッド出土



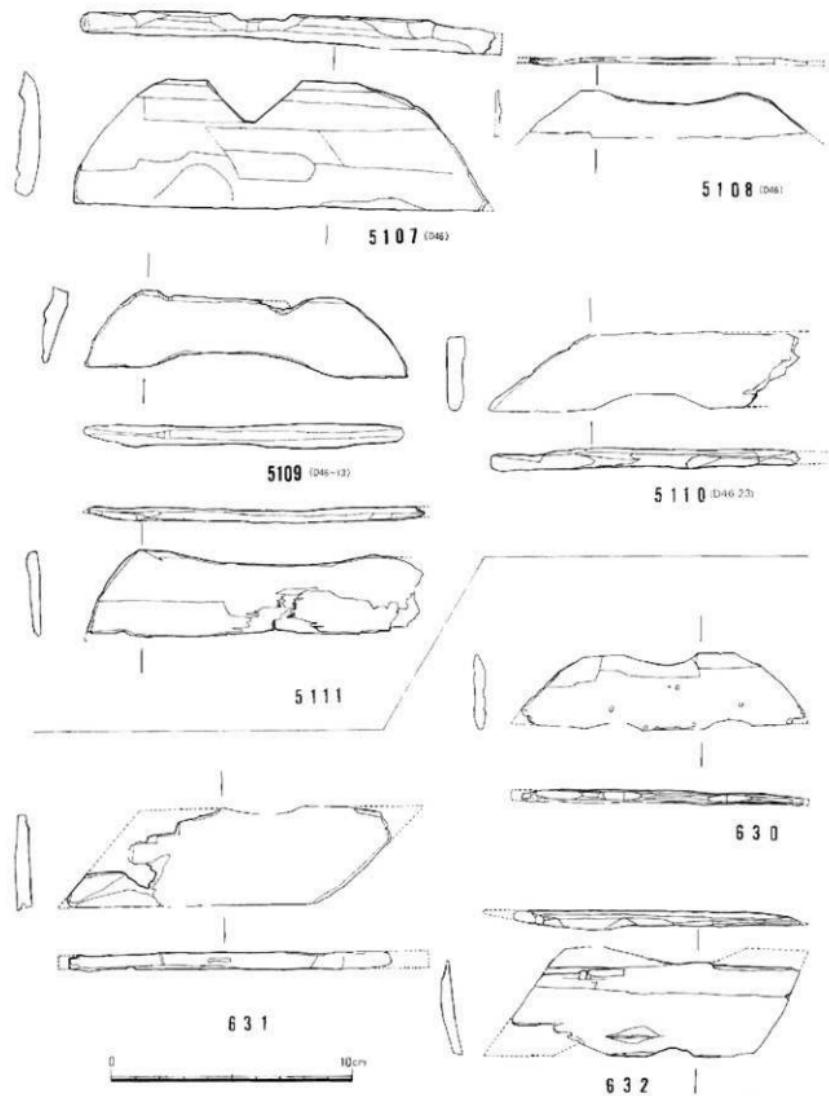
第36図 人形実測図4 宮川2区出土人形



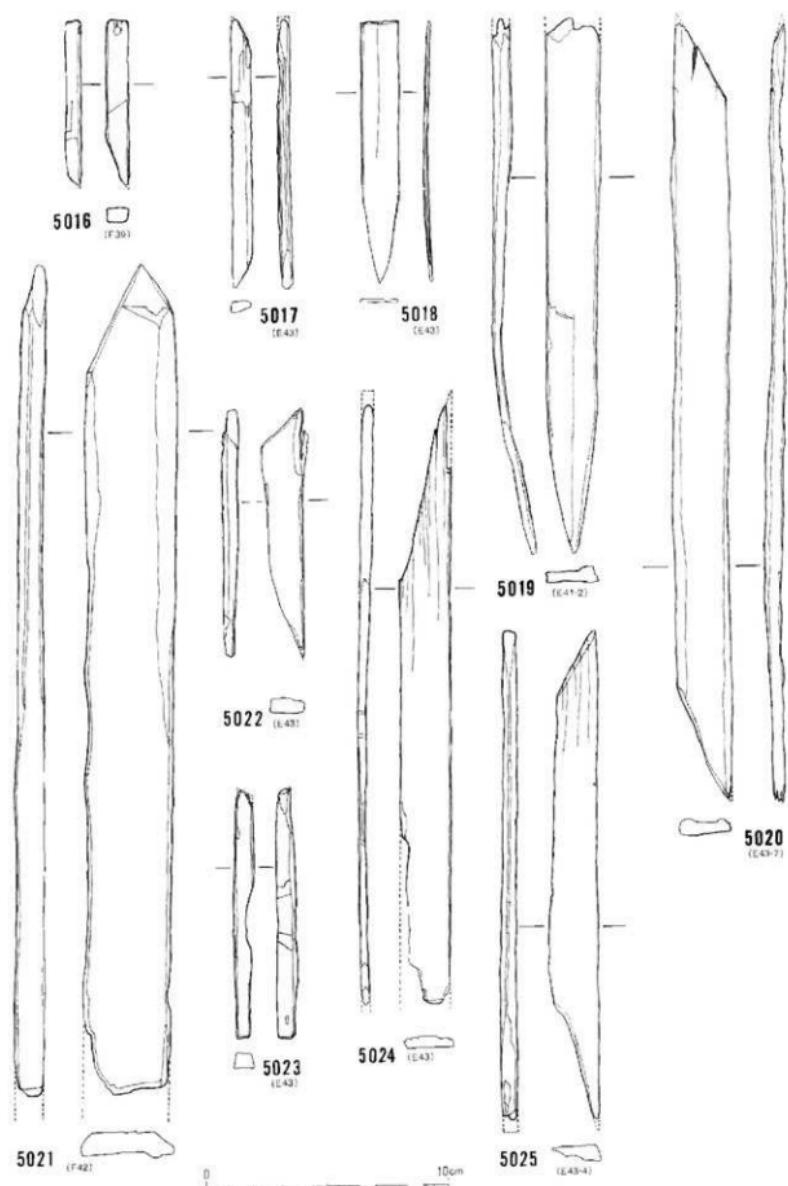
第37圖 西大谷地區出土大形人形・畜串実測図



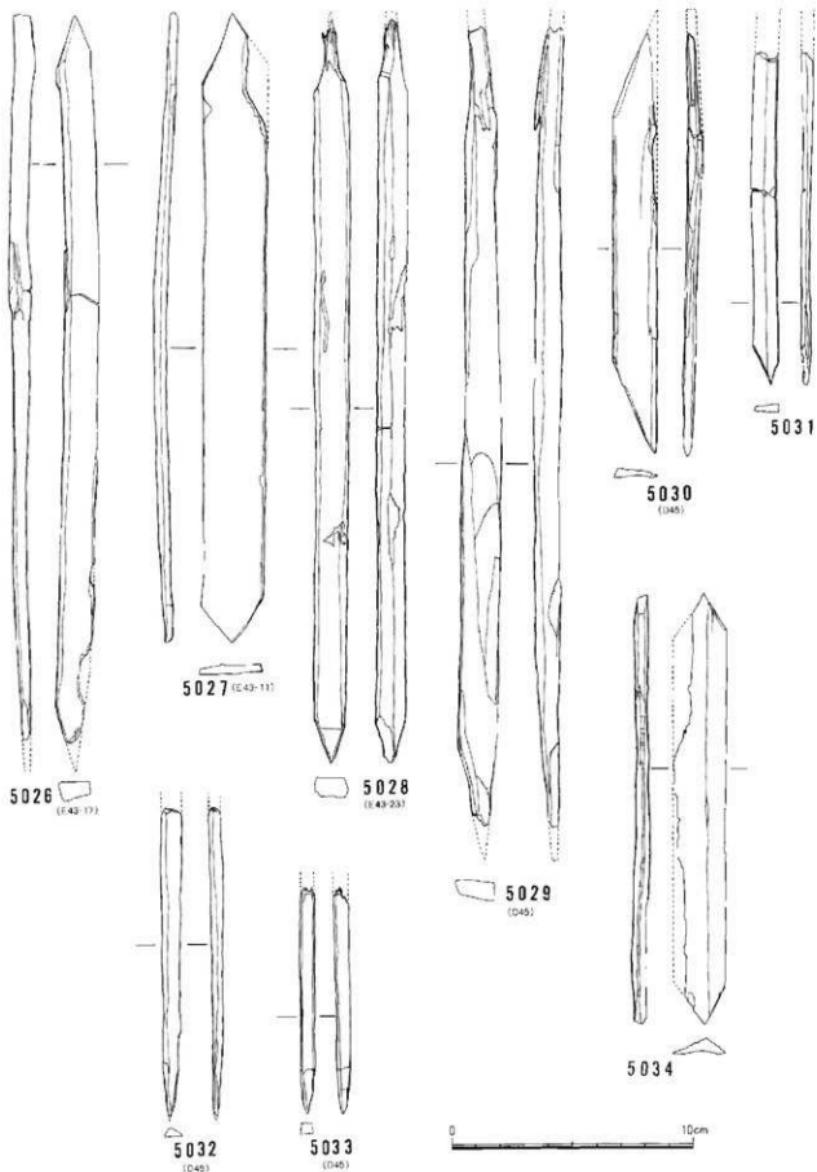
第38図 馬形木製品1 西大谷地区出土



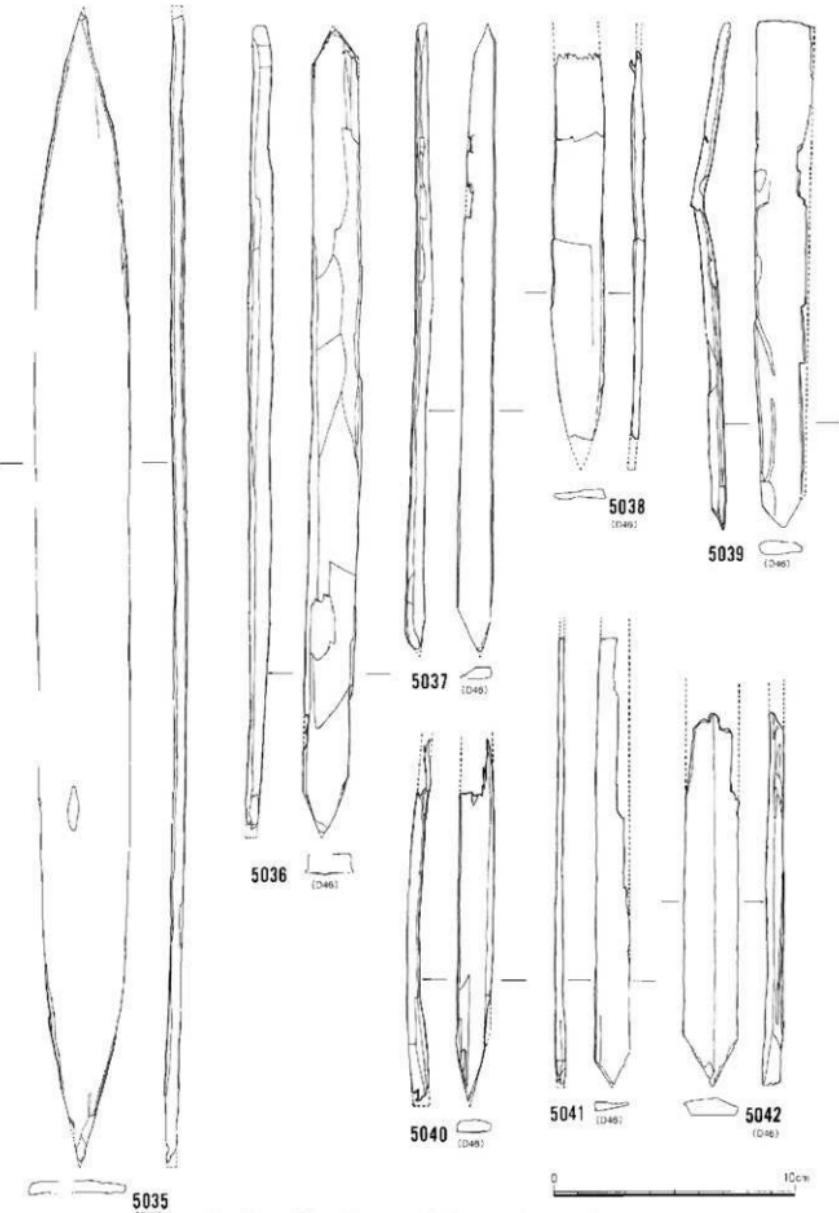
第39図 馬形木製品 2 西大谷地区出土、宮川地区出土



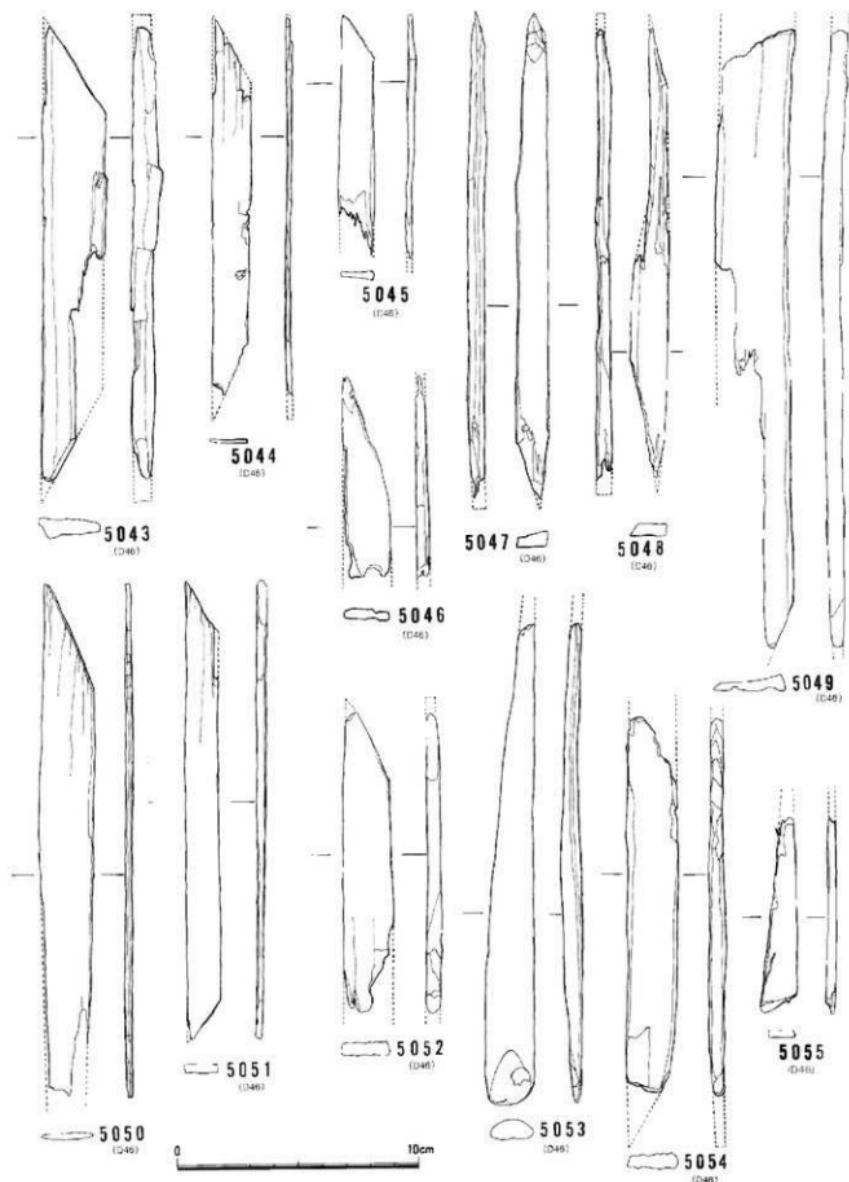
第40図 斎串実測図1 西大谷地区 F39～E43グリッド出土



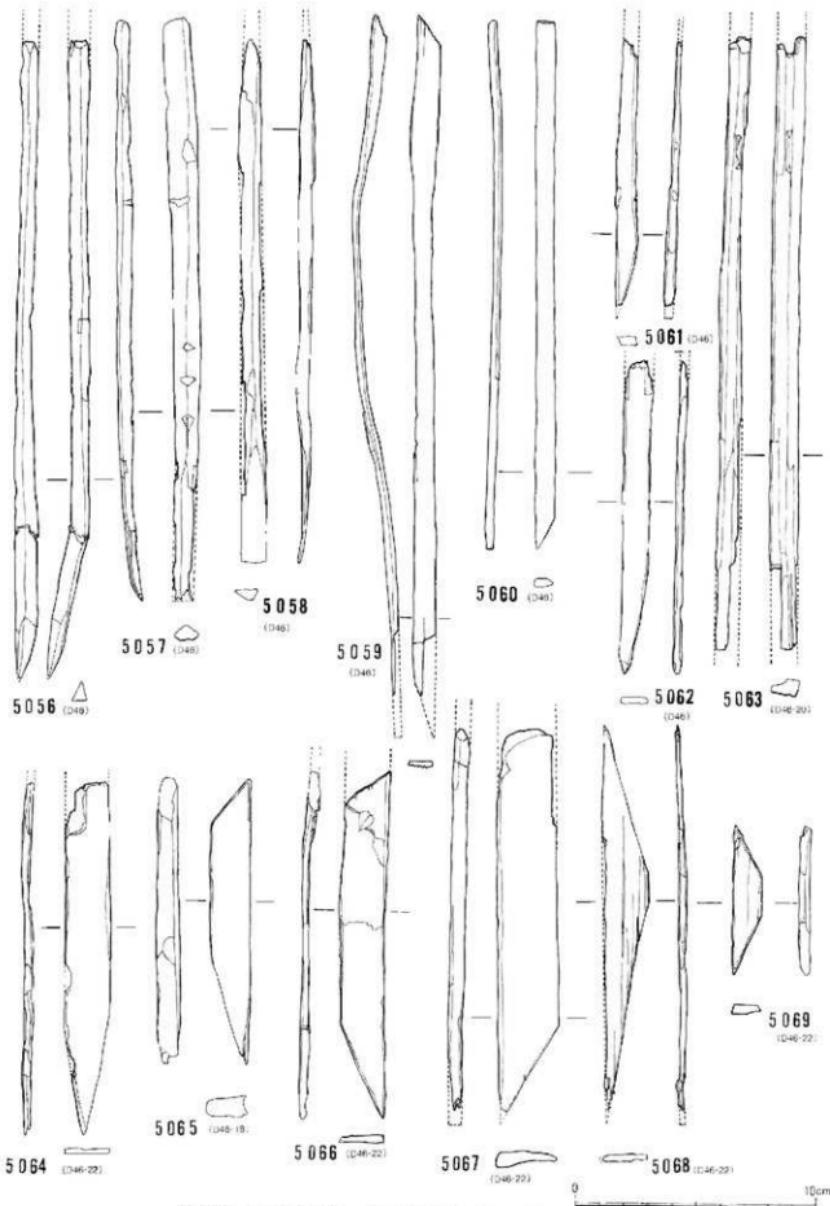
第41図 斎串実測図2 西大谷地区 E43~D45グリッド出土



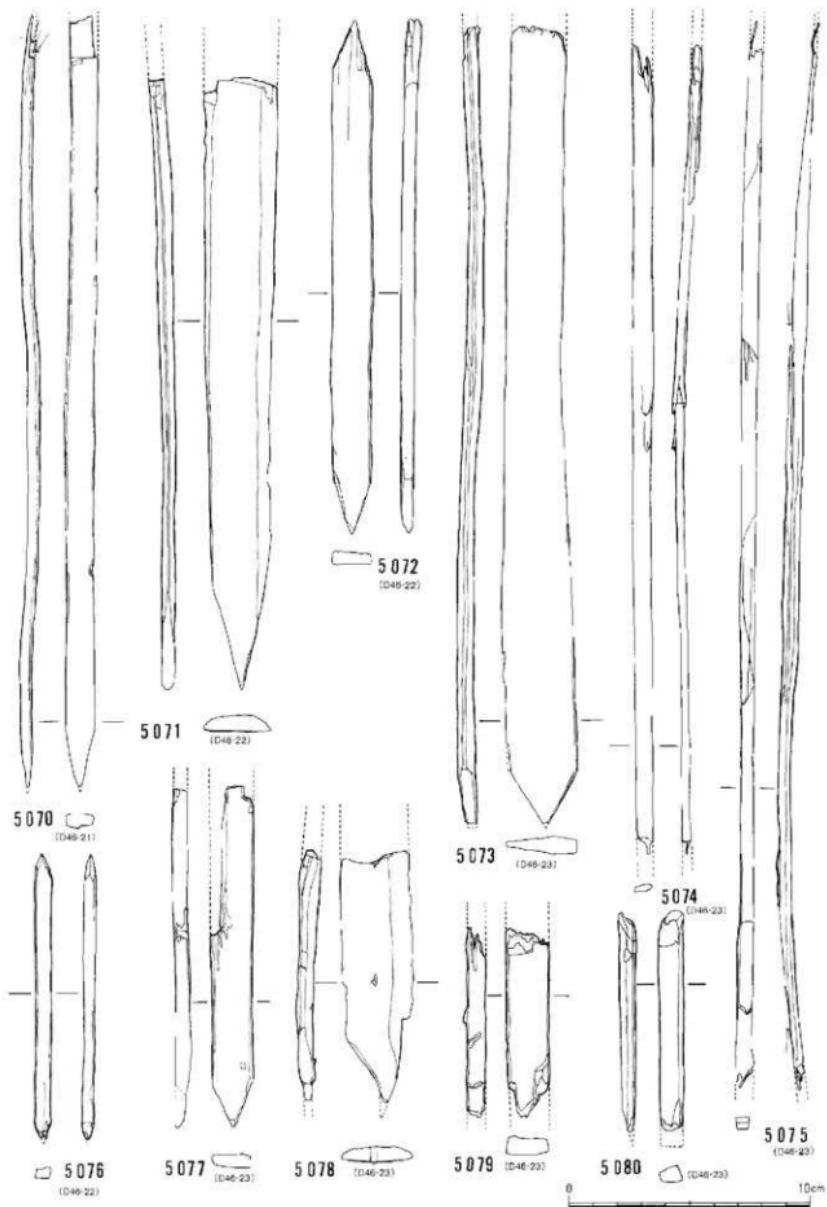
第42図 斎串実測図3 西大谷地区D46グリッド出土



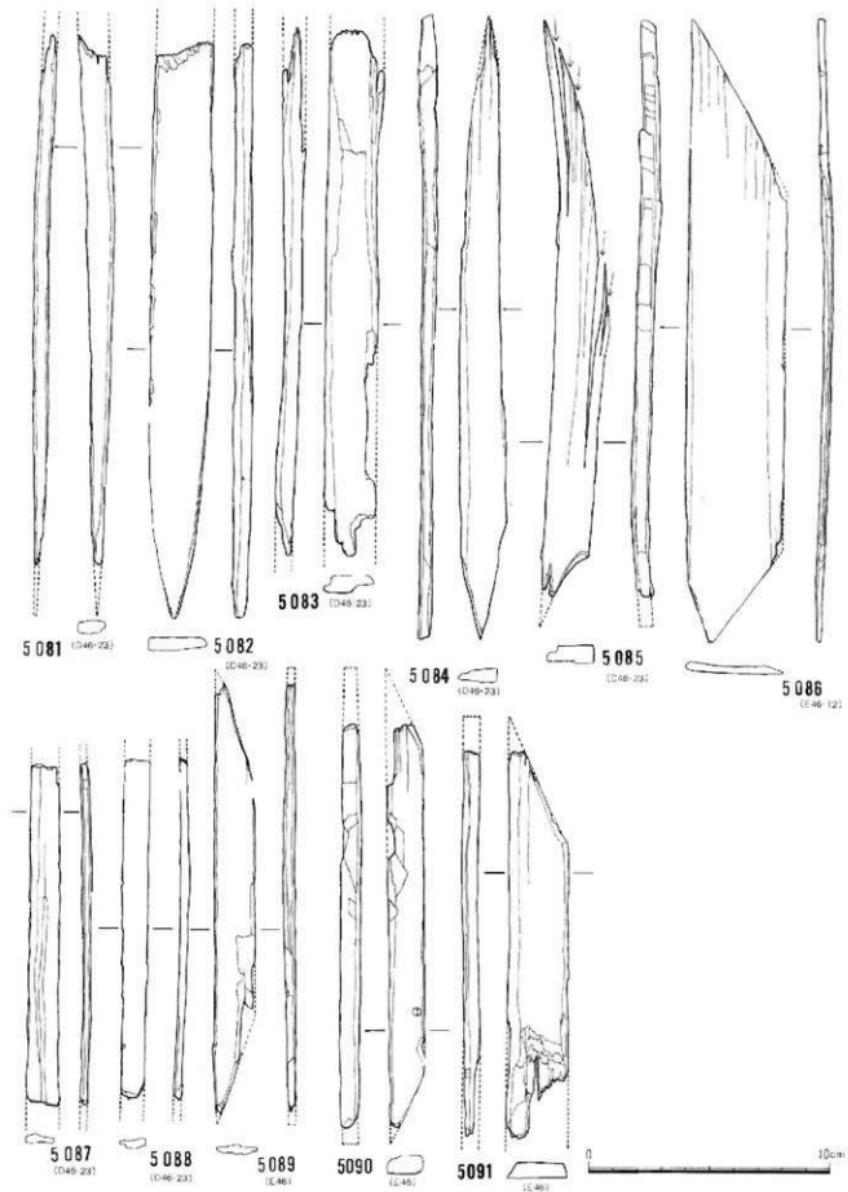
第43図 斎串実測図4 西大谷地区D46グリッド出土



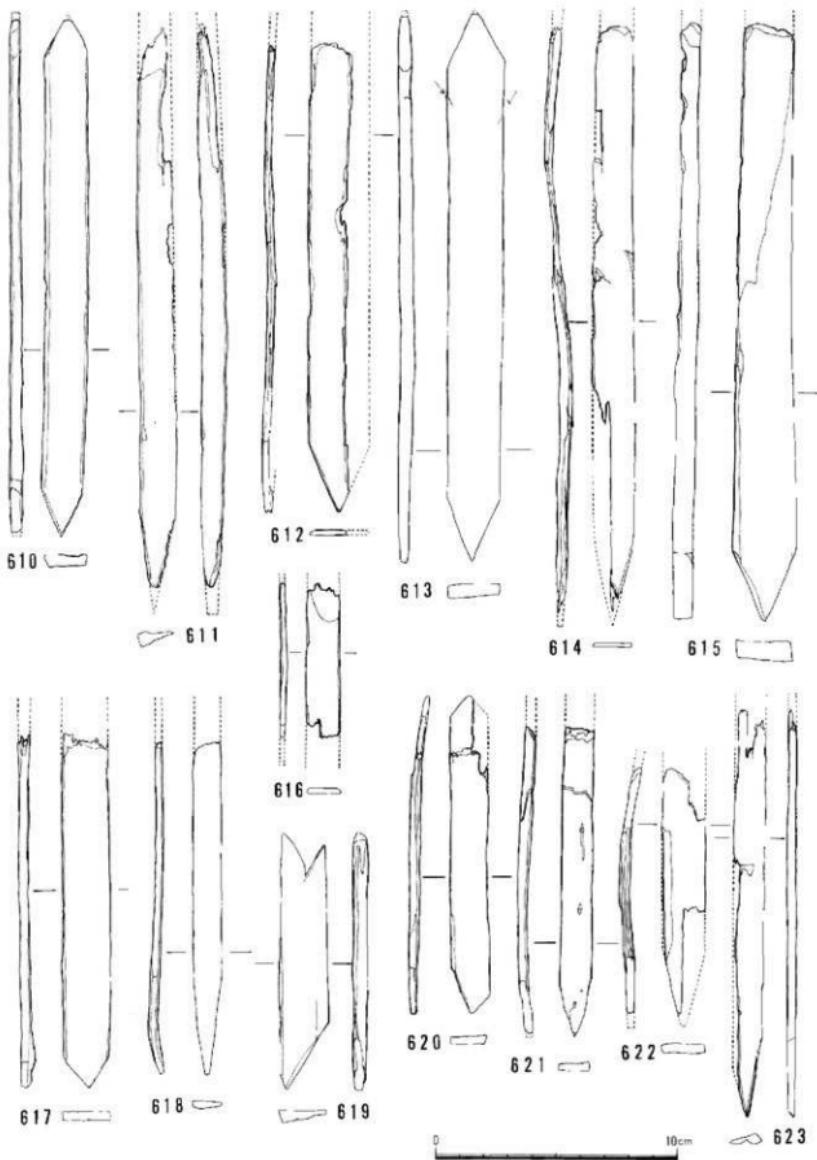
第44図 斎串実測図5 西大谷地区D46-22グリッド出土



第45図 斎串実測図6 西大谷地区D46-23グリッド出土



第46図 斎事実測図7 西大谷地区E46グリッド出土



第47図 斎串実測図 8 宮川2区出土

土器観察表

図 No.	遺物番号 器種	計測箇所 グリッド ()	は推定 形態の特徴 定 値	手 法 の 特 徴	色調 胎土・焼成		備考
					口縁部を欠く。頭部より下に欠損している。 (17.6)	口縁部は外反しながら開口部は内側に折り返して口縁部がみられる。 口縁部は外反しながら開口部は内側に折り返され肥厚している。	
1	143 土師器 壺	G 37	口 縁 (17.6)	口縁部を欠く。頭部より下に欠損している。 口縁部は外反しながら開口部は内側に折り返して口縁部がみられる。 口縁部は外反しながら開口部は内側に折り返され肥厚している。	口縁部内面には結節繩文が施され、その下部に竹青による刺突がみられる。	色調 淡褐色 径1mm程度の砂粒を含む。 胎土 1~1.5mmの砂粒を含む。 焼成 良好	
2	225 土師器 壺	G 38-22 -12	口 縁 (18.6)	口縁部が残存。 口縁部は折り返し口縁となつており、肥厚している。外面に狭い面をなし その上に、2本単位の縦位の棒状浮文がみられる	口縁部内面には結節繩文が施され、その下部に竹青による刺突がみられる。	色調 淡褐色 径1mm程度の砂粒を含む。 胎土 塵母・長石を含む。 焼成 良好	
3	264 土師器 壺	G 38-22 -19、20、 24、25	口 縁 (21.4)	口縁部が残存。 折り返し口縁になっており、口縁部はやや肥厚する。が、口唇部は薄くなっている。 頭部は「く」の字状にくびれる。	口縁部外面の折り返し部分の下にハケ目が残存している。他は表面摩耗のため不明瞭。	色調 淡茶灰色 径1.5mm程度の砂粒を多く含む。 胎土 赤色粒子を含む。 焼成 良好	
4	129 土師器 壺	G 37-2 -5	口 縁 (28.3)	口縁部が欠損。 幅の広い複合口縁である。 口縁部が内面に折り返され、折り返し部の上面及び内面に平らな面を作っている。 複合口縁部外延は4本単位の縦方向の沈線がみられる。何組あるかは不明。 頭部には接合のための穿孔が、2ヶ所みられる。	複合口縁部の一部にハケ目が残るが、横ナデが施されている。 頭部には結節繩文が施される。	色調 淡褐色 径1.5mm程度の砂粒が多く含まれる。 胎土 塵母を含む。 焼成 良好	
5	139 土師器 壺	G 37	口 縁 (23)	口縁部が欠損。 複合口縁であり、広い。そこに縦位の沈線がみられる。口端は内側に肥厚しており、上面、内面は平らになっている。	一部にはハケ目がみられその上に横ナデで消している。 繩文が頭部の下位にみられる。	色調 暗赤褐色 径1mm程度の砂粒を多く含む。 胎土 塵母を含む。 焼成 良好	
6	2132 土師器 壺	G 37	口 縁 (19.5)	口縁部のみ残存。 複合口縁である。口縁は大きく外反する。	口縁部内面には擬似繩文が施文され、その下に連続する竹管が施されている。	色調 淡褐色 径3mm以下の砂粒を多く含む。 胎土 塵母を含んでいる。 焼成 良好	

図 No	遺物番号 器種	グリッド 定	計測値(cm) 口 径 (17.1)	形態の特徴 口縁部約1/4残存。 S字状口縁を有する。	手法の特徴 脚部に粗い、ハケ目が施 される。 口縁部外面は橋ナデ。 他は表面摩耗のため不明 瞭。	色調 胎土 石英・雲 母を含む。 焼成 良好	調 胎土・焼成	備考
							定	
7	129 土師器 甕	G 37-2 5	口 径 (17.1)	口縁部約1/4残存。 S字状口縁を有する。	脚部に粗い、ハケ目が施 される。 口縁部外面は橋ナデ。 他は表面摩耗のため不明 瞭。	色調 胎土 石英・雲 母を含む。 焼成 良好	淡茶灰色 径 0.5 mm 程の砂粒 石英・雲 母を含む。 焼成 良好	
8	181 土師器 甕	G 38-22 14 a	口 径 (17.3)	口縁部約1/4残存。 S字状口縁を有する。	脚部には粗いハケ目がみ られる。 他は表面摩耗のため不明 瞭。	色調 胎土 石英・雲 母を含む。 焼成 良好	灰白色 一部明茶 色 径 0.5 mm 程の砂粒 石英・雲 母を含む。 焼成 良好	
9	177 土師器 甕	G 38-22 -9	口 径 (14.8)	口縁部～胴上部1/4残存。 やや崩れたS字状口縁を 有する。 頭部は「く」の字状に屈 折し口頭部は外反する。	外側口縁部は橋ナデ。 胴部には粗いハケ目がみ られる。	色調 胎土 石英・雲 母を含む。 焼成 良好	明赤褐色 径 0.5 mm 程の砂粒 石英・雲 母を含む。 焼成 良好	
10	200 土師器 甕	G 38 -18.6	口 径 (18.6)	口縁部1/4残存。 頭部はゆるく「く」の字 状にくびれ、口頭部は直 線的に開く。	外面にハケ目がみられ、 内面の頭部より下にはヘ ラけずりがみられる。	色調 胎土 石英・雲 母を含む。 焼成 良好	淡赤褐色 内面頭部 より下は 淡灰色。 径 4 mm～ 0.5 mm の砂粒を 含む。 焼成 良好	
11	250 土師器 甕	G 38-22 -20 c	底 径 (7)	底部のみ残存。 平底を呈する。 底部から胴部に向かって 大きく開く。	内面に細かいハケ目が施 されている。	色調 胎土 石英・雲 母を含む。 焼成 良好	淡褐色 程 2 mm以 下的砂粒 を多く含 む。	
12	250 土師器 高坏	G 38-22 -20 c	底 径 (5.9)	脚部のみ残存(下半部 は欠損)。 脚部はゆるく外反して開 いている。	表面摩耗のため不明瞭。 ハケ目がみられる。	色調 胎土 石英・雲 母を含 む。 焼成 良好	明淡褐色 径 1 mm以 下的砂粒 を含む。 焼成 良好	
13	244 土師器 高坏	G 38-22 -19 d		脚部のみ1/4残存。 円形のすかしがみられる。	坏部外面と、脚部内面に、 ハケ目がみられる。 外端、脚部と坏部の接合、	色調 胎土 石英・雲 母を含 む。	明淡褐色 径 1 mm以 下的砂粒	

図 No	遺物番号 器種	計測値(cm) グリッド()は推定値			形態の特徴	手法の特徴	色 胎土・焼成	備考
		底 径	高 さ	幅 穴の径				
					部に粘土のはみだしがみられる。		塞母を含む。 焼成 良好	
14	244 台付壺	G 38-22 - 19 d	底 径 (7.8)	壁の底部、台部のみ約1/3残存。 台部は直線的に開いている。 器壁が薄い。	壺の底部から合部の上半部までハケ目がみられる。		色調 明淡褐色 胎土 径1 mm以下の砂粒を含む。 石英・雲母を多く含む。 焼成 良好	
15	207 土師器 台付壺	G 38-17	底 径 (9)	台部のみ約1/3残存。 台部は直線的に開いている。 器壁が薄い。	台部外面にハケ目がみられ、台部と壺の接合部に粘土のつぎ目の痕がみられる。		色調 明褐色 胎土 径3 mm以下の砂粒を多く含む。 焼成 良好	
16	129 土師器 小形壺	G 37-2 - 5	胴部最大 径 10.5 底 径 5.5	頭部より上欠損。 あげ底である。 胴部のはば中位に最大径を持ち、丸味をおびている。	胴上半部にハケ目がみられる。		色調 白褐色 胎土 径1 mm程度の砂粒を多く含む。 黒色粒子・赤色粒子・雲母を含む。 焼成 良好	
17	259 土師器 壺	G 38-22 - 25	口 径 12.6	口縁部は残存。 体部は内窓して立ちあがり、口縁部との境でゆるくくびれる。 最大径が口径にある。	表面摩耗のため不明。		色調 明赤褐色 胎土 径3 mm～5 mmの砂粒を多く含む。 石英・雲母を含む。 焼成 良好	
18	203 土 壺	G 38-12	長さ 4 幅 4 穴の径 1.5	一部に剥離がみられるがほぼ完形品。			色調 明赤褐色 胎土 径4 mmの砂粒・微砂粒を含む。雲母を含む。 焼成 良好	
19	805 須恵器 壺	F 42-13	口径 9.7 最大径 11.8 器高 4.6	完形品。 器高と蓋受けの割合は、3 : 1位であり、蓋受けの立ちあがりが高く、内には段を有し内傾し、横ナラケが施されている。	内面及び外面の上部は横ナデ、外面の下半部はへたけずりである。口唇部は段を有し内傾し、横ナラケが施される。		色調 暗灰色 胎土 径4～2 mmの砂粒・微砂粒を多く含む。	

図 遺物番号 No.	器 種	グリッド	計定値 ()は推定値	形態の特徴	手法の特徴	色 胎土・焼成	備考
1						長石を多く含む。 焼成 良好	
20	1218 須恵器 壺	E 44	口径 10.2 最大径 12.3 器高 3.5	完形品。 蓋受けは、立ちあがりが ひくく、内向している。 口径に比して器高が低い。	口縁部は内外面とも横ナ ゲ。外側の蓋受け以外の 部分に自然釉がみられる。	色調 灰色。 胎土 径 2 mm 程 度の砂粒 微砂粒を 含む。黒 色粒子・ 石英・長 石を含む。 焼成 良好	
21	1637 須恵器 壺	D 44	口径 13.2 器高 4.1 底径 9.6	高台は低く、高台より底 部が下につきでている。 体部下位に棱を有し、体 部はほぼ直線的に立ちあ がる。	外面底部はヘラけずり、 その他には横ナゲがみら れる。	色調 灰白色 胎土 良好 焼成 良好	
22	1377 土器 壺		口径 12.8 底径 9.4 器高 4.9	口縁部に欠損。 器高に比して底径が大き い。 高台は低く、高台の断面 は四角形を呈する。 体部下位に棱を有し、体 部は直線的に立ちあがる。	底部外面に糸切り痕がみ られる。 それ以外はナゲがみられ る。	色調 黒褐色。 一部淡灰 色 胎土 径 0.5 mm 程の砂粒 を少量含 む。雲母 を含む。 焼成 良好	
23	1779 山茶壺	D 45	口径 10.8 器高 3.85 底径 5.4	口縁及び脚部に弱欠損。 外面の全体に横ナゲ調 かりしている。 内面に黒色の付着物有りナ ゲ調整がみられる。	内面横ナゲ調 高台にはヘラ切りののち 焼成 良好	色調 灰白色 胎土 砂粒を含 む。 焼成 良好	
24	1390 須恵器 蓋		口径 (10.4) 器高 3.5	完形品。 体部に棱を有し、深めの 器形である。	内面および外側体部は横 ナゲ。天井部に自然釉が みられる。	色調 内面赤褐色、 外側 赤灰色 胎土 砂粒を含 む。 焼成 良好	
25	1030 須恵器 蓋	E 43-23	口径 6.9 最大径 10.6 器高 3.4	擬立珠状のつまみが付さ れている。 身受けの立ちあがりは高 く、丁寧に作られている。	内面から身受けの部分に かけて横ナゲがみられる。 外面全体と身受けの一部 に自然釉がみられる。	色調 胎土 釉の部分 は黒褐色 濃緑色・ 乳白色 径 0.5 mm 程の砂粒 黒色粒子 を含む。	

試 遺物番号 No.	器 種	グリッド	計測値 () は推定 値	形態の特徴	手法の特徴	色 胎土・焼成	調 査 備考	
							焼成	良好
26	1077 須恵器 高 壊	F 43	底径 9.6	脚部のみ残存。長脚 2段 透かしある。上段には 長絹いすかしが 3 方向に (ただし、このうちの 1 つは完通していない) ト 段には長方形の透かしが 2 方向、上下にみられる。 脚部は下方に大きく広が り、先端部は上に、肥厚 している。	脚部の下位にはヘラけず りがみられる。 脚部には横ナデが施され る。 窓部内部及び脚部外側に 自然釉がみられる。	色調 灰褐色 胎土 胎土・焼成	灰色・釉 は乳白色 宝母・黒 色粒子を 含む。 緻密である。 焼成 良好	
27	966 須恵器 高 壊	E 43-4	口 径 (11.7) 底径 10.2 器高 9	口縁部欠損。 環部と脚部の高さは 5 : 4 の割合である。 环部中位に窓がみられる。 脚部は下位で、大きく外 窓する。	环部下部はヘラけずり。 それ以外には横ナデがみ られる。 环部内面茶 褐色 胎土 胎土 砂粒を含 む。長石 を含む。 緻密。 焼成 良好。	外表面 灰色。环 部内面茶 褐色 胎土 胎土 砂粒を含 む。長石 を含む。 緻密。 焼成 良好。		
28	1589 須恵器 縁	D 43	脚部最大 径 12.5	脚部最大 径 12.5 脚部はほぼ球形を呈し、 その中位に穿孔がみられ る。 口縁部は外反しており、 口縁部との屈曲点は、外 面に肥厚している。	口唇部、肩部に自然釉、 口縁部に横描き波状文が みられる。 外面脚下部はヘラけずり が施される。 底部はヘラけずりの上に、 タキがみられる。	色調 暗灰色 胎土 砂粒を含 む。 焼成 良好	暗灰色 胎土 砂粒を含 む。 焼成 良好	
29	660 須恵器 小型短頸 臺	E 42-24	最 大 径 (8.15) 器高 6.9	体部欠損。 半底で体部は直線的に立 ちあがる。 口縁部と脚部の境に凹線 がみられる。	内外面ともナデ。 外面脚下部のみヘラけず りが施される。	色調 暗灰色 胎土 砂粒を含 む。 焼成 良好	暗灰色 胎土 砂粒を含 む。 焼成 良好	
30	776 須恵器 高 壊	F 42-7	口 径 12.4 最大径 14.2 器高 4.8	脚部欠損。 脚部は上段に長方形の透 かしが二方向にみられる。 环部は蓋受けを有するも ので、その立ちあがりは 短く内向する。	环部外底面にヘラけず りがみられ、他は横ナデ になっている。	色調 暗灰色 胎土 胎土 焼成 良好	暗灰色 胎土 胎土 焼成 良好	
31	536 灰釉陶器 皿	F 41	口 径 15.5 底径 7.4 器高 2.6	口縁部欠損。 全体的につくりが丁寧。 高台は角高台をなし、こ っかりと付けられている。 内面には、全体的に釉が 厚く、ハケぬりされてい る。	外壁、口縁部、底部、高 台は横ナデ、体部はヘラ けずり。 内面には、全体的に釉が 厚く、ハケぬりされてい る。	色調 淡灰色。 釉は淡綠 色。 胎土 胎土 胎土 胎土 を少量含 む。	淡灰色。 釉は淡綠 色。 胎土 胎土 胎土 胎土 を少量含 む。	

図 遺物番号 No.	器種	グリッド ()	計量値 cm ()は推定	形態の特徴	手法の特徴	色 胎土・焼成	備考
						む。	
						焼成 良好	
32	1146 灰釉陶器 坏	D 44	口径 (14) 器高 4.1 底径 (7.0)	約1/4残存。 作りが丁寧であり、体部 はやや丸味をおびる。 高台は角高台を呈す。	体部、高台は横ナデ、底 部に糸切り痕がみられる。 外面および、内面に釉が 施してある。	色調 淡灰色。 釉は淡緑 色 胎土 長石・雲 母を含む。 堅板。	
33	1371 灰釉陶器 手付小瓶	G 38-22 19 d II	最大径 7.7 底径 6.6	口頸部欠損。 把手欠損。 平底であり、胴部はゆる やかな曲線を描く。 胴上部から扁平な把手が でている。把手はハラ切 りによる板粘土を使って いる。	底部に糸切り痕がみられ る。 外腹全体に釉がかけられ ている。	色調 灰色。釉 は淡緑色 一部淡青 色 胎土 微砂粒・ 黑色粒子 を含む。 焼成 良好	
34	1318 こね鉢	D 45	口径 (15.4) 底径 10.0 器高 15.2	底部は残存、それ以外は 約1/4残存している。 2本単位の横走する沈線 が4ヶ所にみられる。 口縁端部が内外面に肥厚 し、上面がほぼ平らにな っている。	外腹とも底部はナデ。 他は横ナデがみられる。	色調 灰色 胎土 微砂粒・ 雲母・長 石を含む。 焼成 良好	
35	1770 須恵器 台付壺	D 45	口径 9.4 器高 15.5 底径 11.5	口縁部一部欠損。 壺は丸味をおびており、 台部は直線的に開く器形 である。 2本単位の沈線が壺の胴 部に2組、台部に1組み られる。	壺の内面底部は未調整、 他は横ナデ。 台部と壺の接合部分(台 部の内面)に黒色の付着 物がみられる。	色調 灰色(釉 は暗緑色) 胎土 細密。黑 色粒子を 含む。 焼成 良好	
36	1590 須恵器 壺	D 43	口径 15.7 底径 7.8	頸部以上を欠く。 作りの丁寧な高台から頸 部がゆるく内済しながら 立ちあがる。 肩部は強く張っている。	肩下部へラけずり。 それ以外は横ナデがみら れる。	色調 青灰色 胎土 砂粒を含 む。 焼成 良好	
37	1593 須恵器 化瓶	D 43	口径 8.4 底径 6.2 器高 22.8	口縁部1/4を欠く。 肩部は直線的に張りだす。 低い高台が付されている。 頸部は外反する。	外腹の肩下部にへラけず り、底部に糸切り痕がみ られる。他は横ナデであ る。 また一部に自然釉がかか っている。 頸部に斜行するしぶりの 痕がみられる。	色調 淡灰色 胎土 微砂粒・ 黑色粒子 を含む。 焼成 良好	
38	2283 須恵器 壺	D 45-2	口径 (17.5) 最大径 34	口縁部1/4を欠損。 胴部は丸味をおび、その 最大径はやや上部にある。	口頸部内外面とも横ナデ 胴部外訛はタタキ目、肩 上部には自然釉がみられ	色調 淡灰色、 釉は暗緑 色	

列 No	遺物番号 器 種	グリッド	計測値(cm) ()は推定	形態の特徴	手法の特徴	色調 胎土・焼成		備考
						胎土	焼成	
				口頭部は短く外反し、断る。内面脚部上位はタタ 面三角形の口縁部に至る。キを横ナデで、下位は、 タタキをナデで消していく。		胎土 焼成	微砂粒・ 雲母を含 む。 良好	
39	808 土師器 坏	F 42-14	口径 13.3 器高 5 最大径 13.9	完形品 底部は平底に近い。 体部は丸味を持っており 口縁部はやや内湾する。	体部には、ナデの上に、 内外証ともへラみがきが 施してある。口縁部の外 側には横ナデがみられる。	胎土 焼成	外側は光 澤のある 条褐色 内面は光 沢のある 暗黒褐色 程度の 砂粒・ 微砂粒・ 石英・赤 色粒子を 含む。 良好	内底 部には 使用に よる摩 耗がみ られる。
40	2093 土 師 器 坏	E 47-17	口 径 (14.14) 器高 5.6	口脣部一部欠損。 体部と口縁部の境にゆる やかな棱を持ち、口縁部 は外反する。	口縁部内外面は横ナデで 内面にはナデがみられる。 底部に木葉痕がある。	胎土 焼成	内面明褐色 外面 淡褐色。 砂粒を含 む。 良好	
41	1769 土 師 器 坏	D 45	口径 9.5 器高 5.6	口縁部一部欠損。 口縁部と体部の境に棱を なし、口縁部は開く。 器高が口径に比して高い	口縁部に横ナデがみられ る。	胎土 焼成	灰褐色 砂粒を含 む。 やや不良	
42	169 土 師 器 坏	G 38	口径 8.5 最大径 9.5 器高 4.9	体部は丸味をおびる。 口縁部は内湾する。	底部に木葉痕、口縁部に 横ナデ、内面にナデ有り。	胎土 焼成	淡褐色 砂粒を含 む(内面 器壁に約 6 mmの 砂粒を含む) 良好	
43	1291 土 師 器 坏	E 44-22	口径 7.6 最大径 8.0 器高 4.4	底部は平底に近い。 体部はほぼ直立し、その まま口縁に至る。	口縁部内外面とも横ナデ。 がきが施されている。 底部には木葉痕がみられ る。	胎土 焼成	明褐色 砂粒を含 む。 良好	
44	1290 土 師 器 坏	E 44-22	口径 7.9 最大径 8.4 器高 5.5	口径に比して器高が高い。 体部は丸味をおびて立ち あがり、直立する口縁部 に至る。	口縁部内外面横ナデ。	胎土 焼成	明褐色 砂粒を含 む。 良好	
45	788 土 師 器	F 42-11	口径 9.5 器高 7.8	体部は丸味をおびている。 口縁部との境に不明瞭な 棱をなし、口縁部はやや	底部に木葉痕がみられる。 外面器壁に指頭圧痕、外	胎土	褐色 砂粒を含	

図	遺物番号 No.	器種	グリッド	計測値 (i)は推定値	形態の特徴	手法の特徴	色調 胎土・焼成・備考	
							胎土	焼成
		小形器			内向する。	面の口縁部に横ナデがみられる。	む。	良好
46	1998	D 46-20	口径	10.2	口唇部一部欠損。 丸底。	内外面ともに、口縁部を横ナデしている。	色調 胎土	褐色 径7mm以下 の砂粒を含む。
				器高 4.2	体部は直線的に外向しながら立ちあがり、そのまま口縁部に至る。	底部に木葉痕がみられる。	焼成	良好
47	1768	D 45	口径	15.8	底部、口縁部一部欠損。 底部は平底。	口縁部内外面とも横ナデ。 内面はナデ。	色調 胎土	暗褐色 砂粒を含む。
				最大径 18.4	体部はゆるくカーブを描いて立ちあがり、口縁部に至って内湾する。	外面に指頭圧痕がみられる。 底部に木葉痕有り。	焼成	良好
48	1111	F 43-21	口径	14	底部は平底で唇號が頗る。 体部はゆるく内湾して立ちあがり、口縁部に毛づつ立する。	口縁部は横ナデ。 内面にはヘラみがきがみられる。	色調 胎土	褐色 砂粒を含む。
				最大径 14.2			焼成	良好
				器高 8.4				
49	1852	E 45-25	口径	8.7	体部は球形を呈す。 頸部は強くくびれ、口頭部は直線的に外向しながら立ちあがる。	口縁部、内外面と胴上部には、下から上への縱方向のヘラみがき、胴下部には横方向のヘラみがきが多数施されている。	色調 胎土	灰褐色 砂粒を含む。
				器高 15.2			焼成	不良
50	1981	D 46-17	口径	11.2	体部約4分欠損。 平底を呈する。脚部はやや丸味をおびながら立ちあがり、口縁部にギザ。	口縁部内外面とも横ナデ。 口縁部内面に輪積痕がみられ、外面にハケ目と指頭圧痕がある。	色調 胎土	暗黄褐色 砂粒を含む。(辰石を含む)。
				最大径 12.5	脚部はわざかにくびれる。	底部に木葉痕がある。	焼成	良好
				器高 12.2				
51	1850	E 45	口径	11.05	口縁部約4分欠損。 平底を呈する。	口縁部内外面横ナデ、胴部内面はナデ調整。	色調 胎土	黄褐色 径7mm以上 の砂粒を含む。
				最大径 13.35	脚部は丸味をおびる。 頸部は「く」の字状にくびれ、口頭部は開く。	外面脚下部にヘラけずりがみられ、底部には木葉痕がある。	焼成	良好
				器高 12.0				
52	507	F 41	口径	11.9	口唇部一部欠損。 脚部一部欠損。	口縁部外面に横ナデがみられ、内面にヘラみがきが施されている。	色調 胎土	褐色 砂粒を含む。
				器高 7.3	底部、脚部とも直線的に開く器形である。	外面、脚部と脚部の接合部は、部分にヘラみがきがみられる。	焼成	良好
				底径 9.9				
53	1082	F 43	口径	6.17	頸部に1ヶ所穿孔がある。 平底で脚部は丸味をおびれる。	外面口縁部に横ナデ、外側部に指頭圧痕がみられる。	色調 胎土	褐色 砂粒を含む。
				最大径 8.16	頸部はゆるやかにくびれる。	内部底部にヘラみがきがみられ、外面脚下部はヘ	焼成	良好
				器高 7.0				

図 No	遺物番号 器種	グリッド	計測値(cm) ()は推定値	形態の特徴	手法の特徴	色 胎土・焼成	備考
54	1083 土師器 小型壺	F 43	口径 5.8 最大径 8.5 器高 6.5	口縁部少欠損。 頸部に 2ヶ所穿孔がみられる。 器部は丸味をおび、口頸部は外反する。	ラテザリがされている。 底部には粘土が貼り付け てある。	色調 明赤褐色 一部灰褐色 胎土 粒 0.5 mm 程の砂粒を含む。 雲母を含む。 焼成 良好	
55	1811 土師器 小型壺	G 38-22 -20 c	器高 7.6 最大径 7.1 底径 2.1	口頸部少欠損。 口頸部はゆるやかに外傾し、胸部は丸味をもつ。 底部はいびつなが底平となる。 頸部に直徑 4 mm の孔が 2 つある。 分厚い底を持つ。	胸部にラテザリ、内側 頸部に指頭圧痕がみられる。	色調 褐色 砂粒を含む。 胎土 焼成 良好	
56	1310 土師器 小型壺	E 44-23	口径 7.4 最大径 7.6 器高 7.3	口縁～頸部・部欠損。 胸部は丸味をおびる。 頸部はゆるやかにくびれ、 頸部は外反している。	底部のみラテザリが施 してある。 頸部外面横ナデ。 他は摩耗のため詳細不明。	色調 灰褐色 粒 1 mm 程 の砂粒を 多く含む。 胎土 長石、雲 母を含む。 焼成 良好	
57	1658 土師器 小型壺	E 44	口径 5.8 器高 4.6	体部約少欠損。 平底で体部は直立気味に 立ちあがり頸部がややく びれる。	内面及び外面の口縁部は 横ナデ。 底部には木葉痕がみられ る。	色調 淡褐色 粒 1 mm の 砂粒少量、 黒色粒子 雲母を含 む。 胎土 焼成 良好	
58	1097 土師器 壺	F 43	制部最大 径 27.2 底径 9.5	口頸部欠損。 胸部は球形を呈す。 底部はあげ底気味の平底 である。	内面と外面の胸下部まで ハケ目がみられる。 底部には木葉痕がある。 胸下部より底部にかけて 外面にススの付着がある。	色調 明茶色 粒 2 mm 以 下の微砂 粒を含む。 胎土 雲母を少 量含む。 焼成 良好	
59	286 土師器 壺	H 38	口径 18.5	胸下部少欠損。 口頸部内面を平らにして いる。口頸部は直線的に 開く。	口頸部は内外面とも横ナ デ、それ以下は内外面と もハケ目がみられる。	色調 暗赤褐色。 内面頸部 より下は 暗茶褐色 胎土 粒 1 mm 以 下の砂粒	

図 No.	遺物番号	器種	グリッド	計高値cm ()は推定値	形態の特徴	手法の特徴	色 胎土・焼成		備考
							調 胎土	焼成	
									を含む。 長石・雲母を含む。 焼成 良好
60	1819	D 45-23	口径 16.9 器高 11.6 最大径 18.4	口縁部欠損。底部を残し 鰐部%欠損。 口縁部はやや直線的に立 ち上がり、口端部は尖り、かけて、へラげずり調整 ぎみにつまんである。 口頭部の容積が他に比べてやや薄い。	口頭部外側に横ナデ調整 が見られる。 外面胴部中位から底部に かけて横ナデ調整有 り。横ナデ調整の上から 底部にかけてへラみがき が施されている。	内面、口縁部から胴部下 位にかけて横ナデ調整有 り。横ナデ調整の上から 底部にかけてへラみがき が施されている。	色調 胎土 焼成	暗明色 砂粒を含 む。 良好	
61	2091	E 47-16	口径 (25.2)	口縁部約%欠損。 体部は直線的に開いて口 縁部に至る。 把手は片方のみ残存して いる。	内外面の口縁部横ナデ。 内面の体部にはハケ日が みられる。	内外面の口縁部横ナデ。 内面の体部にはハケ日が みられる。	色調 胎土 焼成	明茶色 砂5mmの 砂粒・径 1mm以下 の微砂粒 を含む。 石英・云 母を含む。 良好	
62	118	H 101	口径 13.4 最大径 13.95 器高 6.1	口縁部一部欠損。 口径に比して器高が高い。 口縁部は内湾している。	底部に木葉痕。 内面にへラみがきがみら れ。口縁部外側は横ナデ されている。	内面赤褐色 胎土 砂粒を含 む。	色調 胎土 焼成	内面赤褐色 砂粒を含 む。 良好	
63	58	G 102	口径 14.4 器高 5	口縁部%欠損。 ほぼ平底であり、体部は やや丸味をもって、立ち あがる。口縁部は強く内 湾する。	内面へラみがき。 外而体部には指頭圧痕が 口縁部には横ナデがみら れる。	内面へラみがき。 外而体部には指頭圧痕が 口縁部には横ナデがみら れる。	色調 胎土 焼成	褐灰色 砂粒を含 む。 良好	
64	422	G 102	口径 14.8 最大径 15.2 器高 4.1	口縁部%欠損。 器高は低く扁平である。 口縁部が内湾している。	口縁部横ナデ。 内面にへラみがきがみら れる。	口縁部横ナデ。 内面にへラみがきがみら れる。	色調 胎土 焼成	褐色 砂粒を含 む。 良好	
65	88	H 101	口径 13.8 器高 3.6	体部約%欠損。 器高が低く扁平である。 体部と口縁部の境に不明 瞭な接合を有する。	口縁部内外横ナデ。 内面にナデ、外而にへラ げずりがみられる。	口縁部内外横ナデ。 内面にナデ、外而にへラ げずりがみられる。	色調 胎土 焼成	褐色 砂粒を含 む。 良好	
66	36	H 102	口径 10.8 器高 4	口縁部一部欠損。 小型で口縁部が開く器形 である。	底部に木葉痕がみられる。 口縁部内外とも横ナデ で、内面はナデ調整して ある。	底部に木葉痕がみられる。 口縁部内外とも横ナデ で、内面はナデ調整して ある。	色調 胎土	内面灰黃 色。外而 黃褐色 径3mm以	

図 No	遺物番号 器 種	グリッピ () は推 定 値	計量値(cm)		形態の特徴	手法の特徴	色 胎土・焼成	調 色 胎土・焼成	備考
			口径	高さ					
67	87 須恵器 蓋	H 101	口径 14.0 器高 5.1	口縁部一部欠損。 体部には棱を有し、口縁部はほぼ垂直に立ちあがる。	口唇部は段を有し、内傾している。口縁部内外面とも横ナデ調整されており外周の大升部にはヘラけずりがみられる。 また、天井部内面には、タタキ目が残る。		色調 胎土 焼成	下の砂粒 を含む。 良好	
68	145 須恵器 坏	H 101	口径 11.9 最大径 14.0 器高 3.8	完形品。器高が低い。蓋受けを有しているが、その立ちあがりは低く、内向している。	内面および外面部には横ナデがみられ、外面底部はヘラけずりがされたいる。		色調 胎土 焼成	暗灰色 砂粒を含む。 良好	
69	327 須恵器 坏	G 102	最大径 15.3 器高 4.2	完形品。蓋受けを有するもので、蓋受けの立ちあがりは低く内向している。	内面および口縁部外面は横ナデ、底部にヘラけずりがみられる。		色調 胎土 焼成	灰白色 砂粒を含む。 良好	
70	227 須恵器 壺	I 100	口径 9.6 最大径 14.9 器高 10.1	完形品。丸底であり、胴部は丸味を持っている。 口頭部は短く、直立する。	脚下部より底部にかけてヘラけずりがみられる。他は横ナデが施されている。		色調 胎土 焼成	暗灰色 砂粒を含む。 良好	
71	1451 須恵器 平 瓶	G 102	最大径 15.4 口径 (5.4) 器高 (17)	ほぼ完形であるが頭部のみ一部欠損。 頭部は斜く、胴部は全体的に丸みをおびている。	底部のみ一部ヘラけずり他は横ナデが施されている。		色調 胎土 焼成	淡赤褐色。 底部のみ 明褐色。 緻密。石 英・長石 を含む。 良好	

木製品觀察表

名 称	遺物番号	出 上 地 点	全 長	分類	特 微	樹種	備 考
			幅 (欠損値)				
人 形	5001	N、旧河内、旧大 谷川	(239.5) [247.5] 25.0 6.0 頭長(25.5) [29.0] 頸長 15.0 肩長 14.7 脚長(50.0) [55.0]		頭頂部右欠損、左脚先数 ミリ欠損。 右侧面下端が破損。ほぼ 完形。 左頭、頭角68° 手は表現されていない。	S	
人 形	5002	N-D43-5、旧大 谷川	283.0 28.0 2.5 頭長 41.5 頸長 18.5 肩長 116.0 脚長 106.0		頭部一部欠損。 左頭、頭角55° 手は表現されていない。 脚は三角切り欠きをして いる。 脚先は外側が削られてい る。	S	奈 平
人 形	5003	N-D44、旧大谷川	236.5 27.5 3.5 頭長 30.0 頸長 11.0 肩長 95.5 腰長 9.5 脚長 89.5		両脚が腰部から割れてい る。 右脚上部～腰部欠損。 頭部水平頭、頭角87° 手は切り欠き、腰の切り 込みになっている。 脚は斜めに切り込んで折 ってある。	S	奈 平
人 形	5004	不 明	(392.0) [不明] 25.5 5.5 頭長(29.5) [32] 頸長 8.0 肩長 210.5 腰長 48.0 脚長(96.0) [不明]		脚部欠損、腰部左側一部 欠損、左頭み欠損、頭部 先端数ミリ欠損。 左頭、頭角66° 腰は切り欠いている。	S	
人 形	5005	N-D45-25、旧大 谷川	(359.0) (362.5) (35.0) [37] 4.5 頭長 30.0 頸長 49.0 肩長 112.0 腰長 38.0 脚長 127.0 (130.5)		右脚欠損、手、胸の側部 大部分が欠損。 左頭と円頭の中間。 手は切り込みで表現され ている(左53mm、右79mm)。 頭は三角切り欠きである。	S	奈 平
人 形	5006	N-F39-3、旧大 谷川	(71.0) (72.0) 21.5 3.0 頭長 14.5 頸長 5.0 肩長 27.5		左脚欠損、右脚先欠損。 上方が薄く加工されてい る。 左頭、頭角145° 腰は切り欠いている。	S	奈 平

名 称	遺物番号	出 土 地 点	全 長 幅 (欠損部) 厚さ、高さ [復元値]	分類	特 徴	樹種 木取	備考
			腰長 10.0 脚長(13.0) [14.0]		腰は三角切り欠きになっ ており、上部が薄く切り 残っている。	B	
人 形	5007	N-D46-19、旧大 谷川	(380.0) [388.0] 28.0 10.5 頭長 50.0 頸長 20.0 胴長 53.0 腰長 27.0 膝長(228.0) [236.0]		右脚先端部分欠損、左脚 先端部欠損。 ・首頭、頸角先端72° ・全体55° 腰は切り欠いている。腰 は三角切り欠きをしてあ る。	S	古
人 形	5008	N-D46-18、旧大 谷川	(245.0) [不明] 26.0 6.0 頭長(60.0) [62.5] 頸長 17.0 胴長 76.0 腰長 20.5 膝長(68.0) [不明]		腰はつけ根を残して欠損 胸部は中央で2つに割れ 周囲がかなり破損してい る。 ・首頭、頸角70° 腰は切り欠いている。 脚は平行に切り込み、凹 形に切りとったと思われ る。	S	古
人 形	5009	N-D46-22、旧大 谷川	(179.0) [不明] 31.0 6.5 頭長 45.0 頸長 16.5 胴長(117.0) [不明]		下部欠損、頭右側部欠損 ・首頭、頸角54°	S	古
人 形	5010	N-D46-13、旧大 谷川	276.0 22.0 4.5 頭長 35.0 頸長 24.0 胴長 67.0 腰長 18.0 脚長131.0		完形品 ・首頭、頸角45° 腰は切り欠いて表現して いる。 脚は平行に切り込み、折 りとっている。 脚先は内側をけずってい る。	S	古
人 形	5011	N-D46-20、旧大 谷川	(188.0) [不明] 32.5 5.0 頭長 59.0 頸長 10.0 胴長(118.0) [不明]		腰部～脚部欠損 ・首頭、頸角65°腰は怒り肩 である。手は、浅い切り 欠けで表現している。 手の下部を大きく切り欠 いて腰を表現している。	S	古
人 形	5012	N-D46-13、旧大 谷川	(380.0) [不明] 33.0 3.5 頭長(27.0) [不明]		頭部欠損、腰部中央で2 つに割れ、周囲が破損し ている。両脚先欠損。	S	古

名 称 遺物番号	出 土 地 点	全 長 (欠損値) 厚さ、高さ (復元値)	分類	特 徴	樹種	備考
					木取	
		胸長102.0 腰長 50.5 脚長(199.5) [不明]		腰は浅く切り欠いて表現 脚は三角切り欠き、脚先 は内側を削っている。		
人 形 5013	N-D46-22、旧大 谷川	(248.0) [257.0] 47.0 5.5 頭長 36.0 頸長 23.5 胸長110.5 脚長(78.0) [87.0]		脚先端が一部欠損、ほぼ 完形品。 主頭、頭角88° 手は切り込み (両方とも 13mm)。 腰の切り欠けは無。 脚は三角形に尖らせた状 式。左側が少し厚い。	S 古 B	
人 形 5014	N-D46-22、旧大 谷川	275.0 47.5 6.0 頭長 40.0 頸長 21.0 胸長152.0 脚長 63.0		左側頭部～頸部一部欠損 左手残欠損、脚部左下方 一部欠損。 主頭、頭角82° 手は切り込みで表現 (右 20mm、左13mm)。 脚は三角形に尖らせた状 式。左側が少し厚い。	S 古 B	
人 形 5015	N-D46、沼大谷川	(255.0) [不明] 43.0 11.0 頭長(49.0) [51.0] 頸長 28.5 腰長140.0 腰長(37.5) [不明] 脚長 不明		頭部左1/4が欠損、脚部左 下から脚部欠損。 主頭、頭角61° 腰部より下を欠くが5014 と同形態と考られる。	S 古 B	
人 形 601	MG-H 101、旧大 谷川	(199.0) [不明] 26.5 8.0 頭長 71.0 頸長 10.0 胸長(90.0) 腰長(27.0) [不明]		右肩の切り欠け～脚部、 右脚欠損、左脚大部分が 欠損。 主頭の先をさらに削って 円頭に近くさせている。 頭角先端150°全体62° 目・鼻・口が彫って表現 されている。 手は表現されていない。 脚は、三角切り欠きか?	S 古 A	
人 形 602	MG-H 102、旧大 谷川	(268.0) [281.5] 22.0 6.0 頭長 46.0 頸長 9.0 胸長 95.0 脚長(118.0) [131.0]		脚先欠損、手が大部分欠 損。 主頭、頭角58° 手は左右とも切り込みに よって表現されている (右42mm、左44mm)。 脚は三角切り欠き。	S 古 B	
人 形 603	MG-H 102、旧大	(258.0) [260.0]		右側頭部～胸部上方1/4欠	S 古	

名 称	遺物番号	出 土 地 点	全 長 幅さ、高さ (復元値)	分類	特 徴	樹種 木取	備考
		谷川	29.0 8.0 頭長 44.0 頸長 8.0 脣長 162.0 脚長(44.0) (46.0)		損、両手欠損。 ・左頭、頭角64° ・手は切り込みによって表 現されている(左43mm、 右44mm)。肩は怒り肩と なる。頭は三角形に尖ら せた串状		
人 形	604	MG-G 102、旧大 谷川	(228.0) (231.0) 25.5 5.0 頭長 29.0 頸長 20.5 脣長 76.5 腰長 14.0 脚長(88.0) (91.0)		頭部左側欠損、右脚外欠 損、左脚先欠損、左脚下 方一部欠損。頭角60° 腰は切り欠いて表現して いる。 脚は平行に切り込み、三 角切り欠きとなっている。 脚先は薄く、鋭く加工さ れている。	S	古
人 形	605	MG-G 102、旧大 谷川	(90.0) (不明) 39.5 3.0 頭長 37.0 頸長 15.5 脣長(37.0) (不明)		下部欠損 生頭、頭角78° 下部は串状であったと思 われる。 5013・5014と同形のもの か。	S	古
人 形	606	MG-G 102、旧大 谷川	(160.0) (不明) 30.0 5.5		上部右側欠損、下部欠損 上部は円頭または半円状 であったと思われる。	S	古
人 形	607	MG-G 102、旧大 谷川	(52.0) (不明) 19.5 4.0 頭長 21.0 頸長 5.0 脣長(26.0) (不明)		下部欠損、頭、頸、脣の 上部残存。 頭頂部水平、頭角50°	S	古
查 事	5094	N-D 46-23、旧大 谷川	(533.0) (567.0) 13.5 12.0		上端1/2欠損、下端1/4欠損 上角24°、下角13° 上方が厚く、下方が薄く なっている。 切り込みは無。	S	古
人 形	5095	不 明	(587.0) (592.0) 43.0 10.0 頭長 37.0 頸長 58.0 脣長 205.0 腰長 76.5		左腰部一部欠損、右脚側 部1/2欠損、脚先端数ミリ 欠損。 生頭、頭角88° 腰は切り欠きで表現。 脚は平行に切り込みさら に三角形に切り欠いてい	S	

名 称 遺物番号	出 土 地 点	全 長 幅 (欠損部) 厚さ、高さ (復元値)	分 類	特 微	樹種 木取	備 考
		海長(212.0) (217.5)		る。 脚先は左が内側、右が外側を斜めに切り落としている。 裏面は丁寧に面調整されている。	B	
馬 形 (馬)	5100 N-E43-17、旧大 谷川	108.0 26.0 5.5		下辺中央に下から切り込 みを入れ、細棒がつけら れるようになっている。 左下角50°、右下角50° 上辺は大きく切り欠き、 下辺は2か所切り欠いて いる。 台形型 左下角50°、右下角50°	S 古 奈 平	
馬 形 (車)	5100	150.0 6.5 3.5		中央で割れ、折れ曲がっ ている。 下端欠損。 上端は表裏両方から削り 薄くしてある。	S B	
馬 形	5101 N-D46、旧大谷川 SR-7	(144.5) (146.0) 18.5 2.5		側面が全体的に破損して いる。 上辺は大きく切り欠いて いたと思われる。下辺は 2か所切り欠いている。 左は斜めに切り落とし、 右は圭頭状に切っている。 左下角42°、右角101°	S 古	
馬 形	5102 N-D46-22、旧大 谷川	119.5 21.0 5.0		右上辺部欠損、下辺中央 部破損。 下辺は左に1、右2か所 計3か所の切り欠きがあ る。 右は垂直に切り、棱角を 面取りしている。 左上角83°	S 古	
馬 形	5103 N-D46-23、旧大 谷川	(119.5) (133.0) 32.0 7.0		右先端から側面方にかけ て破損。 上辺を1か所切り欠き、 下辺も1か所切り欠いて いる。逆合形型。 左上角38°、右上角27° (推定)	S 古 B	
馬 形	5104 N-D46、旧大谷川	(161.0) (不明) 39.0 6.0		右脚部欠損、左先端欠損 上辺は大きく切り欠いて いる。	S 古	

名 称	遺物番号	出 土 地 点	全 長 幅 (欠損値) 厚さ、高さ [復元値]	分類	特 徴	樹種	備考
					下辺は2か所切り欠いてB いる。 下辺中央部に細棒を差した跡がある。 台形型 左下角44°、右下角36°		
馬 形	5105	N-D45、旧大谷川	227.0 29.0 4.0		下辺に2か所の切り欠き 上辺は欠損のため切り欠いているか不明。 左右とも斜めに切り落としている。 左角47°、右角50° 台形型	S B	古 奈 平
馬 形 (馬)	5106	N-D46-22、旧大谷川	267.0 27.0 6.0		上辺中央一部欠損、下辺頭部4カ所欠損、ほぼ完形。 左辺は主頭状、右辺は斜めに切り落とし、先端を面取りしている。 下辺中央部に細棒を差した跡がある。 上辺1か所、下辺1か所の切り欠きがある。 左角83°、右角45°	S B	古
馬 形 (牛)	5106		208.0 11.0 9.0		両端を斜に落し平行四辺形に加工してある。	S A	
馬 形	5107	N-D46、旧大谷川	(171.0) [174.0] 53.0 12.0		右先端数ミリ欠損、ほぼ完形。 上辺を1か所切り欠いている。 下辺の切り欠きは無。 ゆるやかなカーブを描く 台形型。 左下角62°、右下角58°	S A	古
馬 形	5108	N-D46、旧大谷川	(115.5) [不明] 19.0 4.0		下部欠損。 上辺は大きく切り欠いている。 欠損により下辺の切り欠きの有無は不明。 等脚台形型であったと思われる。 左角48°(推定) 右角43°(推定)	S B	古
馬 形	5109	N-D46-13、旧大谷川	134.0 30.0 9.0		上辺一部欠損、ほぼ完形 下辺は1か所大きく切り欠き、上辺は2か所を小さく切り欠き、その間を削り、2mmほど低くしている。	S	古

名 称	遺物番号	出 土 地 点	全 長 幅 (欠損値) 厚さ、高さ [復元値]	分類	特 徴	樹種 木取	備考
					左右は丸味を帯びた斜め。B 切り落としをしている。 台形型 左角70°、右角60°		
馬 形	5110	N-D46-23、旧大 谷川	(128.5) [156.0] 31.0 8.0		右先端欠損。 下辺を大きく切り欠いて いる。上辺の切り欠きは 無。 平行四辺形型であったと 思われる。 左上角39°、右下角32° (推定)	S	古 A
馬 形	5111	N-D46、旧大谷川	(135.0) [不明] 35.0 5.0		下部欠損、右側欠損。 上辺は大きく切り欠いて いる。 下辺は欠損のため切り欠 いていたかどうかは不明。 等脚台形型であったと思 われる。 下辺中央から表面中央部 にかけて炭化しており。 細縫をつけるための切り 込みがあったかどうかは 不明。 左下角72°	S	古 B
馬 形	630	MG-G 102、旧大 谷川	(117.5) [123.0] 31.0 6.0		左右両端数ミリ欠損。 左下角50°、右下角65°。 上辺中央部に上から切り 込みが入って全体的に曲 線的である。 上辺1か所、下辺2か所 切り欠き。 等脚台形型	S	古 A
馬 形	631	MG--G 102、旧大 谷川	(134.0) [152.0] 39.0 6.5		右先端欠損、上辺中央 より左端にかけて3%欠損。 左辺はわずかに残存。 上辺1か所を切り欠いて いる。下辺の切り欠きは 無、下辺中央部に細縫を さし込む穴があいている。 左右は斜め切り落としの 平行四辺形型。 右角45°、左角48°	S	古 B
馬 形	632	MG-G 102、旧大 谷川	(119.0) [不明] 45.0 5.0		3つに割れている、左下 部欠損、右上部欠損。 左下角54°(推定)、右上角 64°	S	古

名 称	遺物番号	出 土 地 点	全 長 幅 (欠損値)		分類	特 徴	種種 本取	備考
			厚さ	高さ (復元値)				
						左上方に斜め上方から切り込みがあり、切り口に木片がさしかまれている。 切り欠きが直線的。 上辺1か所、下辺2か所 切り欠き。 平行四辺形型	B	
不明木 製 品	5016	N-F39、旧大谷川	(67.0) (69.0) 10.0 7.0			下端数ミリ欠損、ほぼ完形。 上端に円形穴 (3mm × 3mm)、この穴は裏まで抜けていない。 表面に薄くスジがついている。 下角23°。 上方が少し厚い。	S	
								古 奈 平
斎 事	5017	N-E43、旧大谷川	(110.0) (112.0) 8.0 5.5			先端数ミリ欠損、右側上方1/4破損、ほぼ完形品。 上角先端48°、全体25°。 下角31°。 右側が薄くなっている。	S	
								古 奈 平
斎 事	5018	N-E43、旧大谷川	107.0 15.0 2.0			完形品 下角先端36°、全体25°	S	
								古 奈 平
斎 事	5019	N-E41-2、旧大 谷川	(219.0) [不明] 21.5 7.5			上部欠損 上角は欠損のため不明、 下角28°。 右側上部が少し厚い。	S	
								古 奈 平
斎 事	5020	N-E43-7、旧大 谷川	(317.0) (323.0) 23.0 7.0			両端を數ミリ欠損、ほぼ完形。 上角32°、下角先端32°、 全体26°。 下方が厚く、上方が薄い。	S	
								古 奈 平
斎 事	5021	N-F42、旧大谷川	(341.0) [不明] 37.5 11.5			下方?が欠損。 木裏の上端に斜めの面調整が見られる。 上角62°、下角は欠損により不明。 上方の幅が少し広い。 上方が薄く側面と裏面の間にも面調整が施してある。	S	
								古 奈 平

名 称	遺物番号	出 土 地 点	全 長		分類	特 徴	樹種	備 考
			幅 (欠損値)	厚さ、高さ (復元値)				
斎 串	5022	N-E43、旧大谷川	(101.0) (不明) (17.5) (不明) 7.0			切り込みは無。		
斎 串	5023	N-E43、旧大谷川	(101.0) (102.5) 7.5 8.0			右側欠損 上角48°、下角24° 上方がやや厚く、幅も広い。 切り込みは無。	S B	古 奈 平
斎 串	5024	N-E43、旧大谷川	(244.0) (不明) 20.0 5.0			先端が数ミリ欠損、ほぼ完形。中位に抉り込みがみられる。	S B	古 奈 平
斎 串	5025	N-E43-4、旧大谷川	(199.0) (204.0) 20.0 6.0			下部欠損 上角18°、下角は欠損により不明。 上方が少し厚い。 切り込みはbか?	S B	古 奈 平
斎 串	5026	N-E43-17、旧大谷川	(297.0) (310.0) 14.0 7.5			下部先端が数ミリ欠損、ほぼ完形。 上角33°、下角14° 下端は鋸く尖っている。 下部の幅が少し広い。 切り込みはbか?	S B	古 奈 平
斎 串	5027	N-E43-11、旧大谷川	257.0 26.0 4.0			下端左側欠損、右側下部二カ所欠損。 中央よりもやや上方で二つに折れる。 上角50°、下角25° 上方が厚い。 切り込みは無。	S B	古 奈 平
斎 串	5028	N-E43-23、旧大谷川	(303.0) 14.5 8.5			上部右側左側欠損。 上角50°、下角80° 上方の幅がやや広い。 切り込みは無。	S B	古 奈 平
斎 串	5029	N-D45、旧大谷川	(328.0) (不明) 17.0 9.0			上端が数ミリ欠損、ほぼ完形。 上角15°、下角41° 上方が少し幅が広い。 下方が少し厚い。 切り込みはbか?	S B	古 奈 平
						上端欠損、下端部は欠損 下角19°、上角9°(推定) 下方が幅広く、薄い。 下方表面に加工痕がある。	S B	古 奈 平

名 称	遺物番号	出 土 地 点	全 長 幅 (欠損値) 厚さ、高さ [復元値]	分 類	特 徴	樹種 木取	備 考
斎 串	5030	N-D45、旧大谷川	(171.0) (181.0) 17.0 5.0		右側が下方の一部を残して欠損。 上角25°、下角26° 上端は少し薄くなっている。 切り込みは無。	S	古 奈 平
斎 串	5031	N ₂ 、旧大谷川	(136.0) [不明] 10.5 3.0		上部欠損、残存部中央で二折。 下角45°	S A	
斎 串	5032	N-D45、旧大谷川	(125.5) [不明] 18.5 5.0		上部欠損、下端先端欠損。 下端は三面より削り尖らせている。 左側が厚く、右が薄くなっている。 三角材状となる。 下角17°	S B	古 奈 平
斎 串	5033	N-D45、旧大谷川	(93.0) [不明] 6.0 6.0		上部欠損 下角先端32°、全体18° 下端は4方向より削り、さらに先端を側面から削って尖らせている。	S B	古 奈 平
斎 串	5034	N ₂ 、旧大谷川	175.0 20.5 6.0		左側の上部1/4、下部1/4が欠損。 中央部のみわずかに側面が残存。 上角62°、下角54° 下方がやや厚い。 中央が高く三角材のようになっている。	S B	
斎 串	5035	N-D45、旧大谷川	(472.0) (477.0) 39.0 7.0		両先端が数ミリ欠損、ほぼ完形。 下方に縦長の隋円形穴 (18mm × 4.5 mm) 上角27°、下角28° 上方の幅が少し広い。	S	古
斎 串	5036	N-D46、旧大谷川	(330.0) (334.0) 21.0		両端数ミリ欠損 上角67°、下角先端53°、	S	古

名 称	遺物番号	出 壱 地 点	全 長 幅 (欠損値) 厚さ、高さ〔復元値〕	分類	特 微	型種 木取	備考
			9.0		全体45° 全体的に削りを入れて丁寧に仕上げてある。 切り込みは無。	B	
斎 事	5037	N-D46、旧大谷川	(257.0) (259.0) 19.0 6.5		左側一部欠損、上端数ミリ欠損、ほぼ完形。 下角40°、上角44° 下方が幅広く、厚い。 右側が厚い。 切り込みは無。	S	古
斎 事	5038	N-D46、旧大谷川	(158.0) (不明) 21.0 3.5		上部欠損、下端部のみ欠損 上方はやや薄くなっている。 下角50°	S	古
斎 事	5039	N-D46、旧大谷川	207.0 23.0 6.0		右側部欠損、上部に一部残存。 下端は裏側から削り、薄くなっている。 下角70° 切り込みは無。 左側が少し厚い。	S	古
斎 事	5040	N-D46、旧大谷川	(148.0) (不明) 14.5 6.5		上部欠損、下端数ミリ欠損。 下角28° 下方がやや厚い。	S	古
斎 事	5041	N-D46、旧大谷川	183.0 13.5 4.0		下部欠損、右側部のみ欠損 上角60° 上方が少し厚く左側も少し厚くなっている。	S	古
斎 事	5042	N-D46、旧大谷川	(152.0) (不明) 22.0 8.5		上部欠損 下角58°、上角は欠損により不明。 下方が少しあ厚い。 中央部が厚くなっている。	S	古
斎 事	5043	N-D46、旧大谷川	(185.0) (199.0) 26.0 8.0		両端数ミリ欠損、右側のみ欠損 下角29°、上角33° 左側(長辺)が厚い。 切り込みは無。	S	古
斎 事	5044	N-D46、旧大谷川	(151.0) (165.0)		両端が一部欠損	S	古

名 称	遺物番号	出 土 地 点	全 長		分類	特 微	樹種	備考
			幅	(欠損値)				
				15.5				
				2.5				
						上角40°、下角34° 上方の幅が少し広い。	A	
斎 串	5045	N-D46、旧大谷川	(100.0) [不明]					
			13.0				S	古
			3.0				A	
斎 串	5046	N-D46、旧大谷川	(82.0) [不明]					
			18.0				S	古
			4.5				B	
						下部欠損、左半分も欠損 大部分欠損のため、全形 不明。		
斎 串	5047	N-D46、旧大谷川	(200.0) (204.0)					
			14.0				S	古
			5.5				B	
						先端が一部欠損 下部に円形の穴(2mm× 2mm)。 下角27°、上角先端60°、 全体37° 上端は急入りに仕上げて いる。 切り込みは無。		
斎 串	5048	N-D46、旧大谷川	(183.0) (197.0)					
			15.0				S	古
			6.0				右側面欠損 上角13°、下角17°	
							A	
						上方が中央部より切り細 められている。 切り込みは無。		
斎 串	5049	N-D46、旧大谷川	252.0					
			29.0				S	古
			7.5				B	
						上部欠損、下方左端欠損 右側が厚くなっている。 切り込みは見られない。		
斎 串	5050	N-D46、旧大谷川	(209.0) [不明]					
			22.0				S	古
			3.0				B	
						下部欠損 上角25° 上部の幅が少し広い。		
斎 串	5051	N-D46、旧大谷川	(187.0) (189.0)					
			14.0				S	古
			5.0				A	
						上端、下端一部欠損 ほぼ完形 上角34°、下角39° 上方が少し厚く、幅が狭 い。		
斎 串	5052	N-D46、旧大谷川	(122.0) [不明]					
			20.0				S	古
						上端数ミリと下方を欠損。 上角28°、下角は欠損に		

名 称	遺物番号	出 土 地 点	全 長 幅 (欠損値) 厚さ、高さ (復元値)	分 類	特 著	様 様 木 取	備 考
			6.0		よりへ明。 上部の幅が少し狭い。	B	
斎 串 か	5053	N-D46、旧大谷川	(197.0) [不明] 20.5 8.0		下部欠損、上端も一部欠損。 半円材、上方ほど平らに なっている。 下方は右側を削って尖ら せている。 下端角度7°。 切り込みは無。	S	古
					C ₁		
斎 串	5054	N-D46 旧大谷川	(153.0) [不明] 21.0 6.0		両端欠損 片方のみ、先端の加工部 分が一部残存。	S	古
					A		
斎 串	5055	N--D46、旧大谷川	(79.0) [不明] 15.0 4.5		上部欠損 下部は両側から切り込み を入れて折ったと思われ る。 下角51°、71° 下部がやや厚く、幅も広 い。	S	古
					B		
斎 串	5056	N-D46、旧大谷川	(259.5) [不明] 8.0 9.0		上端欠損、下方が折れ曲 がっている。下端は四カ 所削り、尖らせている。 下方が上方にくらべ幅広 く、厚くなっている。 下角26°	S	古
					C ₁		
斎 串	5057	N-D46、旧大谷川	(238.0) [不明] 12.0 6.0		下部欠損 下方は表面がふくらみ、 上方は裏面がふくらんで いる。 幅は上方が少し広い。 切り込みは無。 表面下位に切り欠き？	S	古
					C ₂		
斎 串	5058	N-D46、旧大谷川	(214.0) [不明] 11.5 4.5		上端部欠損 下端は薄く平らにされて いる。 上部は少し幅が狭くなっ ている。	S	古
					C ₃		
斎 串	5059	N-D46、旧大谷川	(277.0) (295.0) 11.0 2.0		上端ミリ欠損、下端% 欠損。 中央部が湾曲している。 上角40°、下角21°	S	古
					A		

名 称	遺物番号	出 土 地 点	全 長	幅 (欠損箇)	分類	特 徴	樹種		備考
							木取		
斎 串	5060	N-D46、旧大谷川	216.0			完形品 下角30° 左側が少し厚い。 切り込みは無。	S	古	
				8.0			B		
				3.0					
斎 串	5061	N-D46、旧大谷川	108.0			上部欠損、下端先端欠損 下角20° 下方はやや幅が広い。	S	古	
				8.5					
				4.5			A		
斎 串	5062	N-D46、旧大谷川	(128.0) [不明]			上部欠損 下角先端35°、全体27°	S	古	
				12.0			B		
				3.5					
斎 串	5063	N-D46-20、旧大谷川	(251.0) [不明]			上部、下部欠損、全体的に欠損が多く、形が不明。 切り掛け、切り欠きは無。	S	古	
				10.5					
				9.0			A		
斎 串	5064	N-D46-22、旧大谷川	(144.0) [不明]			上部欠損 七角は欠損により不明、下角25°	S	古	
				18.0					
				3.0			B		
舟	5065	N-D46-18、旧大谷川	(117.0) [不明]			上部欠損 下角19°、上角40° 切り込みは無。	S	古	
				17.0			B		
				9.0					
斎 串	5066	N-D46-22、旧大谷川	(142.0) [不明]			上部欠損 下角26° 上方が少しうくなっている。	S	古	
				19.0					
				5.0			B		
斎 串	5067	N-D46-22、旧大谷川	(156.0) [不明]			上部欠損、下端数ミリ欠損 下角32°、上角は不明 左側が厚い。	S	古	
				24.0					
				5.5			B		
斎 串	5068	N-D46-22、旧大谷川	(157.0) [163.0] (18.0) [19.0]			左側のみ欠損、下端欠損 下角11°、上角17°	S	古	
				3.0					
							B		
斎 串	5069	N-D46-22、旧大谷川	(61.0) [不明] (11.5) [不明]			左部欠損、全形が不明。 上角28°、下角26° 左側が少し厚い。	S	古	
				4.0					
							A		
斎 串	5070	N-D46-21、旧大谷川	(314.0) [不明]			上部欠損? 残存部のつけ根に表裏とも切り込みが入っているためあるいは切り残ったものか?	S	古	
				11.0					
				4.0			B		

名 称	遺物番号	出 土 地 点	全 長 幅 (欠損値) 厚さ、高さ (復元値)	分類	特 微		樹種 大取	備 考
					特	微		
					下角29°		B	
					右側が少し薄い。			
					直と平行に切り込みあり			
斎 串	5071	N-D46-22、旧大 谷川	(249.0) [不明] 30.0 6.0		上部欠損 下角29° 表面は丸味を帯びている。		S 古 B	
斎 串	5072	N-D46-22、旧大 谷川	209.0 16.0 6.0		上端一部欠損、ほぼ完形 上角39°、下角39° 切り込みはあか?		S 古 A	
斎 串	5073	N-D46-23、旧大 谷川	(325.0) [不明] 28.0 6.5		上部欠損 下角62° 下端を薄くしている。 下方の幅が少し広い。		S 古 B	
斎 串	5074	N-D46-23、旧大 谷川	(332.0) [不明] 9.0 5.0		両端欠損 奇出あるいは馬形などの 細縄であったと思われる。		S 古 B	
斎 串	5075	N-D46-23、旧大 谷川	(438.0) [不明] 7.5 7.0		両端欠損 両側より交互に切り込み aがみられる。		S 古 A	
斎 串	5076	N-D46-22、旧大 谷川	(115.5) [118.0] 7.5 5.0		両端が数ミリ欠損、ほぼ 完形 表面にはかなり凹凸があ る。 両端は四面削りだが、削 り方が異なる。 上角41°、下角44°		S 古 A	
斎 串	5077	N-D46-23、旧大 谷川	(139.0) [不明] 17.5 7.0		上部欠損 下方に方形の小穴 (2 mm × 2 mm) 下角49° 上方の幅がわずかに広い。		S 古 A	
斎 串	5078	N-D46-23、旧大 谷川	(102.0) [不明] 29.0 7.0		上部欠損、下端一部欠損 下方中央に逆三角形穴 (5 mm × 2 mm) がある。 下角先端28°、全体40° 側面を両側から削って薄		S 古 B	

名 称	遺物番号	出 土 地 点	全 長 幅 (欠損値) 厚さ、高さ [復元値]	分類	特 徴	樹種	備考
					くしている。		
斎 串	5079	N-D 46-23、旧大 谷川	(77.0) [不明] 18.0 7.5	両端欠損	S		
				下方がわずかに幅が狭い。	B	古	
斎 串	5080	N-D 46-23、旧大 谷川	(89.0) [不明] 9.5 7.0	上部炭化欠損、下端一部 欠損 下端は裏面から削りが入 れられている。 側面から見た下角17° 右側が少し厚い。 切り込みは無。	S	古	
					A		
斎 串	5081	N-D 46-23、旧大 谷川	(216.0) [不明] 11.0 6.0	上部欠損、下端21mm欠損 下角8° 下方の幅が狭く、尖って いる。	S	古	
					B		
斎 串	5082	N-D 46-23、旧大 谷川	(235.0) [不明] 25.0 6.0	上部欠損 下角33° 左側が厚い。	S	古	
					A		
斎 串	5083	N-D 46-23、旧大 谷川	(215.0) [不明] 21.0 8.0	両端欠損 上方はやや厚くなってい る。	S	古	
					B		
斎 串	5084	N-D 46-23、旧大 谷川	(255.0) [257.0] 18.5 7.5	上端一部欠損 上角19°、下角28° 下部の幅が広い。	S	古	
					A		
斎 串	5085	N-D 46-23、旧大 谷川	(236.0) [248.0] 20.0 7.0	下端24.5mm欠損、ほぼ完形 下端は炭化している。 焼いてから削った? 上角18°、下角先端23°、 全体33° 切り込み b。	S	古	
					A		
斎 串	5086	N-E 46-12、旧大 谷川	253.5 41.0 4.5	完形品 上角31°、下角59° 左側が厚い。 右側は薄くなるよう面調 整されている。	S	古	
					A		
斎 串	5087	N-D 46-23、旧大	(139.0) [不明]	両端欠損	S	古	

名 称 遺物番号	出 土 地 点	全 幅 厚さ、高さ〔復元値〕	分類	特 微	樹種	備考
					大 取	
	谷川	13.0 3.5			B	
斎 串 5088	N-E46 23、旧大谷川	(139.0) [不明] 10.5 3.0		両端欠損	S 古 B	
斎 串 5089	N-E46、旧大谷川	(174.0) [186.0] 16.0 4.0		両端数ミリ欠損 右側上部一部欠損 下角21°、上角先端27°、 全体18° 切り込みは無。	S 古 B	
斎 串 5090	N-E46、旧大谷川	(164.0) [195.0] 14.0 7.5		下端数ミリ欠損 上端5%欠損 上角25°、下角26° 右側がやや厚い。	S 古 B	
斎 串 5091	N-E46 旧大谷川	(157.0) [不明] 25.0 7.5		上端欠損、下部欠損。 上角24° 切り込みは有か?	S 古 B	
斎 串 610	MG-G 102、旧大谷川	(209.0) [213.0] 18.0 5.0		両端数ミリ欠損、ほぼ平行 上角53°、下角49° 切り込みは無。	S 古 A	
斎 串 611	MG-G 102、旧大谷川	(228.0) [不明] 15.0 6.0		上端欠損、下端部欠損 下角20° 左側が厚い。	S 古 B	
斎 串 612	MG-G 102、旧大谷川	(191.0) [不明] 17.0 2.5		右側欠損、上部欠損 下角50°	S 古 B	
斎 串 613	MG-G 102、旧大谷川	(222.0) [224.0] 23.0 5.0		両先端欠損 上角57°、下角45° 切り込みは a・1対。	S 古 B	
斎 串 614	MG-H 101、旧大谷川	(238.0) [不明] 17.0 2.0		上部欠損、左下部～下端欠損 下角30°前後と思われる。 上方の幅がやや狭い。	S 古 B	

名 称	遺物番号	出 土 地 点	全 長 幅 (欠損部) 厚さ、高さ [復元値]	分類	特 殊	基 種 木 取	備 考
斎 串	615	MG-H 101、旧大 谷川	(243.0) [不明] 22.0 9.5		上部欠損 下角45° 下方の幅が広い。	S B	古
斎 串	616	MG-H 101、旧大 谷川	(62.5) [不明] 14.0 2.5		上部、下部とも欠損 残存部上方は削って薄くしてある。	S B	古
斎 串	617	MG-G 102、旧大 谷川	(144.0) [不明] 19.5 5.5		上部欠損 表面に斜めのスジが5本 ついている。 下角75°	S B	古
斎 串	618	MG-G 102、旧大 谷川	(135.0) [不明] 11.5 3.0		上部欠損 下角15° 下端部が曲っている。	S A	古
斎 串	619	MG-G 102、旧大 谷川	104.5 19.0 5.0		完形品 下角48° 上端は三角形切り欠きである。 左側が厚い。 切り込みは無。	S B	古
斎 串	620	MG-H 101、旧大 谷川	129.0 15.5 3.0		上端部右側欠損 上部45°で削れ、周囲がかなり破損している。 上角84°、下角65° 切り込みは無。	S A	古
斎 串	621	MG-H 102、旧大 谷川	(124.0) [不明] 12.0 4.0		上部欠損、下端2mm欠損 残存部の上方、中央に1つ、下方に2つ穴があいている。 下角35°	S A	古
斎 串	622	MG-H 102、旧大 谷川	(100.0) 16.0 3.5		上部欠損、下端右側を欠損 下角29°	S B	古
斎 串	623	MG-H 102、旧大 谷川	(166.0) [不明] 13.0 4.0		上部欠損、左側面大部分を欠損。 下角27°	S B	古

第 V 章 [特論] 土層について

第 1 節 静岡市神明原・元宮川遺跡断面の土層について（第48図）

静岡県立教育研修所 高 橋 豊

静岡市神明原・元宮川遺跡の西大谷と宮川地区での遺跡発掘断面の地質柱状図は、第48図の A、B のとおりである。第48図の標高 + 400 cm 前後の青灰色粘土層に挟まる植物繊維のみからなる茶褐色腐植層「腐植土A」と、その下にみられ、青灰色粘土と腐植が細かく互層する「腐植土B」の 2 枚 1 組の腐植土は、よく連続する。また、これらの上にくる、茶褐色～黒褐色腐植混り粘土や、標高 + 200 ～ 300 cm の層準にみられる黒色砂層もよく連続し、対比に有効である。

調査地域の海拔高度 + 200 cm 以浅の地層は、北から南へゆるやかに傾斜し、南北 1 km たらずの距離に対して、30 ～ 40 cm 前後の高度差をみると。

遺跡発掘断面にみる土層の層序は、次のとおりである。表層より、茶褐色粘土層（内の土を含む）一灰白色粘土層（元宮川地区では灰白色粘土の薄層をみる砂層を挟んで）一茶褐色～黒褐色腐植混り粘土層一青灰色粘土（「腐植土A」、「腐植土B」を挟む。乾いた露頭では暗褐色に見えることもある）一灰褐色～暗灰色粘土層一黑色砂礫層一紫灰色シルト混り粘土層の順に堆積し、海拔高度 0 m に達している。

調査地点の土層断面には、次の 2 つの課題がみられる。

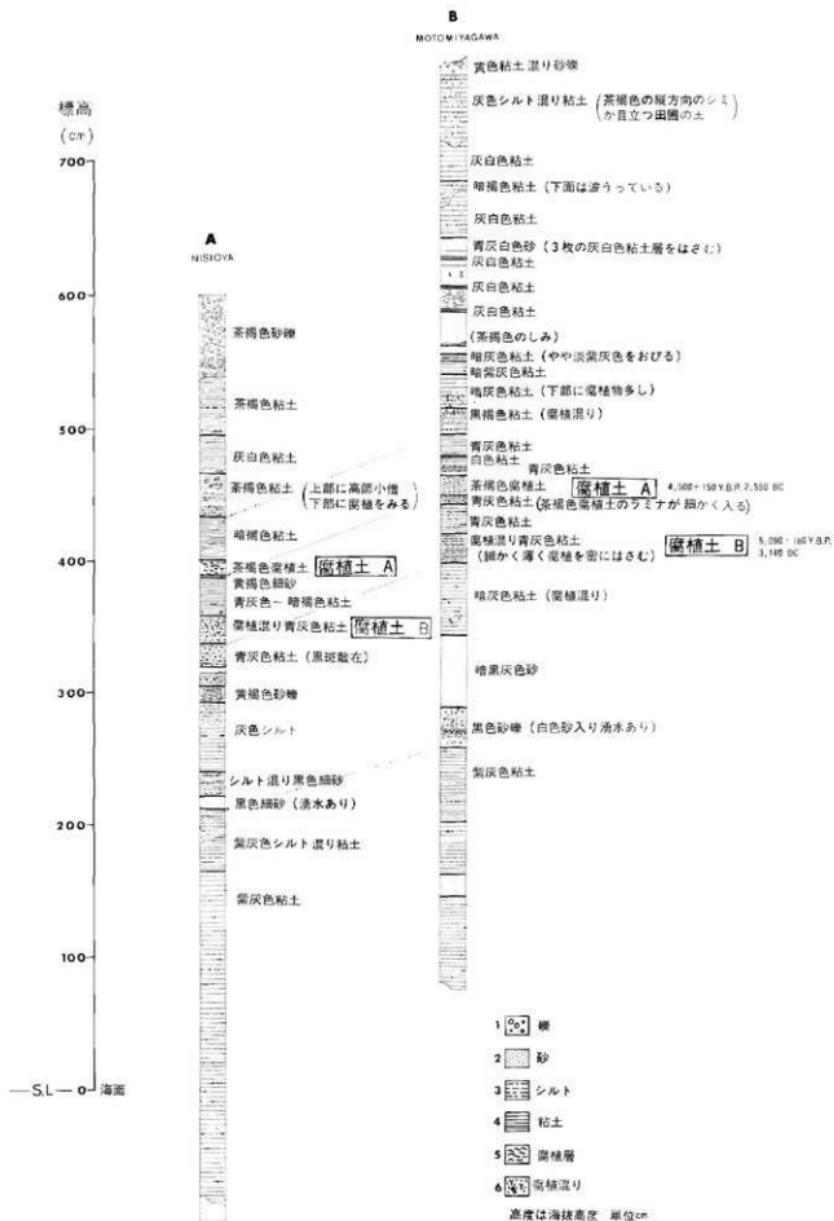
(1) 弥生後期の“登呂遺物包含層”的層準の確認

調査地域の弥生後期の“登呂遺物包含層”的層準は火山灰層を用いて、確認する必要がある。登呂遺跡の土層断面では“登呂輕石層”と呼ばれる天城火山カワゴ平起源の“カワゴ平輕石 (Kgp)”が確認されている。このカワゴ平輕石と富士火山起源の“大沢スコリア (Os)”など、西方に落灰がみられた火山灰で、しかも降灰時期が弥生後期に最も近い値を示す火山灰を用いて、“登呂遺物包含層”で代表される弥生後期の土層の層準がどこにくるかを確かめる必要がある。ちなみに、大沢スコリア (Os) とカワゴ平輕石 (Kgp) の降灰年代については、前者は 2,800 Y. B. P.、後者は 2,900 Y. B. P. 前後と考えられている。

(2) 遺跡が立地した自然環境の解明

調査地点付近の 5 m 等高線の湾曲は、安倍川 東大谷を結ぶ海岸砂丘背後の調査地点付近に、干潟や後背湿地が広がってたことを示している。古文書では、この地域に“弁忍田池”があったとしている。

調査地点に近い登呂遺跡の遺物包含層は“腐植質淤泥層”と呼ばれている。調査地点で見られるこれに相当する腐植混り泥層は腐植混り青灰色粘土から、暗褐色ないし、茶褐色粘土に移り変わる層準に挟まれて存在するとされる。これら腐植を挟む粘土は、静岡平野の沖積層を堆積した純文海進にはじまる海水準の升降にかかわるもので、弥生期の海水準の変動をも反映しているものと考える。そこで、海水、汽水、淡水からなる水域で群集組成を変える珪藻化石に注目し、土層中の珪藻



第48図 静岡市神明原・元富川遺跡断面の地層柱状図（高橋付図）

化石分析をおこない、調査地域の、遺物包含層堆積前後の古環境を調査することによって、遺跡の立地条件を明らかにする必要がある。

第2節 神明原・元宮川遺跡宮川2区の火山灰層について

静岡大学農学部 加藤芳朗

遺跡の遺物包含層の下、数cmないし10cmの位置に、厚さ0.5~1cmの淡褐色の火山灰層が、発掘担当者によって発見された。ルーベで拡大してみると、直徑0.5mm以下のコクス状を保する褐色粒子と白色粒子とが混在している。層は、水平方向に断続し、上から見ると不規則な輪郭をもつまだら模様となって産出する。

原状のままの試料を実体顕微鏡で見ると粒径のよく揃った暗褐色、白色粒子からなる。

この試料を音波処理して細土粒子を破壊し、0.045mmのふるいで水中篩別し、残留分を乾かし、さらに、0.2mmのふるいで乾式篩別した。0.2mmより粗い画分は黒色粒子を主とし、その $\frac{1}{4}$ 程度の赤色粒子と $\frac{1}{5}$ 程度の白色粒子を混える。実体顕微鏡下では、黒色、赤色粒子は小気泡にとみ、火山噴出のスコリアに特有な性質を示す。0.2mmより細かい画分は、カナダバルサムによってスライドガラス上に封じ鈍物顕微鏡で観察した。肉眼で黒色に見えた粒子は火山岩特有の石基構造を呈し、スコリアと判定された。約 $\frac{1}{2}$ 程度の白色粒子はカルシウムに富む斜長石である。

以上の観察事項から、これらの粒子がスコリア質で、富士火山の噴出物に酷似することがわかった。静岡・清水平野において、この程度の深さから出現する同火山の噴出物は大沢スコリアしかないので、問題の火山灰は大沢スコリアと推定される。

大沢スコリア層は静岡市富士見小遺跡で初めて発見された。その後、清水市下野I遺跡でも砂層に挟まれて見出された。今回は3度目の発見である。富士山麓では南西側に広く分布し、その南西限は由比町舟場であった。富士山麓での遺物との上下関係は、(1)関谷塚遺跡で、縄文晩期の大洞A式土器が本層よりわずかに上に重なる砂沢スコリア層の上位から産し、(2)天間沢、戻戸遺跡では縄文後期編之内式土器が大沢スコリア層の下位から出ることがわかっている。従って大沢スコリア層は縄文後期から晩期にかけてのある時点で噴出されたものと思われる。放射性炭素の年代資料からは約2,700年前と推定されている。

静岡・清水平野では、大沢スコリア層の下位にくるカワゴ平軽石層(約2,900年前、天城側火山より噴出)の産出例の方が多い(春呂、汐入、富士見小、有東、下野I遺跡)。富士見小遺跡では、約7cmの厚さの白色粘土をへだてて、上位に大沢スコリア層が、下位にカワゴ平軽石層が並ぶ。下野I遺跡でも、同様な上下関係で砂層中に共存する。本遺跡でも問題の火山灰層の下位に当然、カワゴ平軽石層があつてもよいのであるが、現場では未発見である。ここより北東側の水田では表面下約60cmの位置に確認されている。

第 VI 章 ま と め

I この遺跡は静岡平野の南東部の低地を流れる大谷川流域に位置している。海拔5～8m付近に広がる低湿地遺跡で、その範囲は南北約1km、東西約500mと静岡市内では最大級の面積を確認している。周辺には北西の安倍川扇状地に立地する有東遺跡や登呂遺跡、東の有度山丘陵裾には繩文時代以降各時代を通じた遺跡の密集地域があり、本遺跡はこれらのはば中央に位置している。

本遺跡のはば中央部に、現在の大谷川が貫流しており、蛇行する旧大谷川と交錯している。河川改修工事は、現在の河川幅を広げるとともに深く掘り下げる、コンクリート擁壁を造る（第2図）に事であり、右岸・左岸の堤防下から水出の一部を調査対象としたもので、本年度は幅員10～20m、延長約30～170mという狭い幅の調査区が設定された。（第6・17図）

昭和58年度の大谷川発掘調査の内容は大きく次の2つに分けることができる。

(1) 旧大谷川内の古墳時代～奈良・平安時代の祭祀遺物調査。

(2) 微高地及び微高地末端傾斜面上の古墳時代初頭と奈良・平安～中世の遺構の調査。

この遺跡の最大の特徴は「旧大谷川」の流路跡の発見にはじまる。II大谷川の流路は現在の景観と異なり、大きく蛇行の跡をみせている他、川幅が100mあまり、深さ4mあまりに達する箇所もみられる。この旧大谷川の堆積土層からは古墳時代後期から奈良・平安に至る多量の祭祀遺物が発見され、古代における大規模な「水辺での祭り」が行なわれていたことが確認されたのである。

旧大谷川の両岸に広がる高地上には弥生時代・古墳時代・奈良・平安時代・中・近世にかけての堅穴住居址、掘立柱建物跡、井戸跡、溝、土坑、柵列跡、粘土探査跡など長期間にわたる生活の痕跡が発見された。

II 旧大谷川の流路跡から出土した古墳時代～奈良・平安時代の祭祀遺物の出土量は膨大であり、その種類も多種多様である。静岡平野でこのような祭祀遺物を出土する遺跡は初めてであり、静岡県内で水辺での祭りが行なわれた類例を求めるに伊場遺跡（文献 29・30・33・35）の大清の祭祀遺物群が著名である。他に奈良県碑田遺跡（文献 28）で奈良時代の埋没河川から、木製の人形、斎串、刀形や十馬、人面上器が発見されている例や、長野県箕輪遺跡（文献 11）で、杭列の周辺の砂礫層から斎串・人形・馬形の木製品が発見されている例などが参考となる。

西大谷地区では延長約120mにわたって旧大谷川が確認された。ここでの流路の主軸は北東→南西へ向かい、右岸側を強く攻撃したうえ左カーブを描き、北西→南東の方向へ大きく屈曲している地点であった。（第8図）流路内にはところどころに淵状の窪地がみられ遺物が集中していたり、巾州や岸辺の部分に古墳時代だけの遺物が残存している部分がみられた。これ以外の場所では奈良～平安時代の流れによって、古墳時代の堆積物が流されてしまった箇所が大半で奈良・平安期の遺物が古墳時代の遺物がほぼ等量混在している状態であった。一方宮川地区（2区）での旧大谷川流路は、右岸側の川岸が発見され、ここでの古墳時代の流路は北西→南東→南へという方向がみられる。（第18・25・26・27図）この宮川2区の古墳時代の流路からは6世紀後半～7世紀前半の土器が主体となって発見されると共に

に多量の祭祀遺物が伴なって出土した。ここで古墳時代遺物包含層の上層に中世の包含層が存在し、古墳時代遺物包含層に他の時期の遺物の混在はみられなかった。旧大谷川内からの遺物の出土状態は以上のように奈良・平安～中世の流路に破壊された部分もあるが、古墳時代後期の遺物包含層が良好に残存している部分があり、特に注目される祭祀遺物としては、ト骨・人形木製品・馬形木製品・斎串・獸形土製品（馬・牛）・人形土製品・獸骨類などが伴出したのである。これらの祭祀遺物群のうち人形・馬形木製品の起源は從来7世紀末藤原宮造営直前の大溝より出土したもののが最古とされていた（文献34）のであるが、本遺跡出土のものが年代巾はあるものの最古の例となった。

人形土製品の出土例は県内で浜松市の中津坂上遺跡と阿弥陀遺跡の例が知られているが、全国的にもまれである。今回の調査では古墳時代～平安時代に至る時期のものが出土しているが、時期によってその形態は大きく異なり、他遺跡の出土品にも類似例がみられない。このような点は、人形土製品の型式設定が可能であるか、又、それによる編年が可能であるか、といった問題や、人形土製品の地域性の問題を提起するであろう。又、人形木製品と人形土製品の併存がどのような意味を持つのかということも一つの問題であろう。

人形木製品と人形土製品との関係同様、馬形木製品、馬形土製品の関係も興味深い。材質の違うこれら2種の形代と、獸骨に含まれる馬の骨とのかかわりも問題であろう。又、馬形土製品はその作成技法・形態上の特徴が人形土製品との対応関係を持ちセット関係を形成するようである。獸形の七製品としてはこの他に牛形の上製品が古墳時代の流路より出土している。大谷川では牛形土製品は今のところ1点のみであり全国的にもごく少数の例があるのみであろう。この牛形土製品と馬形土製品との関連も1つの問題である。土製形代類は今後の報告では取り上げなかったが次回に詳しく述べる予定であり、上記の問題点もその時点で考察してみたい。

斎串は古墳時代後期（鬼高期）～平安時代にかけてのものであるが、多くは古墳時代に含まれ、人形同様初期のものである。大谷川出土の斎串の特徴としては、やはり、その形態の多様さが上げられよう。発生当初より多くの形態があるということは、斎串の用途が形態には大きく左右されないか、あるいは用途により形態（種類）が細分化されていると考えることができる。又、一般的に斎串の特徴として側辺の切り掛けが上げられるが、大谷川出土のもので切り掛けのあるものはごくわずかで例外的といってよい。したがって、斎串にとって切り掛けは必須の要素ではなく、時期が下って派生的に発生したものが、最終的に主要な要素になったとも考えられる。今後の検討が必要となろう。

大谷川の祭祀の一端をうかがわせる遺物としてト骨が3点出土している。このト骨を用いた祭祀を考えた時、祭祀の中で占いの役割や目的、占いの主体者の社会的地位といったことが問題として生まれてくるであろう。

以上の祭祀遺物の他に文字資料として木簡1点と墨書き土器が旧大谷川内より出土した。木簡は「^{アサヒ}田里戸主宇刀マ真酒」と書かれており、「倭名類聚抄」によれば当時、駿河の国守代郡に内屋、間喰、^{アサヒ}田、新居、託矢、^{アサヒ}見、會屋の七郷があったとされる。現在、静岡市内には安倍川の右岸側に「長田」の地名が残るが、古代のこの地の位置は現在確定できていない。この木簡の出土によって、短絡的に「^{アサヒ}田里」の位置が決まることにはならないが、今後、古代行政区画を知る手がかりとなるであろう。また、

この木簡は海岸にほど近いこの地が物資の集散地、あるいは消費地であった可能性をも示している。

墨書き器の中で注目されるものは「川人」の文字の書かれたものである。この文字の例は現在いくつか知られているが農耕祭祀に關するものとも考えられている。

昭和58年度 神明原・元宮川遺跡遺構一覧表

西大谷地区

		遺構	1区	2区	合計
中世	溝状遺構		8	9	17
	土坑状遺構（小穴・柱穴を含む）		2	17	19
	掘立柱建物址			1	1
	柵列状遺構			1	1
	粘土探掘跡			3	3
古墳時代～近世	護岸杭列		1		1
	溝状遺構		7		7
	土坑状遺構		5		5
	炉址＝焼上		4		4
	集石遺構		1		1
古墳時代～近世		旧 大 谷 川	有	有	有
合		計	28	31	59

宮川地区

		遺構	1区	2区	合計
中世	溝状遺構		3		3
	土坑状遺構（小穴・柱穴を含む）		23		23
	掘立柱建物址		2		2
	柵列状遺構		1		1
	井戸		4		4
近世	護岸杭列			1	1
	道路状遺構		1		1
古墳時代～近世		旧 大 谷 川	有	なし	
合		計	34	1	35

総合計 94

Ⅲ 微高地上の調査については、河川改修に伴う調査であるため、調査区が南北に細長く東西の幅がごくせまい上、包含層が浅く、遺構面上面まで耕作の影響を受けている部分が随所にみられ、さらに古墳時代～中世の遺構が複雑に切り合い、古い遺構が破壊されている部分が多いといった悪条件が重なり、遺跡の全体像を明確につかむことは困難であった。そのようななかでも、西大谷地区南部で発見された溝（S D15）からは、古墳時代初頭の土器の一括資料を得て、静岡平野の当該期のセット関係を知ることができた（第29図）。

粘土探査跡は、中世以降のものであり、目的とする粘土を層理に合せて探査しており、中世の産業史を考える上で重要な資料となる。

IV 他に断片的な資料ではあるが、縄文時代の遺物が若干出土している。晩期の清水天王山式の土器片や磨石・凹石・黒曜石碎片であるが、静岡平野の低湿地から発見されたのは初めてである。本遺跡の東、有度山丘陵（通称「日本平」）の東側、清水市の沖積平野に面する有度山の扇状地には、縄文時代後期～晩期・弥生中期の住居址などが発見された清水天王山遺跡がある。

今回の資料は断片的であり、縄文遺跡の中心部からは、はずれていると考えられるが、遺跡のあり方を知る上で興味ある資料となった。

以上が今季調査の成果のおよそのまとめであるが、旧大谷川が古代において重要な祭祀の場であったことを明らかにしたことが最大の成果であったといえよう。今回は十分な考察ができず、問題提起のみで終ってしまったが、調査は今後も継続して行われる予定であり、その成果をふまえて提起した問題を考察することとしたい。

参考文献

1. 静岡県 1930 : 「有度山西麓の遺跡」『静岡県史』第1巻
2. 静岡市 1931 : 「原始時代の遺跡」『静岡市史』第1巻 P30～31第2節
3. 静岡郷土研究会公 1935 : 「有度山の地形に就いて」『静岡県郷土研究』第5輯
4. " 1935 : 「有度山塊の考古学的調査」『静岡県郷土研究』第5輯
5. 加藤利秀・岸沢長介 1938 : 「静岡市有東杉駒馬塚古墳築造式遺跡——特に右器に就いて——」考古学
9 - 9
6. 日本考古学会編 1949 : 登 呂
7. 杉原莊介 1951 : 「静岡市有東第1遺跡」日本考古学年報1
8. 静岡市教育委員会 1953 : 後藤守一・斎藤忠『静岡駒馬塚古墳』
9. 日本考古学会編 1954 : 「齊呂本紀」
10. 杉原莊介 1954 : 「静岡駒馬塚古墳曲金退跡」日本考古学年報2
11. 藤沢宗平 1955 : 「長野県上伊那郡箕輪道路について」信濃 第7巻2号
12. 清水市郷土研究会 1960 : 和島誠一・市原恭文他『清水天王山遺跡』
13. 雄原村教育委員会 1961 : 内藤見・大塚初重『三池平古墳』
14. 筱岡古教育委員会 1962 : 望月董弘・手島四郎『駿河九山古墳』
15. " 1963 : 望月董弘『駿河伊庄谷横穴墳』静岡考古館研究報告 第二集
16. " 1963 : 望月董弘・手島四郎『駿河伊庄谷横穴墳』
17. " 1963 : 『静岡県の古代文化』静岡県文化財調査報告書第2集
18. " 1966 : 『片山廢寺跡第3次発掘調査報告書』
19. " 1966 : 『駿河片山廢寺調査略報 東名高速道路建設に伴う発掘調査』
20. 望月董弘 1967 : 『駿河駒ノ内山古墳群』静岡考古館

21. 浜松市教育委員会 1971 : 「伊場 第四次調査月報」4、6
22. 望月 草 哉 1973 : 「神明原遺跡出土の土器」『上野式土器集成本編』3 P68~70, PL 111
東京堂出版
23. 望月 草 哉 1973 : 「駿河 連田古墳」静岡英和女学院
24. 静岡市立登呂博物館 1975 : 「駿河宮川遺跡(第1次発掘)」
25. 辰巳 和 弘 1975 : 「有度山北麓の古墳」静岡県立焼津中央高校郷土研究部
26. 黒崎 直 1976 : 「斎弔考」古代研究10 P23~34
27. 神沢 男一 1976 : 「弥生時代、古墳時代および奈良時代のト骨・ト甲について」駿台史学38
28. 村原考古学研究所 1977 : 「神田遺跡発掘調査概報」『奈良縣遺跡調査概報』1976年度一一
29. 浜松市教育委員会 1977 : 「伊場遺跡 遺構編」
30. 浜松市教育委員会 1978 : 「伊場遺跡 遺物編I」
31. 静岡市立登呂博物館 1979 : 「駿河井庄段古墳」静岡市教育委員会
32. 静岡県考古学会 1979 : 「子塚惠器——古代陶質土器——の編年」静岡県考古学シンポジウム2
33. 浜松市教育委員会 1979 : 「伊場遺跡出土品解説目録」
34. 金子 裕之 1980 : 「古代の木製模造品」研究論集VI 奈良国立文化財研究所学報38 P11~20
奈良国立文化財研究所
35. 浜松市教育委員会 1980 : 「伊場遺跡遺物編2」
36. 静岡市教育委員会 1982 : 「駿河 豊田遺跡 静岡市外局建設用地内遺跡発掘調査の報告」
37. 静岡県教育委員会 1983 : 「伊庄谷横穴群」
38. 辰巳 和弘 1983 : 「静岡県中部における群集墳の一形態——谷田古墳群第8支群——」
地方史静岡 第8号 静岡県立中央図書館
39. 通産省工業技術院 地質調査所 1956 : 「静岡県安倍川水系工業用水水理地域調査報告」地質調査所月報(第7卷 12号)
(第3回 安倍川、巴川流域の基盤地質および自噴帶の水理図)
40. 静岡県教育委員会 1979 : 「静岡県遺跡地図」「静岡県遺跡地名表」
41. 東野 浩之 1977 : 「藤原宮木簡の書風について」ミュージアム314号
42. 静岡県瓦山課 1982 : 「大谷川史」

図 版



1. 神明原・元宮川遺跡
航空写真一南より



2. 神明原・元宮川遺跡
航空写真一南より



1. 西大谷地区を上空より望む—北より



2. 西大谷地区を上空より望む—西より



1. 西大谷地区発掘全風景—南より



2. 西大谷地区表土除去開始—南より



1. 34列～39列 中世道
構面精査開始一北より
(西大谷地区)



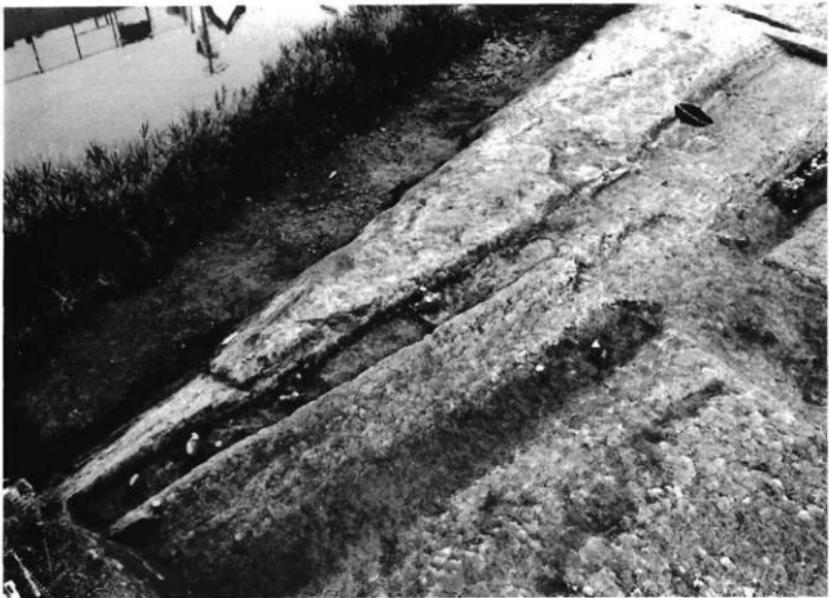
2. 34列～39列 中世道
構面一南より
(西大谷地区)



1. SD5, SD6, SD12 溝状
遺構 南より
(西大谷地区)



2. SD5 溝状遺構-南
より
(西大谷地区)



1. SD9 溝状造構一南より（西大谷地区）



2. SD9 溝状造構とその表面一北より
(西大谷地区)





1. 34列～38列 古墳時代遺構面一南より
(西大谷地区)



2. 34列～38列 古墳時代遺構面一北より
(西大谷地区)



1. SD24 满状造構一
西から
(西大谷地区)



2. SD24内 木製遺物出
土状態
(西大谷地区)



1. S×60 集石状遺構一束からI35グリッド（西大谷地区）



2. 古墳時代初頭の土器分布状態I34グリッド（西大谷地区）



1. 古墳時代初期土器及
び縁分布状態—I35
グリッド
(西大谷地区)



2. 古墳時代初期土器及
び縁分布状態—J35
グリッド
(西大谷地区)



1. G37・G38グリッド付
近 古墳時代遺構面
—北より
(西大谷地区)



2. G37グリッド付近
古墳時代遺構面—東
より
(西大谷地区)



1. G36 - G37グリッド付
近 古墳時代造構面
北より
(西大谷地区)



2. 手前よりSF1・SF4
SF3 土坑状造構
北より
(西大谷地区)



1. SD15 溝状遺構一北
より
(西大谷地区)



2. SD15 溝状遺構一南
より
(西大谷地区)



1. SD15 溝状遺構埋土
上層土器出土状態
(西大谷地区)



2. SD15 溝状遺構埋土
上層土器出土状態
(西大谷地区)



1. 39列～44列 旧大谷
川河床面 - 北より
(西大谷地区)



2. 39列～44列 旧大谷
川河床面 - 南より
(西大谷地区)



1. SL21 護岸状遺構
西より
(西大谷地区)



2. SL21 護岸状遺構
南より
(西大谷地区)

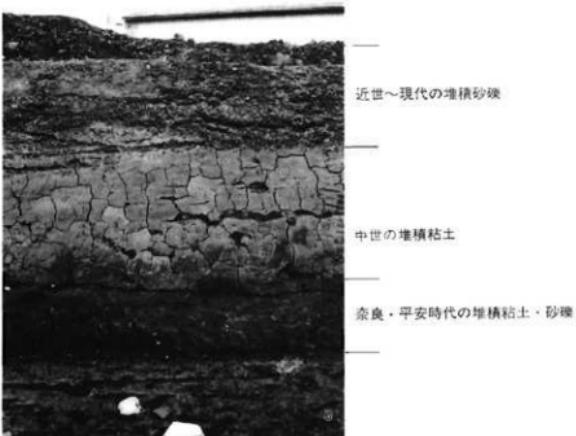
1. 第4トレンチ 断面
—北より
(西大谷地区)



2. 第4トレンチ 断面
旧大谷川内堆積状態
—北より
(西大谷地区)



3. 発掘区西壁 旧大谷
川内堆積状態一東よ
り
(西大谷地区)





1. F40, 41, 42, G40, 41.
グリッド付近 旧大
谷川内河底堆積状
態一南から
(西大谷地区)



2. F41グリッド付近
旧大谷川奈良時代以
降流路一南より
(西大谷地区)



1. F42, 43グリッド付近
旧大谷川古墳時代後
期流路—北より
(西大谷地区)



2. F42グリッド付近
旧大谷川古墳時代後
期流路—南より
(西大谷地区)



1. E42, F43クリッド付
近 断面に見られる
旧大谷川流路実遺状
態—南より
(西大谷地区)



2. F43クリッド杭付近
古墳時代流路堆積土
(西大谷地区)



1. H38.39グリッド 遺物
出土状態一東から
(西大谷地区)



2. H39グリッド 遺物
出土状態一東から
(西大谷地区)



1. 第1トレンチ内 牛形土製品出土状態—G41グリッド
(西大谷地区)



2. 馬形土製品出土状態—E42-20グリッド
(西大谷地区)



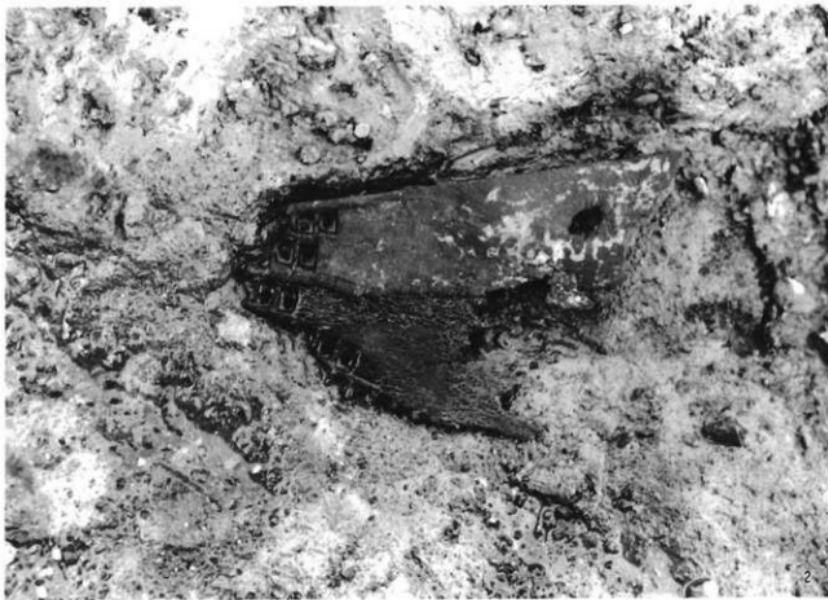
3. 人形土製品出土状態—E41-Sグリッド
(西大谷地区)



4. 木簡出土状態—E43-14グリッド
(西大谷地区)



1. ト骨と伴出土器出土
状態 F42グリッド
(西大谷地区)



2. ト骨出土状態 F42グリッド (西大谷地区)



1. 獣骨出土状態 E41-9グリッド（西大谷地区）



2. 獣骨出土状態 F41-5グリッド
(西大谷地区)



1. F42グリッド付近
遺物出土状態
(西大谷地区)



2. 重なって出土した土
器器底と壺-F42グ
リッド
(西大谷地区)



1. 鋸形木製品・木製模
造刀出土状態-F42
-2. F43-22グリッド
(西大谷地区)



2. 舟形木製品出土状態
E43グリッド
(西大谷地区)



3. 猿の柄出土状態-ト
43-9グリッド
(西大谷地区)



1. E42-D43土手付近
遺物出土状態
(西大谷地区)



2. E43-D43土手付近
遺物出土状態
(西大谷地区)



3. E43-D43土手付近
遺物出土状態
(西大谷地区)



1. 土器出土状態--E43
グリッド
(西大谷地区)



2. 漢高環出土状態
E43グリッド
(西大谷地区)



1. 土器出土状態—D45
グリッド
(西大谷地区)



2. 須恵器大形壺出土状
態—D45-2グリッド
(西大谷地区)



1. D46-E46グリッド付
近 旧大谷川右岸部
—南東より
(西大谷地区)



2. D46グリッド付近
旧大谷川右岸部堆積
土—E47杭～E48杭断
面
(西大谷地区)



3. D46-E46グリッド付
近 旧大谷川右岸部
—西より
(西大谷地区)



1. 旧大谷川右岸部遺物出土状態一北より D46 グリッド（西大谷地区）



2. 旧大谷川右岸部土器
出土状態一東より
D46 グリッド
(西大谷地区)



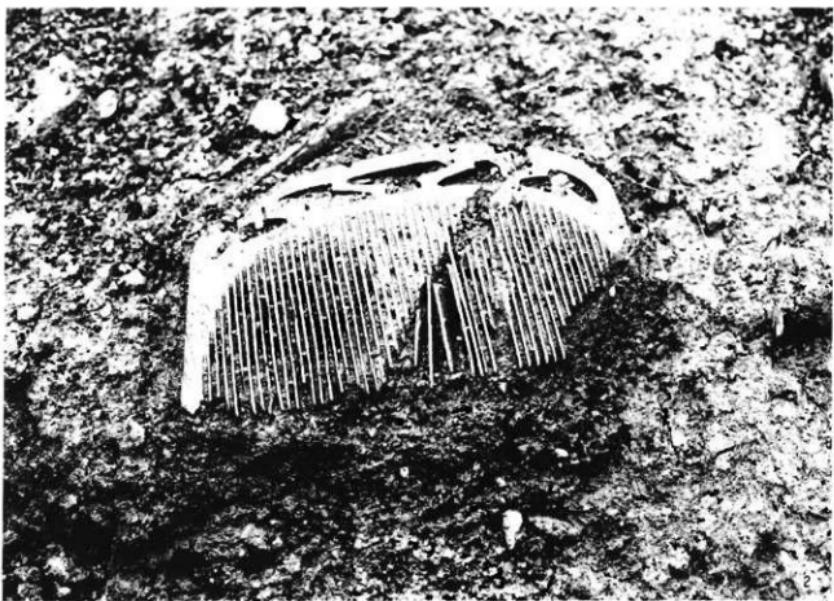
1. 斎串出土状態—D46グリッド（西大谷地区）



2. 人形・斎串出土状態—D46グリッド（西大谷地区）



1. 斎串等木製品出土状態—D46グリッド（西大谷地区）



2. 横樋出土状態—D46グリッド（西大谷地区）



1. 旧大谷川右岸部遺物
出土状態一東より
D46グリッド
(西大谷地区)



2. 旧大谷川右岸部遺物
出土状態一北西より
D46グリッド
(西大谷地区)



1. D46グリッド 鑿出
土状態
(西大谷地区)



2. D46グリッド 鑿出
土状態
(西大谷地区)



3. D46グリッド 鑿出
木製品出土
状態
(西大谷地区)



1. D46グリッド 篠出
土状態
(西大谷地区)



2. D46グリッド 曲物
容器出土状態
(西大谷地区)



1. 46列～50列の中世遺
構面一南より
(西大谷地区)



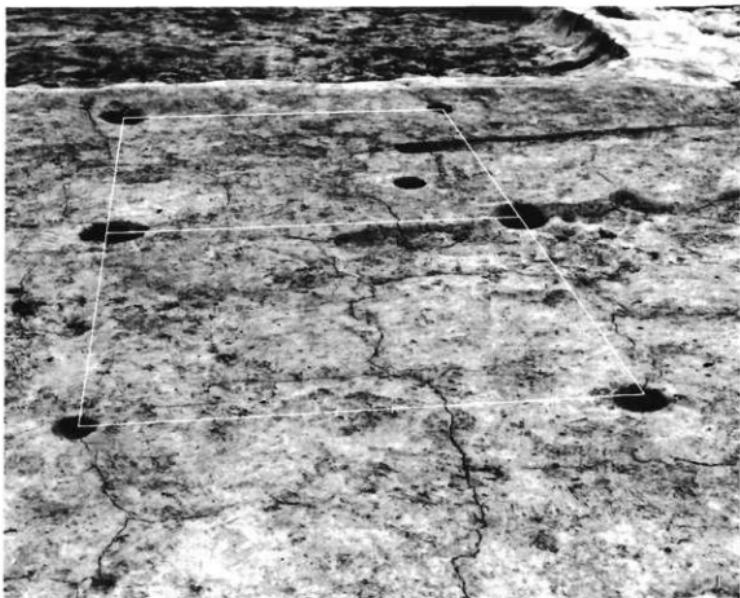
2. 46列～50列の中世遺
構面一北より
(西大谷地区)



1. SD28溝状遺構一北
より
(西大谷地区)



2. SD29溝状遺構 南
より
(西大谷地区)



1. SH39 捨立柱建物址
—北より
(西大谷地区)



2. SP32 土坑状遺構—東より (西大谷地区)



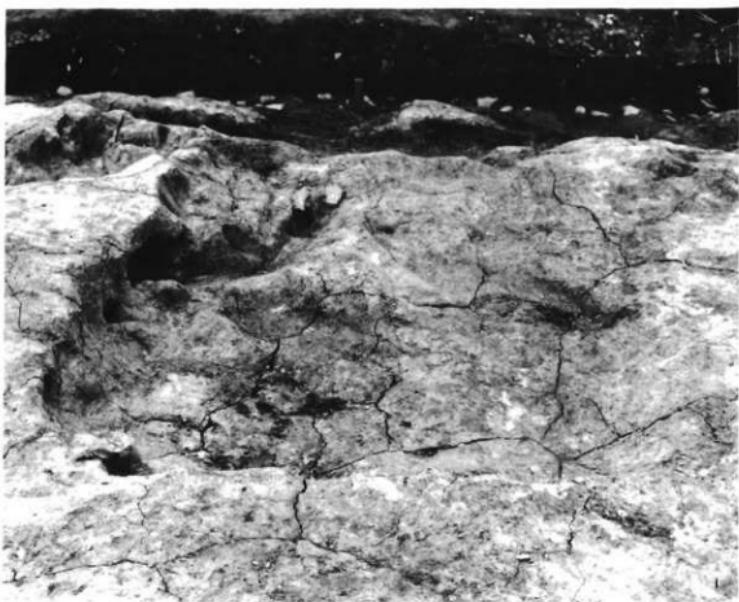
3. SP38 柱穴状遺構—北より (西大谷地区)



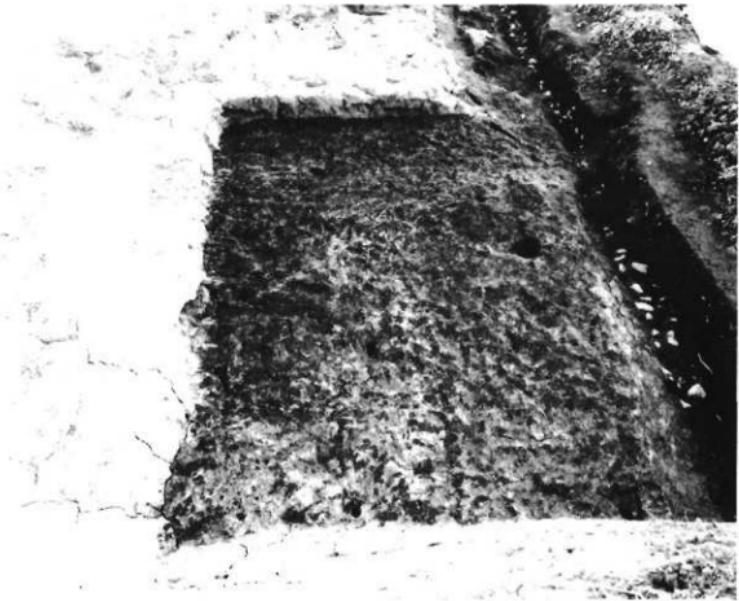
1. SX25 粘土採取跡
(西大谷地区)



2. SX25 壁面状態
(西大谷地区)



1. SX34 粘土採取跡
(西大谷地区)



2. SX36 粘土採取跡
(西大谷地区)



1. 宮川 1 区調査開始
—東より



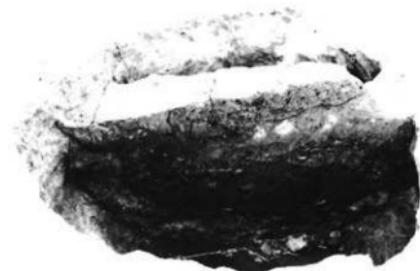
2. 宮川 2 区調査開始
—南より

1. 宮川上区奈良・平安
時代遺構面全景
—南より



2. 宮川上区奈良・平安
時代遺構面全景
—北より





1



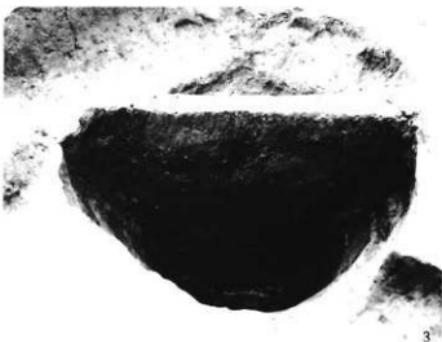
4



2



5



3

1. SE 1 井戸状遺構一東より(宮川I区)
2. SE 2 井戸状遺構一東より(宮川I区)
3. SE 3 井戸状遺構一北より(宮川I区)
4. SP II 土坑状遺構一北より(宮川I区)
5. SP III 土坑状遺構一北より(宮川I区)



1. SD4 溝状遺構
—西から
(宮川1区)



2. SD4 溝状遺構断面
—東から
(宮川1区)



1. SD5 溝状造構一両
より
(宮川1区)



2. SD5 溝状造構断面
一両より
(宮川1区)



1. SE 6 井戸一西より
(宮川 1 区)



2. SE 6 井戸一北より
(宮川 1 区)



3. SE 6 井戸一南より
(宮川 1 区)



4. SE 6 井戸一内部
(宮川 1 区)



1. 調査完了状態—南より
(宮川 2 区)



2. 調査完了状態—北より
(宮川 2 区)



1. 中世杭列—南東より
(宮川2区)



2. 旧大谷川内 堆積粘
土中遺物出土状態
(宮川2区)



1. 遺物出土状態—南より
(宮川2区)



2. 木製品出土状態 (宮川2区)



SD15溝状造構
埋土上層
一括出土土師器



1



2



3



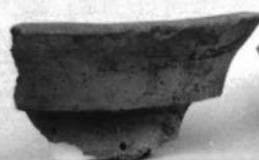
4



5



6



7



8



9

SD15溝状造構
埋土上層
一括出土土師器



10



11



12



13

SD15溝状造構
埋土上層
一括出土土師器



14



15



16

西大谷地区
旧大谷川内
出土須恵器



19

20

21

22

西大谷地区
旧大谷川内
出土須恵器、
山茶碗



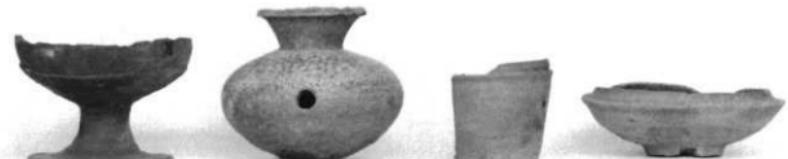
23

24

25

26

西大谷地区
旧大谷川内
出土須恵器



27

28

29

30

西大谷地区
旧大谷川内
出土灰陶器



31

32

33

西大谷地区
旧大谷川内
出土須恵器



34

35

36



西大谷地区
旧大谷川内
出土須恵器

38



西大谷地区
旧大谷川内
出土灰陶器

37

西大谷地区
旧大谷川内
出土土師器

58

西大谷地区
旧大谷川内
出土土器



39

40

41

42

西大谷地区
旧大谷川内
出土土器



43

44

45

46

西大谷地区
旧大谷川内
出土土器



47

48

49

西大谷地区
旧大谷川内
出土土器



50

51

52

西大谷地区
旧大谷川内
出土土器



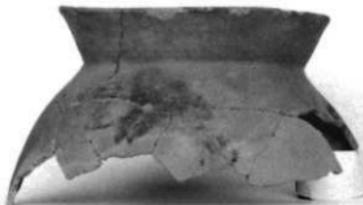
53

54

55

56

57



西大谷地区
旧大谷川内
出土土器

59



60



宮川 2 区
旧大谷川内
出土土器

62



63



64



65



66



宮川 2 区
旧大谷川内
出土須恵器

67



68



69



宮川 2 区
旧大谷川内
出土須恵器

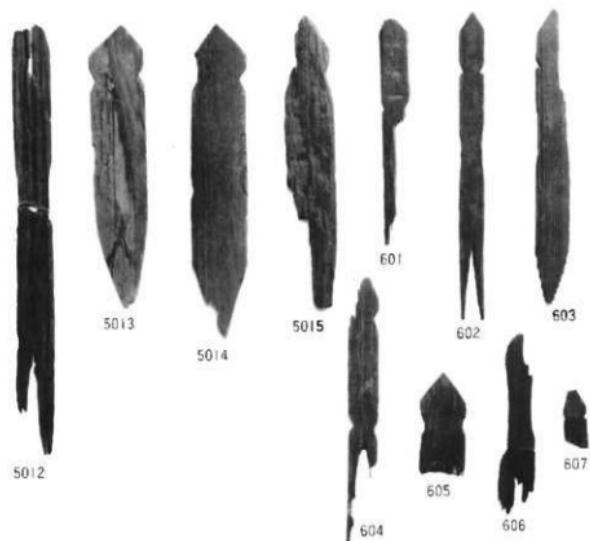
70



71



西大谷地区
F39・D43-D46
グリッド出土
人形



西大谷地区
D46グリッド
宮川2区
出土人形

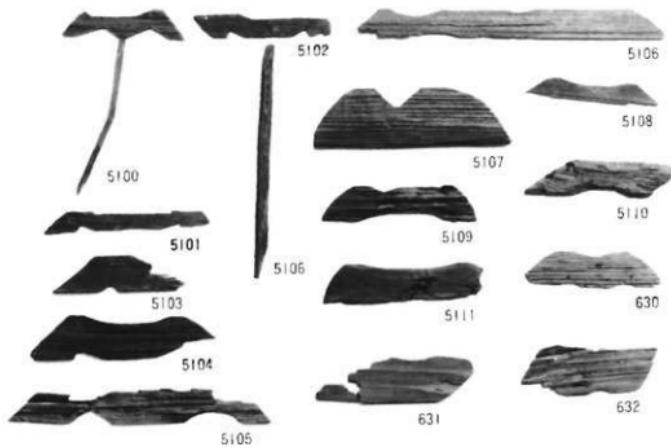


5095

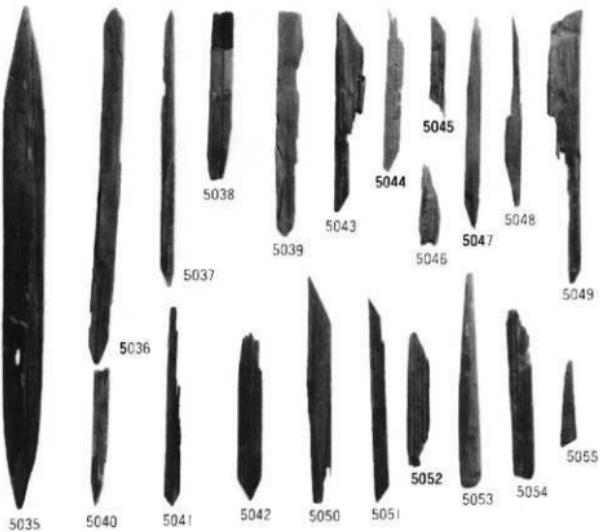
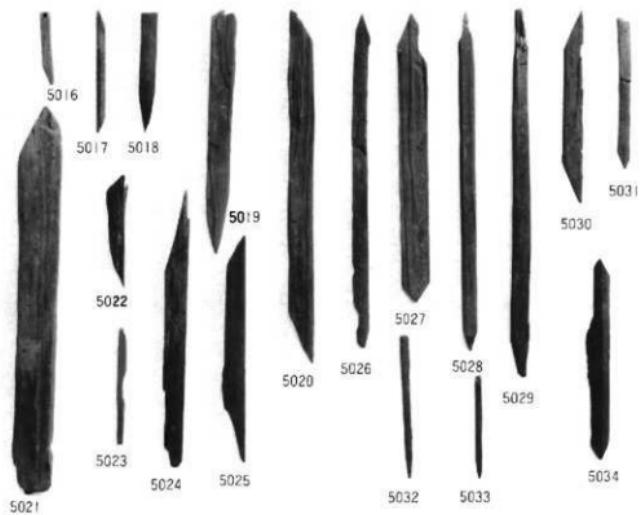


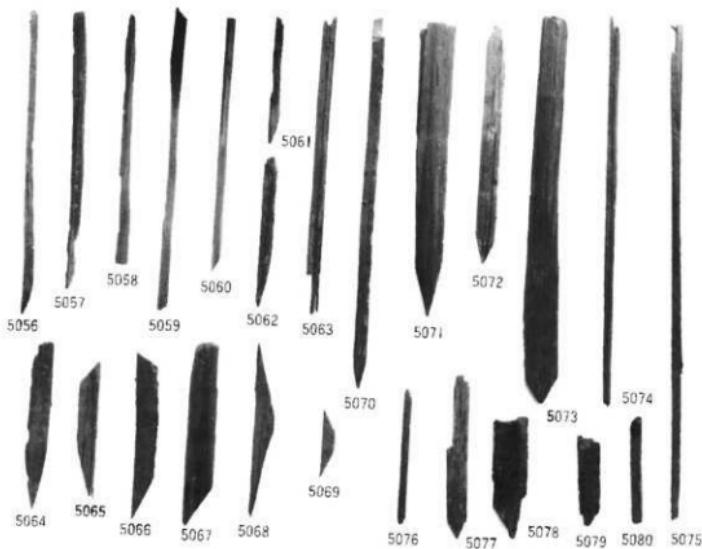
5094

西大谷地区
旧大谷川内出土
大形人形・馬車



西大谷地区
宮川地区
旧大谷川内
出土馬形木製品

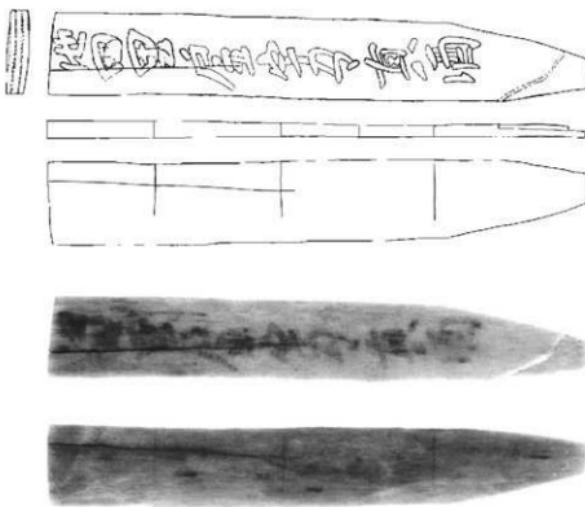




地名	身分	人名
オサグノサト	ヘヌシ	ウトベノマサケ

他田里 戸主 宇刀マ真酒

一部



第1号木蘭(写真・見取図・ほぼ原付大)

大 谷 川 I

昭和58年度巴川(大谷川)総合治水対策特定河川事業
埋蔵文化財発掘調査報告書(神明原・元宮川遺跡)

昭和59年3月28日

編集発行 財団法人 琴府博物館付属
静岡埋蔵文化財調査研究所

印 刷 所 株式会社 三 創
静岡市中村町166番地の1
TEL (0542) 82-4031